
溟楼綺譚

上遠野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

溟楼綺譚

【Nコード】

N5840J

【作者名】

上遠野

【あらすじ】

身代わりとして売られていった友を捜す為に、皇都随一の遊郭”
溟楼庵”を訪れた佐波。偶然居合わせた火事で一人の少年を救った
ことから、佐波は国家絡みの陰謀に巻き込まれてしまい…異世界遊
郭綺譚。

*見た目平凡系ヒロインが（肉体的に）痛々しい目に遭います。苦
手な方はご注意ください。王道（？）ヒーローのようなヒロインが
好きな方向きかもしれません。

——雪が、散らついていた。

白い地面に膝を折り、薄い衣服を粉雪に濡らして、二人の子どもが、雪よりも果敢ない約束を交わした。

「必ず、私を迎えにきて下されると、約束して頂けますか。」

震える少年の手を、更に小さな手で包みながら、少女は固く頷いた。涙は既に凍っていた。少年の睫毛に降り立った雪が、場違いに輝いていたその情景を——

——少女は、決して忘れる事は無かった。

溟楼綺譚 「めいろうきたん」

夕闇刻をとくに過ぎた、間夜ヶ刻。

その重たい闇を押し上げる極彩色の提灯が、其処彼処「そこかしこ」に揺れている。

何処からともなく上がる喧噪、嬌声、笑い声。

荷馬車が10両は並列で通れそんな大通りに添って、どのようにして建てたのかも分からない、豪奢な木造作りの軒がずらりと並んでいる。

自分の影さえ鮮やかに地面に広がるその場所で、硬直したまま動けないでいる少女の横を、安く見積もって一陽期（一年）分の給金以上の召物に身を包んだ恰幅のいい男性と、その腕にしなだれかかる、いと麗しき優艶な美女が、まるで少女に気付きもしない様子で通り過ぎて行った。

——美女からふわりと香ったこの甘い芳香は、”ここ”特有の、媚薬効果があるといわれる”紫杏香「しあんこう」”だろうか。

呆然としていた少女は、ようやく回り始めた思考をどうにか繋ぎ止めて、ぐっと顎を引いた。

立ち止まっている暇はない。

そう、一刻だって無駄には出来ないのだ。

今日という好機は、きつと二度と巡ってはこないだろう。ならば、

せめて精一杯。

横顔に決意を滲ませて、少女はここ、皇都随一と名高い遊郭街に足を踏み入れた。

状況を整理しよう。

少女の名前は、佐波「さわ」という。

年の頃は数えて17。かつては布津「ふつ」と詠われた名門貴族の子女だった。

それが没落したのは、佐波が12の冬。

当代一の賭博好きであった彼女の父がこしらえた借金は、これもまた当代一であった。

家や土地、株券を売り払い、一家一族、その使用人に至るまで全て離散。

当事者である父親は蒸発し、名高い貴族出であった母親は、人に媚びてまで生きることを厭い、自害した。

他の兄妹たちは、それぞれに急ぎ嫁いで行ったり、またはどこかの貴族の使用人として雇い入れられることとなり、少女もまた家の伝手を辿って、地方豪族の端女「はしため」として、どうにか今日まで生き延びる事が出来た。

佐波が世話になっている屋敷は布津の南にあり、ここ王都までは馬で2日半、馬車だと4日ほどかかる。

王都へは商談の為、一族の代表として長男と三男が遣わされて来たわけだが、約一星期「一週間」の滞在の最終日前夜である今日になって、三男が遊郭に行きたいと言い出した為に、こうして佐波を含む数名が、急遽お付きとして従ったというわけだ。

長男と違い気性の荒い三男坊に付き従うのは容易なことではなく、お役目の話が出た時は使用人同士で押し付け合い、一時は陰悪な雰囲気にもなったのだが、ここぞと手を挙げた佐波に、仕方なく付き

合つてくれる形で数名の雇われ用心棒がお供することになった。

佐波としては、これは願つても無い機会であつたので、懐深い用心棒たちには大変申し訳なく思いながらも、実に澆刺とした思いで皇都一と謳われるこの遊郭街へと足を運んだのだつた。

そんな佐波を後押しするように訪れた好機――上機嫌の三男坊が、

佐波たち使用人に少しばかりの遊金を渡し、「好きに使え」と――

――そして「俺の後を付いてくるな。長兄へは決して告げ口するな。」

と言うなり、使用人を街の関所（遊郭街は高い塀と二つの門に挟まれている。そこでは厳しい身元の調査があり、武器となり得るあらゆるものを預けなければならぬ。）に置き去りにして一人、遊郭の灯りの中に消えて行つた――に、心踊らせ、思い思いに散る使用人達と同じ様に、佐波は遊郭街へと足を踏み入れた。

そしてそのあまりの豪華絢爛さに、呆然と立ち尽くした冒頭へと話は戻る事になる。

如何にも田舎から上つてきた使用人風の佐波は、誰にも視線を貰う事無く、ただ立ちそびえる遊郭を見上げては提灯の”印”を確認するという作業を、端から続けていた。

――確か、めいろうあん、と聞いたはずだけれど…

何せ使用人同士が交わす、風より軽い噂話のことだ。ガセである可能性もある。

もちろんそんなことは百も承知しているのだが、それでもその僅かな希望に少女は懸けていた。

――無事で、いるだろうか。

噂話が、本当に根も葉もない”噂”であつても構わない。
ただもしそれが本当だとしたら、無事でいるのか、それだけでも確認したい。

——以織「いおり」。

今でも、瞼の裏に描ける友の姿。
名貴族一族の子女である佐波と、佐波の家の使用人の子であつた少年とは、身分も立場も隔てられてはいたが、心から信頼し合える友達であつた。

——けれど。

あの冬、凍てつくような寒い日に、少年は”売られて”いった。

他でもない、佐波の身代わりとして。

1（後書き）

はじめまして、上遠野^{かどの}です。

異世界ファンタジーが好きで、自分で書き始めたら

どういうわけか剣も魔法もほとんど関係のないものに…

更新はかなりのんびりになるかと思っていますので

どうぞ気長にお付き合いください。

佐波の父親のつくった借金は、家・土地・その他全てを売り払っても尚補えぬほどの巨額であつた。

当の本人はとづくに蒸発していたが、借金取りは引つ切り無しに残された家族の元を訪れ、夫の裏切りに心身ともに疲弊していた母親にこう囁いた。

『借りたものを返さぬがお貴族様の礼儀ではないでしょう。家も土地も何もないこの家に残されたものといえば、”あなた”か、もしくは”子ども”か——』

没落した貴族の婦人や子どもが遊郭に売られて行くというのは、割とよくある話だつた。

だから佐波は、家が傾いた時からその覚悟を決めていた。

けれど母親は違った。名門貴族の出である母は、自分が辱められる存在となることを、決して受け入れられなかった。

『私には無理です。私、には』

母親の視線が他の兄妹を越えて、佐波でピタリと止まったのは、仕方がないことだ。

佐波は、父親の浮気に痺れを切らした母が、母とその愛人の間に作つた子どもだつた。

その事実は公には伏せられており、佐波は名門貴族の子として育つたが、内情は館の全ての者——館の主である父でさえ知っていた。そしてもちろん、佐波もそれを幼くして理解していた。

血を継がぬ子を疎む父親と、一時の気まぐれで作つた罪の象徴である子を厭う母親。

兄妹の中で、一番最初に見切られる者が誰であるか、佐波に分からないはずがなかった。

『母様、私が参ります』

母親の視線を受けて、佐波が一步前に出る。

途端に凍り付いていた室内の温度がにわかに緩んだのは、皮肉なものだった。

『ならば、すぐに準備を』

それで話は決まった。

仲買人である借金取りは、佐波の、貴族とは思えぬ地味な容姿に不満気な息を吐いたが、容姿よりもその幼さに渋々金を払うようだった。

どの時代にも、幼い子どもを好む性癖の金持ちはいる。

特に豊満な美女に飽いた金だけは持つ好色家などには、案外に受けがいい。

支度金として幾ばくかの手付金を貰った母は、だがそのプライドがそれっぽっちの金を喜ぶ事を拒んだのか、つんと澄ました顔で佐波に支度を促した。

『貴方は今から、この家の子ではありません。我が一族から遊女が出たとあらば、末代までの恥。よいですね』

母の言葉に、佐波は子女の礼儀通りに、屈んで頭を下げた。

支度の為一人、自身の部屋に戻ると、何故だか先に使用人の子であり唯一の友人である以織が部屋で待っていた。

もちろん、普段なら使用人が家人の部屋に入るなど、有り得ていい

ことではない。

しかし状況が状況であるだけに、佐波が驚く事はなかった。

『——姫様が行かれるのですか』

どうやら、話が筒抜けだったようだ。

きっと少年だけではなく、全ての使用人に伝わってしまったのだろう。

使用人には聞かせられないと、金銭に関わる事は全て家族内で話し合われていたのだったが、そんな虚勢はとっくに見破られていた。既に事情を察した幾人もの使用人が暇を申し出て家を去っていたし、佐波の記憶が確かなら、使用人であった以織の家族もまた、数日後にはこの家を去るはずだ。

見送るはずの自分が、ここで見送られる立場になるとは。

佐波は、自分よりも幾つか年上の少年に、照れ笑いを浮かべてみせた。

『私が買われるなんて。向こうは美人じゃなくてガツカリしているようだったけど』

請われて買われて行くのではなく、致し方なく買われて行くなんて情けない気持ちにもなる。

けれど、そんなことを気にしていても仕方が無い。

買われる立場となった少女よりも、更に青ざめた顔の少年の為に、

佐波は気丈に振る舞った。

『でも、きつとどうにかなると思う。私、結構力持ちだし、逃げ足も速いし、それに、遊郭なんてちよつと面白そう』

後半は少し本音だ。

都の遊郭は、それはそれは美しい場所だと、昔館に滞在していた行商人が話してくれたのを佐波は覚えていた。

——遊郭ってのは、この世に存在するありとあらゆる道楽を一堂に介し、大皇都「だいこうと」に逐わす皇帝すら焦がれる、天人とも見紛う美男美女が麗しき微笑みで夜をも溶かす、まさに夜霧の向こうの黎明郷「れいめいきょう」でござあす。あつしも男に産まれたなら、一生に一度はそこで美女と懇「ねんご」ろになりてえもんで。

かかと笑う行商人の言う”懇ろ”の意味は理解出来ずとも、彼の言う”黎明郷”は幼い佐波の興味を引いた。

佐波は産まれてこの方、布津から出たことがなかった。否、布津どころか、屋敷の周りから出されたこともない。

両親は不義の子である佐波を、周りに知らしめたくなかったのだらう。

だから、遠方から貴族相手に行商をしてまわる人々が館に訪れるのが、佐波にとっては唯一の娯楽であった。

出来るだけ心配させないように、無邪気にそう言った佐波だったが、もちろんその”黎明郷”が実際は腐臭を放つ汚泥の沼のような、恐ろしい場所だとも知っている。

——遊郭「そこ」に飼われた哀れな雀は、帰りとうて啼いても頬を打たれ、死にとうて啼いても頬を打たれ、蹂躪されるがまま、偽の極彩の羽を涙で濡らし、ただ骨になるまで啼き続けると申します。世にこれほど哀れな生き物がおりましようか。もしそれが業だといふならば、どのように恐ろしい行いを彼らがしてきたというのでしょうか。なんの罪があつて、あのように惨い仕打ちを受けるのでしょうか。

佐波が物事を自分の力で理解出来る様になつてきた頃に、館に訪れたやや身なりの良い行商人は、佐波に遊郭の話をせがまれて、哀し気にそう語った。

”黎明郷”とは明らかにかけ離れたその話に、当初佐波は戸惑い、”遊郭”とは二箇所あるのかと考えた程だ。

そしてその考えを正し、遊郭とはどういう場所であるのかを教えてくれたのは、他でもないこの友人の少年だった。

だから、佐波の虚勢を彼が見破らないわけがない。

それでも少年は何も言わなかった。言えなかったのかもしれない。ただ、亡霊のような虚ろな瞳で、佐波を眺めていた。

『…ごめん、以織』

そんな少年を見ていたら、ふと泣きそうになって、佐波は慌てて鞆を引っ張りだし衣服を詰めた。

必要なものなんて分からない。だから適当に荷物を詰めて、鞆を閉じ――

『以織？』

鞆を持ち上げようとした佐波の手を、以織が掴んだ。

年齢の割には小柄だが、佐波よりも幾ばくか大きな手だ。

その手が震えている。震えて、佐波の手を握り、

『姫様』

いつもより低い、静かな声で、以織が言った。

『側を離れることを——お許しください』

2（後書き）

黎明郷^{れいめいきょう}：桃源郷のようなものです。喜びと快楽の郷。 ” 夜霧の向こう ” という枕詞は吟遊詩人が広めたものと思われます。

文字ばかりで見難い文章。 スミマセン…

ハツと顔を上げた。

遊郭街の中でも一際大きく絢爛な軒。

その極彩色の提灯に描かれた印。

確か、ここにくる前に確認していた。

この遊郭街では、どの軒にも屋号の看板は掲げられていない。

代わりに、飾られた提灯に描かれた、屋号代わりの”印”を目印に、馴染みの店へと向かうのが常識とされている。

——”めいろうあん”

どのように書くのかは知らないが、その印の形だけは、以前この遊郭街に訪れた事があるという年長の使用人に聞いて知っていた。丸の中に、一羽の双頭の鴉「からす」。

多分、この軒がその”めいろんあん”なのだろうが——

「お、大きい…」

思わず独白してしまったが、この喧噪では誰の耳にも届かなかっただろう。

確かに有名な老舗だとは聞いていたが、ここまで大きいとは…。

この位置では全容は見えないが、もしかしたら、佐波のお世話になっている館よりも大きいかもしれない。

何処まで続くのかと不安になるような、軒下の提灯。その下の赤い格子の奥には、優艶な蠟燭の灯りと時折人が通るような影が浮かび上がっている。

入り口すら、まだ随分先のように――佐波は逸る心と、牽制する心の板挟みにあっていた。

いくら自由にしていいいと言われても、三男坊がいつ”お帰り”になっても限らないのだから、あまりうるうるするべきではないのだろう。それに、これっぽちの給金では、きつとこのような老舗の遊郭では門前払いを食らうことになるだろうことは知れている。

でも、ただ一目確認出来るだけでいい。この目で、以織が生きていると。

――私が彼を諦めていないと、知ってほしい。

それでどうなる、と心の中の自分が嘲る。

約束した。必ず迎えにいくと。

けれど、あれからもう5年。

佐波が必死に生きて来た様に、以織もこの世界で、もし生きているならばきつと、多大な苦勞と辛酸を嘗めてきたことだろう。

彼は、自分を恨んでいるのではないだろうか。

佐波の代わりに売られて行ったことを、後悔しているのではないか

『私が代わりに行きます』

佐波の身代わりとして名乗りを上げた以織に、佐波を含め全員が驚いた。

佐波が止める間もなく、仲買人が以織の体をじろじろと物色し、そしてにやりと下卑た笑みを浮かべた。

『そっちのお嬢ちゃんよりは、”売れそう”な顔だな。歳は』

『15』

『ふうん、細いな……。女みたいな面で、その形「なり」ならいけるだろ。よし、商談成立だ』

以織は、佐波よりも高く買われた。その金の半分は佐波の家に、もう半分は以織の家族へと渡された。

荷物を持たない少年はすぐに馬車へ連れ込まれ、どこかへと売られて行った。

雪の降る、寒い日。

少女は何より大切な、大切にしなければならなかった友を”身代わりに”してしまった。

あんなに優しい友を、誠実な人を、佐波が穢した。闇に落とした。その罪深さに何度絶望しただろう。己の力のなさを嘆いただろう。けれど、どんなに嘆いても、その事実が変わる事は決して無い。

だから佐波は決意した。必ず、必ず以織を迎えに行くと。いつになるかは分からない。

佐波のような端女では、到底手に入れないような大金が必要だと分かっている。

それでも、佐波は決意したのだ。

——約束を、守る。

例え既に少年がこの世にいなくとも、恨まれていようと——その

約束だけが、今の佐波を支えている。

「お客さん、こっちの軒に用かい？」

唐突に話しかけられて、咄嗟には自分に向けられた言葉とは気付かなかった。

ようやく入り口の絢爛な灯りが見え始めた頃だった。ぼんやりと振り向いた先には、小柄な男が一人。

衣服から見ると、どこかの軒の下男かあるいは――

佐波は男を警戒しつつ答えた。

「用というほどではありませんが……。何か」

「いえね、お客さんのような人が”ここ”を目指してるみてえに歩いてっから、少し心配になってね。まあ、こっちの早とちりでしたら、許してくだんせえ」

ニコリ、というよりニヤリ、とした笑みを浮かべて言う男。一見すると年寄りのようにも見えるが、声は意外に若い。なんとなく身構えて、佐波はさらに問った。

「私がここを目指す、どうしてあなたの心配になるのでしょうか」

佐波の格好は、女と侮られない為でもあるし利便性の関係もあって、

男装と言える姿だ。

女の下働きがこのような格好をすることは、この国では珍しくない。確かに、どう見ても金を持っていそうには見えない貧相な姿だろうが、その分軒下から遊女や陰間に袖を引かれることもないから、楽と言えば楽だ。

だからこそ、なぜ今こうして見知らぬ男に声をかけられているのが分からず、酷く不気味に思った。

佐波の言葉に、男はニヤニヤしつつ、

「いやね、実は先日、”手引き”があつたばかりなんですよ。丁度お客さんみたいな目立たない格好でね、そつと遊郭に忍び込んで、お目当ての遊女と手と手を取り合つて逃げ出してねえ。いやあ、あれは大捕り物だった」

思い出すように顎を撫でる。

佐波は更に眉をひそめた。

「それと私と、どう関係があるのです？」

「関係というほどじゃございやせんよ。ただあつしは、ここを”監視している”端くれでしてね。一応確認しておきたかっただけですみませんね、用心深くて」

「いえ……」

手引き、とは足抜けのことなのか。

遊郭がどうして高い塀と門に囲まれているのかは、語るべくもないだろう。

塀の向こうは深くて流れの速い川。ここを出るには、門を通る以外にない。

所詮は恋の真似事。そうと分かつていても、叶わぬ恋に身を焦がす輩は大勢いる。

中には、真実の想いを交わし合う仲になった者もいる。

そうなれば、ここを出たいと願うのも当たり前のこと、もちろんそれを止める者がいる事も、至極当たり前のこと。

佐波の世界にも常識とされる掟があるように、この遊郭の世界にも絶対の掟があるのだ。

つまり、男はこのお目付役で、佐波はその男に疑われているというわけだ。

男の視線が未だに自分に向けられているところを見ると、多分そうなのだろう。

確かに、佐波のここまでの動きは慣れた者にとっては少し妙に映るかもしれない。

思い詰めた者の空気を纏った佐波が、何か一計を案じているのではないかと疑われるのは、むしろ当然なのかもしれない。

佐波は、ため息をつきつつ頭を振った。

「こちらこそ、疑われるような行動をとっていたならすみません。

主が私たち使用人を置いて、どこかへ行ってしまったものですから……」

「ほお。どちらかにお仕えしていらっしゃる方でしたか。道理で丁寧な物腰だ。しかしその口ぶりからすると、随分やんちゃな主さんで？」

「ええつと……まあ……。あ、もし、赤い羽織に黒い帯の、24、5の男が暴れているようでしたら、私までご一報頂けますか。主に何かあったら私たちの首が飛びますから」

情けなく笑って言うと、男はようやく砕けた笑みを浮かべた。

「はは、そいつは大事だ。約束しやしよう。お客さんも気をつけなさいな。ここいらは”外”と違って、あつしらの目が行き届いていやすから、派手なめめ事は少ねえが、それでも何も無えとは言い切

れねえ。お客さんみてえな若い女子を鴨にしてやろうつてな軒もありますからねえ。何かありやしたら、大声で叫んでくだせえ。あつしらの誰かが”正しに”向かいやすんで。」

言つなり軽やかに背を向けた男に、ふと思ひ立つて、佐波は慌てて問いかけた。

「あの！そういうば、一つお伺いしたいことがあります」

「あつしにですかい？」

不思議そうに振り返つた男に、佐波は頷く。

「はい。あの、実は探している人がいて——名前が」

その時。

佐波の真後ろにあつた格子が、轟音と共に吹き飛んだ。

3（後書き）

遊郭のモデルは江戸吉原ですが、異世界ファンタジー（ということにしてノ涙）なので、かなり自己流の設定になっております。どうぞ大目にみてやってください…

「!？」

「こりゃあ…」

危機一髪、その場を飛び退いて無事だった佐波と男だったが、目の前にバラバラと落ちる木片や、辺りに広がっていく混乱に、なす術も無くその場に立ち尽くした。

壁に空いた穴から立ち上る粉塵と、そしてその穴から流れ出る甘い”香”。

怒声、罵声、そのさらに奥から上がる女の金切り声。

どうやら内部で何かが起こっているようだが――

「ルツカか…」

側で小さく呟いた男は、佐波に問う隙を与えずにカラリと笑った。

「すみませんね。どうやらあつしらの仲間の仕出かしたことのようだ。たまにあるんで。まあ、言った先から今回はその派手なやつみてえですがね」

言うなり、今度こそ身を翻す。

「お気をつけ下せえ。ここにはここの掟がありやす。素人さんが知らずに首を出したら、たちまちちょん斬られちまうような恐ろしい掟がね。どうぞご自愛くだせえ。――では、よい宵を」

「あ、」

男は、集まってくる野次馬を上手く避けながら、悠々と人ごみに消えていった。

”以織”の情報を聞き出そうとしたのだけど、どうやら機会を逃したようだ。

佐波は嘆息し、集まりだした野次馬に、ここには何かと厄介だと、とりあえずこの場を離れようと歩き出し――

「誰か！そいつ捕まえて！！」

後方、壁の穴の奥から響いた女性の声に咄嗟に振り返り、そしてすぐ背後に迫っていた男に思わず――蹴りを見舞った。

「ぎゃっ」

見事に腹部を直撃した佐波の蹴りに、二つ折りになって男が地面に転がる。

周りからどよめきと歓声が上がって、佐波はようやく自分が面倒なことに立ち会っているという実感が沸いて来た。

一通り苦悶しつつも、それでもすぐに立ち上がり逃げようとする男に、これはもう一度蹴りを叩き込んだ方がいいのかと一瞬思案した、次の瞬間。

素早く身を翻した佐波の頬を、白刃の巻き起こした風が撫でる。

その鋭利な煌めきを目の端に捉えて、舌打ちした。

――二人いたのか。

佐波は動きを止めずに、男が白刃を繰り出す為に伸ばした腕をすり抜け、その胸元に飛び込む。

間合いを詰められた男は一瞬鼻白んだが、すぐに手首を返して剣を横に払う様に薙いだ。

???今！

がくん、と重心を一気に落とす。そして腕を軸にして男の足に一撃、鋭い蹴りを入れた。

ぐうっと唸ってバランスを崩した男。だが、屈強なその身体を倒すには至らない。

「…！」

今の機会を逃したのは痛い。なにせこちらは丸腰。相手に刃物がある限り、どうしてもこちらが圧倒的に不利となる。

屈んだ勢いで後方へ飛び、地面の砂を一握り掴んで投げつけるが、それでも白刃の男は揺るがない。

すぐに体制を整えると、真っ直ぐ切っ先をこちらに向けて飛び込んでくる男。

この間合いでは、初太刀はどうにか避けられても二太刀目はどう考えても避けられそうにない。

ぐっと顎を下げた佐波の目は、それでも男から外される事はなく。

だから向かい来る男が、ドンツという重たい音と共に視界から消えた瞬間も目撃していた。

戸惑う暇もない。

集まっていた野次馬から悲鳴が上がり、見れば、白刃の男は群衆の方まで吹き飛ばされていた。

「…！？」

何があつたのか頭で理解できず、周りの状況を確認しようと視線を動かす――

「ぎゃっ!？」

目の前にすつと差し出された巨大な手に、佐波は間拔けな悲鳴を上げた。

「あ、ごめんねー。ルツカ、あんた怖がられてるじゃない」

巨大な手の向こうから、ひょいっと黒髪の女性が顔を出す。訛りのきつい皇国語。

この国の妙齡の女性には珍しく、髪を顎に添うくらいの長さで揃え、前髪は短めだ。

少女のようなあどけない表情をしているが、キリツとした目元に彼女の聡明さが現れている。

彼女がフォローを入れてくれてようやく、佐波は手の主の姿を視界に捉えた。

――というか、視界がこれは”人”だと認識した。

だが。

???に、人間…?

男の身の丈は、遊郭の軒一階部分程の高さがあつた。

体格はそれに似合つて逞しく、恐らく実践で鍛え抜かれたであろう見事な筋肉をしている。

滅多に見ない大男なのは間違いないが、しかし男の特徴はそれだけではない。

男は頭部から肩まで、不思議な模様の入った白い布を被っていた。目のところだけは辛うじて見える様になっているが、それ以外の部分は徹底的に隠され、ただでさえ威圧感のある外観に凄みを加えている。

啞然として見上げる佐波の視線にも頓着した様子も無く、彼はただじっと、半分尻餅をついていた佐波に手を差し伸べていた。

???どうやら、彼女達が助けてくれたらしい。

だが、そもそもこれはなんの騒ぎなのだろうか？

佐波は内心ドキドキしながらも、男の差し出している手を有り難く掴み、立ち上がった。

「あの、ありがとうございます。助かりました」

「イーのイーの。とイウか私たちの方が才礼を言わなきゃなんだから。才陰でしつぽは掴んだわ」

「しつぽ？」

「こつちの話。ともかく、才手柄ね。もしかしてどこかの用心棒さんだったりするの？」

「え、いや…ただの使用人です」

「勿体ないわねー。あ、それともわざと隠してるの？才忍び？」

「い、いいえ！本当に一介の使用人です。それに言われる程強くはありませんし」

佐波の世話になっている屋敷は、仕事の内容で給金が格段に変わる。

端女と住み込みの用心棒とではだいたい三倍くらいの差が出るのだ。佐波はどうしても金が入り用だったこともあり、空いている僅かな時間で独学し、時間を持て余している気の良い用心棒に相手をしてもらって、どうにか多少の武術の心得を得るようになった。

そして世の中には学問に秀でた頭を持つ者がいるように、佐波の体は武術に向いていた。

これは貴族の子女として生きていては決して見出されなかっただろう能力であるから、開発された時の複雑な心境といったらなかった。今までは給金の為にと、ただそれだけの為に鍛錬をしてきたが、こうした状況に置かれてみると、あの頃体中に痣と傷を作り、地を這いながらも学んでおいてよかったと本気で思う。

それはともかく、佐波としては一刻も早くここを離れたい心境だった。

大男が吹っ飛ばした白刃の男と、これまたいつの間にか昏倒していた佐波が蹴り飛ばした男は、他の男達に縛り上げられ、どこかへ運ばれて行った。

色々気になることはあるとしても、ここは佐波の世界ではない。

佐波には知らない事情があり、常識がある。

先ほどの小柄な男が言った様に、素人が首を突っ込んで怪我ですまないだろう。

佐波は、一先ず大男と女性に頭を下げ、

「では私はこれで」

「え、もう行くの？才茶くらいごちそうするわよ。ルツカが」
「……」

大男がもの言いたげな空気を発したのでビクリとしたが、結局彼は何も言わず、ただ渋る女性をひよいと肩に担ぎ上げた。

「あ、ちよつと！全く、あんたは力加減をしらないんだから。どうすんのよこんな壊しちゃって。また才給料減るわよ！しかもなぜか私の！」

どうやら、彼女達は二人で一組のようだ。

語彙は豊富のようだが不思議な訛りの皇国語を繰る女性と、”ルツカ”と呼ばれる大男。

??? 皇国「このくに」の生まれではないのか…

と、そんなことを考えながらそのやりとりを眺めていると、大男の肩に乗った女性が、佐波を見下ろして言った。

「ごめんなさいね。色々迷惑かけちゃって。貴方が女用心棒だったら、ここで雇いたいくらいなんだけど、どうやらそれも出来なイミタイだし…。惜しいなあ」

「ええつと、すみません…」

思わず謝った佐波に、女性は可笑しそうに笑った。

「謝る事じゃないわ。そうね、まあでも、多分またすぐに会えるわね。そんな気がする」

そんな物騒な予言しないで欲しい。と本気で思った佐波だったが、とりあえず頷いた。

「またどこかで」

それを別れの挨拶代わりに口にし——ふと、今度も危うく忘れそうになった質問を思い出した。

「あの、そういえば私、人を捜してるんです」

「人？あなたの主？」

「いえ、あ、それも一応目をつけとかなきゃいけないんですが、私の探し人はまた別にいて――」

ようやく佐波がそれを口にしようとした時、開いた壁の中が俄に騒がしくなった。

「おい！誰か手を貸せ！遊女が……！」

壁の穴から顔を出した下男風の男が叫び、それにいち早く動いたのは、大男の肩から飛びおりた女性だった。

「どうしたの！？」

「サツキか！遊女が敬麻？「けいましん」を飲みやがった！今吐き出させてるが、意識がねえ！」

敬麻？とは猛毒だ。敬麻「けいま」と呼ばれる薬草の葉は病に効くが、「しん」と呼ばれる根には猛毒がある。

何処にでも自生しているワケではないが、栽培は比較的簡単なので、近頃では軒先で育てる家庭も増えているという。

その毒を自ら飲んだというのは一体？

「っ！手引きか！」

険しい声で女性が短く叫ぶ。

その言葉で、大体の事情は察せられた。

先ほど大男？？？ルツカに成敗された男達を手引きし、この遊郭に忍び込ませた者が、内部にいたということか。

確かに武器になるようなものは一切携帯できないよう、関所で厳しく検査されるはずであるのに、男は一振りの刀を持っていた。内部の手引きでもないかぎり不可能なことだろう。

だがそれが遊女となると――

「客は？」

「東棟に避難させてる。遊女も…だが、こうなちゃあ…」

「…仕方ない。番台はなんて？」

「とりあえず総主の指示を仰ぐと」

「ふん、まあ、妥当ね」

女性は佐波と話していた時とは打って変わった剣呑な雰囲気を放ちながら、男にテキパキと指示を出した。

「その遊女の交友を辿って。中で何か洩らしてるかもしれない。男二人は生け捕ってるけど、情報は多方面からあったほうがイイ。それと当面の間、館内の東と西の行き来を断絶させるよう、番台から総主に進言させて」

「うげえ！そういう心臓に悪い役を押し付けんなよなあ」

「文句言わなイ！ほらルツカも、行くわよ！」

女性の呼びかけに、大男は素直に付き従う。

――もしかしてこの女性、ここでは結構な肩書きがあるのかもしれない。

ぽかんとその様子を見ていた佐波に、一旦は壁の向こうに消えた女性が無言で顔を出して、笑顔で手を振った。

「ごめんね煩くて。楽しんで行ってねー」

それきり、女性はいりの喧噪まで引き連れて颯爽と消えて行った。
残されたのは遅れて騒ぎを聞きつけた野次馬が少しと、展開に取り
残された佐波のみ。

”めいろうあん”の壁に空いた穴とその中で慌ただしく揺れ動く影
を少しの間眺めた佐波は、やがて嘆息すると、くるりと踵を返した。

この様子では、金の有る無しに関わらず、”めいろうあん”の中に入
る事ことも、ましてや内部を探ることなど到底出来ないだろう。
変に動いて、今の主に迷惑がかかるようなことがあれば、切り捨て
られても仕方が無い身の上だ。

再びこのような機会が佐波のような使用人に巡ってくるとは思えな
いが、それでも、今回は日が悪過ぎたようだ。

——せめて。

人垣をすり抜けて、来た道を戻る佐波の胸に、じんわりと寂寥が滲
む。

——せめて、無事だけでも、知りたかった。

脳裏に浮かんだいつかの友の姿に、やるせない気持ちだけを抱いて、
佐波はただ俯いて歩いた。

「おい！佐波！」

”めいろつあん”の灯りがようやく見えなくなった頃。

自分に近寄ってくる男の存在に気付いて、佐波は立ち止まった。

「あ、霈「ひさめ」さん。」

「”あ”じゃねえよ。お前今までどこにいたんだ？まさか本気で男でも”買い”に行ったのか？」

愛嬌のあるヒゲ面の長身のこの男は、佐波と同じ主に雇われている用心棒だ。

佐波が三男坊のお付きに手を挙げた時に”仕方なく”付き合ってくれた、気の良い男でもある。

佐波は陰鬱な気持ちを振り払って笑った。

「残念ながら持ち合わせが足りなくて。霈さんは？」

「おう、お前と同じだ。やっぱり皇都は違うな！女の値段が一桁違うぜ。」

佐波たちのいる布津は、皇都からすればかなり田舎だ。

隣国と接しているお陰で、貿易や交易は盛んだが、良いものは全て皇都に流れてしまう。

佐波の仕える家も、皇都との貿易を主な収入源としていた。

全ての資源を他州からの貿易で賄っているだけあって、皇都の物価

の高さは恐ろしい程だ。

佐波たちのような田舎豪族の使用人くらいの給金では、一星期「一週間」の滞在だってままならない。

だから尚更、佐波にとってこのような機会は滅多に訪れない好機だったのだが…

佐波の顔に暗い影が過つたのに気付いたのか、男は励ます様に大きく笑った。

「まあ気にするな。なんなら俺が相手になるぜ。まあ、俺も安くはねえがな。」

「奥さんに言いつけますよ。」

「うあ！言つなよお前！ここに来たこともだぞ！？」

「やましい事ないんだつたら良いじゃないですか。」

「夫婦の間にや、常に”誤解”という名の深くて長い川が流れてるつて言うだろ？」

「それは霈さんが疑われるようなことを日頃からしてるから。」
「だって男だもの〜！」

歌う様に叫んで、霈は笑いながら佐波の肩を豪快に叩いた。
い、痛い…

でも霈の気遣いが嬉しくて、佐波も思わず笑ってしまった。
それにしても。

「ところで、来栖「くるす」様はどちらに？」

主である三男の名を出すと、途端に霈の顔が曇った。

「俺たちも探してるんだ。いくらなんでも、帰る時は一緒じゃない

と樋藍「ひらん」様に怪しまれるだろうしな。」

樋藍とは長兄の名だ。もの静かだが少々度が過ぎる堅物で、弟とは別の意味で扱い難い。

今日も奔放な弟に誘われていたのだが、断固として拒否していた。まあ、弟からしてみても、遊郭でまで兄の監視下にはいたくないだろうから、誘ったのもただの社交辞令だろう。

佐波たち使用人に弟の監視を厳命したのも長兄である樋藍だ。

もし目を離れたと知れたら、切り捨てられるか、それとも王都に捨て置かれるか。

とにかく使用人に明るい未来はない。

「でも確か、昊芽「こうが」さんが後を付けてませんでした？」

関所で散り散りになった使用人たちだったが、それでもさすがに誰も主に目をつけていなかったとあつては、本当に首を刎ねられかない。

使用人が散り散りに遊郭に消えて行くのを横目に、ため息をつきながらではあったが、年長者であり一番の実力者でもある昊芽が、何も言わずに三男の後を付けて行ったのを佐波は見ていた。

だから今まで、真剣に三男の行方を探していなかったのだが…

佐波の言葉に、霈の表情が”仕事”に切り替わる。

「それなんだが、どうもきな臭え。あの馬鹿三男坊はともかくとして、昊芽とも渡りがつかねえ。あいつがそんな無謀をするようには思えないんだがな。」

「昊芽さんとも？それは…嫌な感じですね。」

「だろ？で、さすがにそろそろ怪しいなと思い始めてたら、お前を見つけたってわけだ。」

霈はそう言つて、鋭い視線を辺りに向け、急に声を潜めた。

「——ついでに、お前、気付いてたか？」

「え？」

「つけられてるぞ、お前。」

「…っ」

慌てて振り返ろうとした佐波を、霈がまるでからかうような仕草で髪の毛をぐしゃぐしゃにする、という動作で止めた。

「気付いた事を、相手にまで気付かせるこたあねえぞ。」

「は、い。」

「よし。心当たりは。」

「…ここに来るまでの間に、遊郭の監視役の男に目をつけられたようでした。」

「ふうん。それにしちゃあ、数が多いな。お前、何したんだ？」

「な、何って、」

何も——と言おうとして、ふと先ほどの騒動のことを思い出した。遊女が客を手引きして、”何事”かを起こした。

その現場に偶々居合わせた、ただそれだけのことだが…

…いや…もしかして、あの二人の男以外にも仲間がいたのか？

まあ確かに結果的に男達の逃走を阻止したことになるのだけど、まさか恨まれていたり…？

考えて、否、と頭を振る。

自分なら、とりあえず逃げる。仲間は心配だが、ここに居てはすぐに足がつく。

無情だといわれても自分の身が先決だ。

——だが、もし男達の組織が、佐波が考えているよりもっと大きければ？

——ここでの失態を、雇い主に知られてはいけないとすれば？

自分のような一介の使用人でも、危険視されたり…するのだろうか？

黙り込んだ佐波に、霏はふーっと息を抜き、

「…まあいい。お前、俺の前を歩け。相手が誰であれ、こんな大通りじゃ手を出してはこれないだろう。まずは他の使用人を捜して、三男坊が見つかり次第、帰る。相手が渋ろうが”最中”だろうが知った事か。俺たちの雇い主は三男じゃねえんだからな。」

言うなり、佐波の肩を掴み、くるりと回転させた。

どうやら進めと言っているようだが、佐波はぎょつとした。

「えっ！こっちに向かうんですか！？」

「そーだよ。俺があっちから順に探して来てるんだから、当たり前だろうが。それともお前、向こうの端から確認してきたのか？」

「…いえ。」

「なら行くしかねえだろう。確かこの先は”溟楼庵”めいろうあん」があるんだったな。まさかそこじゃあねえだろうが…」

「め、めいろうあん…っ」

またあそこまで戻るのかっ

先ほどまでの喧噪を思い出してゲンナリしつつ、けれど、さすがにもうそれも収まっただろうという思う事にし、仕方なしに歩き始めた佐波の後ろから、霏の足音が続く。

辺りを気にしつつ、佐波は小声で問いかけた。

「…なんで”めいろうあん”じゃないって思うんですか？老舗で有名な遊郭だって聞いてますよ。」

「だからだって。いくら豪族の息子でも、所詮は田舎の商家の三男坊。皇帝も自ら足を運ばなきゃ会えない高級大夫「だゆう」がいる皇都随一の遊郭じゃ、下女一人買えねえよ。」

「皇都、一？」

「ああ。ちなみに湊楼庵じゃあ、両方買えるんだと。知ってたか？」
「両方？」

「女も男もつてことだよ。」

「ああ、それなら…」

”以織”がそこにいるという噂を聞いた時に知った。

”めいろうあん”は東館と西館に分かれていて、東館では遊女を、西館では男娼が買えるのだと。

ふと友の顔が過って、暗い気持ちになった。

以織は、本当に”めいろうあん”にいるのだろうか。
もしいるならば、西館で、男娼として買われているのだ。

——”必ず、私を迎えにきて下さると、約束して頂けますか。”

以織は、まだあの約束を信じていてくれているだろうか。

信じてくれていたとして、未だ以織を迎えに行けるだけの甲斐性を持ち合わせていない自分に、失望してしまわないだろうか。

まだ会えるとも決まっていないのに、気持ちばかりが先走り、さらに鬱々とした気持ちになる。

——いけない。今はこんなこと考えても仕方が無いのに。

どうにか思考を”仕事”に引き戻そうと、佐波はぐっと体に力を入れ――

「…あ、れ？」

「どうした。」

「なんか…この匂い――」

ハッとした。

風向きと街中に漂う香の所為で気付くのが遅れたが、この焦げ臭さ。間違いない！

「火事です！」

「何い！？本当かよ！どつかでたき火でもしてるんじゃないかねえのか！？」

「たき火の匂いじゃないです！この先から――」

視界にはまだ火の手は無い。だが、この先の軒が燃えているのは確かだ。

ざわり、と波が押し寄せるような人々のざわめきが広がる。

皆気付き始めた。”異変”に。

「おいっ 火事みたいだぞ！あっちの軒じゃ皆出払って火消に追われてる！こっちにも来るんじゃないか！？」

「そりゃ最悪だ！こんな木造、すぐに燃え広がるぞ！」

「本当か！？どこが燃えてるんだ！」

「湊楼庵だ！湊楼庵の西館から火が――」

逃げる様に散って行く人々の情報を脳内にかき集めていた佐波は、

脳天に雷がおちるような衝撃を受けた。

——”めいろうあん”の、西館……！

「以織……！」

思わず声に出していたことにすら気付かず、佐波は駆け出していた。

「あ、おいっ！おまつ！ちよっ！……ええいくそ！行きやいいんだろ行きやあ……！」

付けられている身の上だというのに、勝手に一人で走り出した佐波を、言いたい事は山ほどある霈が頭を抱えつつも追いかける。

何にしても、三男坊もこの向こうだ。

妙なことに巻き込まれてなければいいが——

こういう時の予感だけは当たるものだと、30数年生きてきて知らない訳がない。

背後から追ってくる幾つかの気配を感じつつ、霈は己の宿命を呪いながら走った。

5 (後書き)

ようやく少しずつ話が動き始めました。

「火事だ！」

「鎮火砂を運べ！」

「火に回られるぞ！早く逃げろ！」

湊楼庵に近づくにつれてキツくなる物が焦げる匂いと、人々が逃げ惑う喧噪。

それらを掻く様にして、佐波は走っていた。

——以織、以織！

心の中には、友の姿しか浮かばない。

もし湊楼庵の西館にまだ取り残されていたらと思うと、居ても立つてもいらなかった。

——守らなきゃ、私が、今度は…今度こそ、私が！

体裁も、三男坊のことも、身分さえ今の佐波には関係ない。ただ心配だった。不安で、消えそうだった。

佐波が今ここに生きているのは、友との約束があったからだ。それがもし無くなってしまったら。

無くなって、しまったら。

——本当は気付いていた。

これは以織の為じゃない。

以織への罪悪感をどうにかして消したいが故の、愚かな自己満足だ。でも、そうでもしなければ、生きて行けなかった。

一番の友を、家族よりも愛した人を身代わりにした自分を、どうして許す事ができるだろう。

佐波が自分にそれでも生きる事を許したのは、優しい以織が最後に言った、あの優しい約束があつたからだ。

側から居なくなっても、まだ彼の幻影に支えられている。その事実
に打ちのめされる。

だから。——だから。

佐波は、人ごみをかき分け、やがて視界に炎の切れ端を捉えた。

——”めいろうあん”の西館！

既に幾人もの火消が屋根を伝い、大きな槌で燃え盛る炎と戦っている。

下からは流れ作業で鎮火砂を火元に投げ込み、遊女や陰間達を避難させる為の下男達が必死に立ち回っていた。

その中に知った顔を見つけて、佐波は躊躇わず駆け寄った。

「あの！」

「うるさい！今取り込んでんのよ！」

「あの……！」

「もう何、よ……？あれ、あなた——」

鬼のような形相で振り返った女性は、あの時の黒髪の女性——サツキで。

驚く彼女に、佐波は負けなくらい鬼気迫った顔で、叫んだ。

「これで全部ですか!？」

「な、なに!？」

「これで、全員ですか!？」

館から逃げ出た彼らを、下男達が素早く誘導していくのを指差しながら問うと、女性は怪訝な顔をしながらも答えてくれた。

「イイエ! まだ中にいるわ! 火の回りが早イの! 奥の方は――」

助からないかもしれない、そう唇を動かしたサツキの瞳が陰る。

――以織。

焼け出された遊女や男娼、野次馬の中に友の姿を探す。

誰もが逃げ惑うこの喧騒の中では、一人一人の顔を判別することなど不可能だ。

――もし、ここに居ないのなら…。

ぐつと顎を引いて、黒煙と炎の上がる遊郭を見据える。

火の粉が宵の闇に舞い上がり、恐ろしくも幻想的なまでに美しいその姿は、夜に羽撃「はばた」く巨大な蝶の様であった。

――以織。

佐波の心臓が大きく鳴った。

「え、ちょっと! あなた!？」

サツキが静止するのも待たずに、佐波は消火用にあつた水桶をそのまま被り、袖を破いて口と鼻に巻き付ける。
そして周りの静止を一切無視して、煙の充満する館の中へと飛び込んだ。

熱風に皮膚を蹴られ、煙にやられた目から涙が溢れる。

奥から逃げてくる人々に押し戻されそうになりながらも、佐波は一人奥へと進んだ。

——以織……！

脳裏に友の姿を描く。

以織は色が白く、線の細い少年だった。

黒髪は女の佐波よりずっと艶やかで、長い睫毛に縁取られた濡れたような黒い瞳は、いつも真っ直ぐに佐波を見つめてくれた。

周りの大人は不思議と彼の容姿に気を止めていないようだったが、佐波は彼ほど美しい人を見た事が無い。

それはあれから5年経った今でも。

——5年。5年間。

最後にその姿を見たとき、彼は15歳だった。
でも今は、二十歳の青年になっているはずだ。
あのまま成長しているなら、きっと美しい青年になっていることだろう。

ここ何年もともに鏡を見ず、髪は適当に結べる長さに切り、剣ダコと輝「あかぎれ」だらけの固い手のひらをもつ自分とはかけ離れた姿。

それを惨めと思う気持ちは、とうに捨てた。

もし彼を見つけ出し、いつか身請けできるほどの金が貯まったら、自分の全てをかけて彼を自由にすると決めている。
その為の犠牲ならば、どんなものでも差し出してみせる。

下男に肩を担がれながら、幾人もの男娼とみられる若い男たちが運ばれて行く。

その顔を逐一確認しながら、佐波は頭の中に描いた二十歳の以織を探し求めていた。

どの男も美しいが、煤で汚れぐったりした様子の彼らの中には、佐波の知る友の姿はないように思えた。

——以織、無事でいて……！

佐波は、口元を布で覆っても尚息苦しい煙の中を、もがく様にして進む。

あまりの苦しさには立ち止まると、肺がゼイゼイと嫌な音をたてた。
立ちこめる煙の向こうに、赤い火種がちろちろと燃えているのが見える。

どこかで柱が崩れたのか、轟音が響き、天井から木片が飛び散ってきた。

入った事も無い炎上中の建物に、居るかどうかもわからない人間を捜す為に入るだなんて、酔狂の極みだ。

それでも探さずにはいられないのだから、もしかしたら自分はこの5年で狂ってしまったのかもしれない。

自嘲の笑みを布の下で浮かべながら、佐波はそろそろすれ違う人も居なくなつた廊下で息を整えると、

「誰かいなか……！」

ごうごうと燃え盛る火の音に消されないように、一声大きく叫ぶ。叫びながら襖を開け、中に人の姿がないか確認しながら進む。

「誰かいなか!」

喉が焼ける様に痛い。息を吸い込むと煙で咽せてしまう。

これより奥に行けば引き返せないかもしれないというところまで来て、佐波はようやく足を止めた。

ゼイゼイと荒く息をつく。流れる額の汗を拭ったら、べっとりと黒い煤がついていた。

――…潮時か。

頭ではここまですと分かっているのに、心の中の自分が引き返そうとしている自分を口汚く罵っている。

――もしこの先に以織がいたら。もし助けを求めているなら。もし。もし。

考えすぎて、頭が割れそうだった。やり場の無い感情が弱っている心を強く叩いて、涙が出て来る。

――ダメだ。これ以上は進めない。でも、引き返すことも出来ない。もう、どうしたらいいのかわからない…!

脆くなった心が瓦解する寸前。

どこからか、子猫の鳴き声が聞こえた。

それはか細い、ともすれば聞き逃してしまってもおかしくないほどの小さな音。

だが佐波の耳には、確かに聴こえたのだ。

——…猫？

壊れかけた意識をもう一度積み上げる。

痛む頭を抑えて耳に意識を集中すると、また聴こえてきた。

子猫のような、甘い鳴き声。——否、悲鳴だ！

「だっ、誰か…！」

いるのか、と叫ぼうとして咽せる。

煙が充満して来て、もう声を上げる事は不可能のようだった。

佐波はしゃがみ込み、煙が少ない床付近を這う様にして声の主を探す。

二つ目の襖を開けたところで、もう一度か細い悲鳴が上がって、佐波はようやくその声が廊下の少し奥、崩れた柱の辺りから上がっていることを知った。

慌てて這って行くと、壊れた柱の下から男の手がだらりと伸びているのが見えた。

逃げる途中で柱の下敷きになったのだろう。

もしや以織では、と一瞬で青ざめた佐波は、懸命に立ち上がると柱を必死で持ち上げた。

その途端、悲鳴が大きくなる。

ハッとして見ると、柱の下に、小さな少年が身を縮めていた。

質の良さそうな着物を来ているが、その幼すぎる姿からして男娼で

はないだろう。

——禿「かむろ」か。

遊郭には遊女や男娼、下男下女の他に、いずれはお座敷に上がる幼い美童たちがいると聞いた事がある。

彼らは”姐や”、”兄や”の小間使いとして働いているというし、恐らくこの少年もそうなのだろう。

佐波は持ち上げた柱を苦勞して脇に退かすと、まず少年を引っ張り上げる様にして抱えた。

震えながらしがみついていたその小さな身体に労りの言葉をかけたかったが、すっかり煙でやられてしまった喉からは掠れた息しか出てこない。

変わりに小さな背中を何度も撫で、佐波の首に手を回してしがみつくと少年の頭に頬擦りをする。

そして煙の届かない床に彼をそっと下ろすと、涙で濡れた少年の目を見つめて「待ってて」と目で合図をした。

年齢よりも賢いのか、少年は佐波の意図を解して泣きながら小さく頷いたが、その手はしっかりと佐波の服の裾を掴んで離そうとしない。

仕方なく、そのまま身を低くして瓦礫の下にあった男の手の脈を確認する。

——…途絶えている。

男の腕より先は瓦礫にすっかり埋まってしまっていて、掘り出すことは困難に思えた。

もしこれが以織だったら、と背筋が寒くなったが、男の手に古い刀傷を見つけてその可能性の薄さに気付く。

よく見れば、鍛えられた浅黒い腕だ。

男娼のものには思えない。

かといって下男の腕にしては遅すぎる。
用心棒の誰かだろうか、と検討を付けていた佐波の袖を、少年が引いた。

——そうだ、早くここから出なくては。

埋まっている男には悪いが、自分は生きてこの少年を外に連れ出さなければならぬ。

頭の端にちらりと浮かんだ”以織”の文字を振り切る様に、佐波は震えながら再度しがみついて来た少年を前に抱え、破いた袖で彼の鼻と口を塞ぐと、ぎゅっと抱きしめる。

——苦しいだろうけど、我慢して。

めきめきと音を立てて崩れようとしている廊下を、佐波は引き返す為に猛然と走り出した。

6（後書き）

サツキは「イ」「オ」「ン」の発音が苦手です。
彼女の故郷は次回で明らかに…？

佐波が濛々「もうもう」と立ちこめる煙の中から脱出し、ようやく建物の外に飛び出したその瞬間。

地面が揺れるほどの轟音と共に、建物が拉「ひしゃ」げるように崩れ落ちた。

爆熱風と飛び散る破片に背中を強打されて、悲鳴を上げる間もなく少し離れた地面まで吹き飛ばされる。

それでも意識が残っていたのが幸いして、腕の中の少年を守る為に辛うじて受け身を取れたが、地面に転がるようにして倒れ込むと、背中に感じる激痛に意識が飛んだ。

「おい、大丈夫か！？誰か手を貸してくれー！」

「水だ！水持つてこい！」

「担架だ！怪我人がいるぞ！」

地面に倒れる佐波の姿に気付いた人々が駆け寄ってくる。

顔に冷たい水をかけられ、気が遠のいていた佐波の意識を浮上させた。

「…っ あ…っ」

「あんた、生きてるか！？今運んでやるからな…！…ん？」

男は、あまりの激痛に悶える少女の腕の中に抱え込まれたままの少

年の姿を見つけて、仰天したように叫んだ。

「真灯「まほ」じゃねえか！なんでここに…！」

その大声に、腕の中の少年は糸が切れた様に泣き出した。

自分を抱えたまま倒れている少女の胸に縋り付き泣きじゃくる。

まるで母を亡くした子どものようなその光景に、事情を知らずに見
ていた野次馬は涙を誘われた。

「どうしたの！？」

このクソ忙しい時に一つ箇所固まっている群衆に苛ついた女性――
――サツキが、殴り込む様に輪の中心に入ってくる。

そしてその中心が先ほど自分の制止を聞かずに建物に入って行った
少女だと気付くと、周りに鋭く解散を叫びながらも、少女の側にし
やがんだ。

「良かった、生きてたのね！あら、でも死にかけてる？」

「おおおい！女はともかく…！」

男に促されて、サツキはそのキリツとした目を泣きじゃくる少年に
向け、やはり仰天したように叫んだ。

「ま、真灯！えっ でも、そんなはずは…！真っ先に助けが向かつ
たはずよ！」

「わからねえが、生きて助かったのは間違いないね…。総主は？」

「今は臥龍城「がりゅうじょう」に上がられているわ。耶灯「かほ
」も一緒のはず…。でも分からないわ。真灯がここにいるぐらいだ
もの…確認して！」

「お、おう！」

鋭く命令を下したサツキは、次いで泣きじゃくる少年に声をかけた。

「真灯、真灯、ここは危険よ。早く総主の元に行かなくちゃ。」

優しく言っても、少年は頑「かたくな」にこの場から離れようとしていない。

いつそ気絶させて運ぼうかとも思ったが、今すぐに命の危機を感じているわけでもない以上、さすがに今後のことを考えて行動を慎んだ。

それにしても、こんなに感情を爆発させている少年をみるのは、これが初めてだ。

いつもお人形のように、その無機質なまでの美しさでただ飾られていた少年。

子どもらしく泣く事もなければ、心から笑っている姿を見た事も無い。

きっとこの火事に相当のショックを受けているのだ――

そう思い、もう一度優しく諭そうとしたサツキより早く、血と煤と泥で黒く染まった腕を持ち上げて、倒れたままの少女が胸の上にある少年の頭を撫でた。

―― 大丈夫。大丈夫。怖くない。怖くない。

佐波の意識は混沌としており、その瞳はもう何も映していない。

それでも泣き続ける少年の頭を撫でたのは、母性という本能によるものだ。

サツキはその光景にぐっと喉を詰まらせた。

——いけない、泣くところだった…！

泣いてる場合じゃないのに！と思いながらもやっぱり泣きつつ、サツキは佐波の霞んだ意識に呼びかけた。

「大丈夫よ。あなたも絶対助ける。でも今は少し堪えてちょうだいね。」

佐波に頭を撫でられて少し落ち着いたのか、泣きつかれて脱力している少年を後ろから抱え上げると、サツキは自分の相棒を呼んだ。

「ルツカ！ルツカ、イる！？」

未だ砂埃と火の粉が舞っている道上から、大きな影がのそりと動くのが分かった。

彼はその巨体を活かして、先陣を切って鎮火活動に貢献していたのだ。

サツキに呼ばれた大男は、煤に汚れ、もう白とは呼べなくなった布を頭から被った姿で現れると、言葉も無く彼女を見下ろす。

いつものように「汚れたんだし鬱陶しいからその布取ったら？」とでも軽口を叩きたいところだが、今はそれどころではない。

サツキは腕の中の少年をルツカに差し出して、

「大至急、真灯を臥龍城に運んで。総主には後で直接報告するわ。」

大男は一つ頷くと、軽く少年を腕に抱え、存外な素早さで未だ騒然としている大通りに消えて行く。

あの巨体で気配を忍ばせるのが得意だというのだから不思議だ。

サツキはその背を見送ってから、ぐったりした佐波の姿を確認する。

煤で汚れて判別し難いが、恐らく火傷も一箇所や二箇所じゃ済まない。

もしかして、と思い、そつと背中側に回ったサツキは思わず息をのんだ。

真つ先に目に飛び込んで来たのは、背中…肩の辺りに刺さった木片。深さの程も分らないそれは、下手に動かすと命を落としかねないだろう。

焼かれた背は、衣服がボロのように纏わりついているだけの半裸で、血と煤で汚れて赤黒く変色し、全面に血が滲んでいる。

一見ただけで重傷とわかるその傷に、サツキは焦りを抱いた。

——移動は無理ね…。ここで措置をするしかない…！

それでも助かるかは五分だ。

ここで助かって後日感染症を発症する可能性を考えれば、生存率は三割を切る。

遊郭界隈の医者は全て集められているが、それでもまだ人の手が足りない状況を考えると、どう考えても自分で措置するのが一番早そうだ。

サツキは盛大に舌打ちすると、それでも受け止めきれない現実を呪うように、火の粉の舞う夜空に向かって吠えた。

『なんだって私、こんなサバイバルな異世界に飛ばされちゃったわけ！？』

早口で捲し立てたその言葉は酷く滑らかだったが、この皇国に——

否、この世界に、その言語を理解出来る人間はほぼ存在しないのであった。

「“溟楼庵”が火事だと……！？」

その頃、大皇都の中央宮・東塔の一室にて、早馬の知らせを受けた壮年の男がいた。

綺麗に整えられた灰色の髪と髭を持ち、やはり相応に威厳のある召物に身を纏った男の、常ならぬ愕然とした様子に、早馬の使者は息を切らしながらも「は！」と短く答える。

「西館より火の手が上がり、乾いた風に煽られて炎上した模様です。あの勢いですと、恐らく東館も全焼でしょう。」

灯油「あかりゆ」を大量に使う遊郭街は火の回りが断然に早い。歴史上、かつて栄えた遊郭街が客の倒した行灯一つで消炭になったのも、一度や二度のことではないのだ。

「…何が原因だ。」

壮年の男の低い問いに、使者が肩を震わせた。

「…未だ不明です。ですが、火事の前に刃物を持った男が溟楼庵に押し入ったとの情報が。」

「刃物を持った男だと…！？」

「遊女の手引きがあつたようです。」

壮年の男は、冷や汗の浮かぶ額をぐつと手のひらで押さえた。

——まさか…もしそうなら…どこから洩れた…！？

男はしばし苛立ったように窓の外——溟楼庵のある方角を見据えていたが、やがて重苦しく息をついた。

「…すぐに、皇帝閣下に謁見を申し込め。私が——左相」さそう「が大至急お耳に入りたい事がある、と。」
「はっ！」

察しのいい使者は、直ぐさま部屋から出て行く。

しんと静まり返った部屋が、妙に白々しく感じるのは、身の内にある焦り故だろうか。

——来るべき時にはまだ早い。だが、もし”そう”だとしたら…

男は眉間に深い皺を刻んだまま、苦渋の表情で謁見の支度にかかった。

——身体が、熱い。

まるで久遠の劫火「ごうか」に身を焼かれているようだ。
過敏になりすぎた神経に巻き付いた茨「いばら」の蔓が、佐波の痛
覚を限界まで痛めつけている。

——もえ、る。

肉が、神経が、骨が、生きたまま焼かれて逝く。

いつそ身体を捨てて天津国「あまつくに」に旅立てば楽になれるだ
ろうに。

身体の芯まで食いちぎろうとする激痛から逃れようと身を捻った佐
波の身体を???

何者かの手がそつと宥めた。

——だ、れ…？

汗と苦痛の涙に濡れた佐波の頬を、冷たい何かがそつと触れる。
何度も何度も、まるで大切な陶器を扱うような慎重さで、頬を、額
を滑るその感触に、痛みが一瞬緩和した。

ほう、と熱い息を吐いて、僅かに身体の力を抜く。
すると今度は頬に、ぽた、と雫が落ち滑り落ちた。

——水…？

うつすらと目を開ける。薄い幕で覆われた滲んだ世界。
薄い闇の中で、衣擦れの音がした。

——姫様…

耳に涼やかな風が触れる。心の一番奥まで染み渡る、柔らかな吐息。

——姫様…

ああ。

ああ。

心が震える。

この時を、何度夢に見ただろう。

再び霞み始めた意識を必死に保たせて、佐波は焼かれた喉を押し広げた。

「い、お…り…」

以織。以織。以織。

心のうちで何度も呼ぶ。

指の一本も動かせない今の状態では、抱きついて喜ぶ事も、膝をついて謝ることも出来ない。

でも、確かに、以織がここにいる。

——姫様…

もう一度、耳に吐息が落ちる。泣きそうな、哀しそうな声。

ああ、泣かないで、以織。泣かないで。

昔、まだ佐波が貴族の子女で、以織が使用人の子であった頃。

他の兄弟に苛められて物置で一人泣いていた佐波を、以織だけが探してくれた。

声を殺して泣く佐波を優しく抱きとめ「姫様、私がおります」と安心させるように囁いてくれた彼に、その言葉に、どれほど救われてきたか。

母にも父にも兄弟にも、使用人にすら相手にされなかった佐波を、彼は一人で支えてくれた。

そしてそれは、最後の時まで――

「いお……り……」

不思議と、痛みはもう気にならない。

その代わりに襲いくる、抗い難い睡魔に最後まで抵抗しながら、佐波は乾いた喉を少しでも潤そうと唾を飲み込み、

「……き、た……よ……」

迎えに、きたよ――

耳にかかっていた吐息が震えた。
頬にもう一度雫が落ちる。

――姫様……

吐息が頬を撫でる。

震えるそれが、唇にそつと押し当てられた感触を最後に、佐波の意識は再び闇の中に堕ちていった。

泡が弾けるような目覚め。

間「あわい」から現「うつつ」へ、別の世を潜る様にして意識を浮上させた佐波は、無意識に身体を捻らせ、次の瞬間全身に走った痛み「うつ」と悲鳴をあげた。

身体が燃える様に熱い。特に背中 of 痛みが尋常ではなく、少しでも動かせば大小の雷撃を喰らっているかのような鋭い痛みが容赦なく襲って来る。

しばし痛みを逃がすように硬直していた佐波だったが、痛みがじわじわと引き出すと、己の現状を把握する為にそつと目を開けた。

身体は動かせないが、どうやら自分は背中を天井に向ける形で、俯「うつぶせ」せに寝ているらしい。

真つ先に目に飛び込んで来たのは、頬の下にある柔らかな布の光沢。これほどまでに柔らかく、滑らかな布を佐波は知らない。

そして沈み込みそうなほどに柔らかい布団が身体の下に敷かれているのに気付き、狼狽えた。

——ここは…

薄暗い部屋だ。だが風通しは良く、湿気はほとんど感じられない。

出来れば顔を動かして部屋の大きさを確認したいところだが、首に力を入れようとすると背中が刺すように痛み、仕方なく断念した。

—— 少なくとも、佐波が世話になっている屋敷にある端女用の泊り部屋—— およそ10人が寝起きする—— よりは確実に広そう
だ。

ぼんやりした明かりが閉ざされた障子から零れ、まだ新しい新緑色の畳を照らしている。

光の加減か、庭にある池の波紋や魚の姿が時折影となって現れて、佐波を驚かせた。

—— …… 随分と趣味のいい屋敷にいるらしい。

偶然にしても美しいその光景に、佐波はこの屋敷の持ち主は相当の金と家位を持つ人間だと判断した。

—— 私は……

状況を整理しようと、目覚める前の最後の記憶を呼び起こそうとした佐波の耳に、慎ましい足音が聴こえて来る。

思わず身を固くした佐波に構わず、足音の主は障子越しに影を落とし、そして部屋の前でピタリと止まると膝を折った。

「失礼します。」

誰に対しての言葉なのかも分からないまま、すつと音も無く障子が開く。

逆光で表情までは伺い知れなかったが、入って来たのが若い女性であることはその柔らかな影で分かっていた。

彼女は固い表情で目を瞬かせている佐波に気付くと、ハツとした様子で側に寄る。

「お目覚めですか？どこか、痛むところはございませんか？」

丁寧な――一介の豪族使用人に向けられるにはあまりに丁寧な女性の態度に、佐波は緊張を高めた。

いきなり斬り掛かれるとは考え難いが、それでも見知らぬ屋敷で無防備な、しかも碌に動けない状況では不安にもなる。

佐波の目に浮かんだ戸惑いに気付いたのか、女性は表情を穏やかにして語りかけて来た。

「すぐにお医者様を御呼びしますわ。その後でお着替えをしましょう。」

ニツコリと微笑まれて、女性が大層な美人であることに気付いた。年齢の頃は佐波より少し上……20前後だろうか。

艶やかな長い黒髪を後ろで結い上げ、花の簪を差している。

その女性の慈愛に満ちた笑顔に、思わず頬が熱くなった。

同じ”女”だというのに、自分と彼女のこの差は一体なんだろう。

――いや、今はそれよりも…

「ジュ…」

声を発しようとしたら、喉が鋭く痛んだ。

咳き込もうにも、身体が痛んでそれどころじゃない。

苦痛に悶える佐波に、女性は慌てたように覗き込んできたが、佐波の問わんとするところを汲み取り、

「ここは大皇都内にあります湊楼庵の事務処で、臥龍城」がりゅうじょう」と呼ばれている屋敷です。先日の火事で怪我をされた従業者はすべてここに運ばれておりますわ。覚えていらっしやらないかと思いますが、あなた様が運び込まれてから3日ほど経っておりますのよ。あれから丸々二日意識がお戻りになられませんが、随分心配いたしました。」

弾む様に言う。その言葉に、記憶がふわりと蘇った。

——そうだ、私は火事で………あれから…三日!?

愕然とした。

瞬時に浮かんだのは、火事の直前まで一緒にいて雇い主の三男坊を探していた霈ついでのこと。

突然火の気の方角に向かって走り出した佐波を、彼は後ろから追いかけてきたはずだ。

——その後…彼は…ほかの使用人達はどうなっただろう。

火事の混乱はあったが、もし三男坊があの後見つかったなら、直ぐさま彼を連れて宿に引き上げただろうことは容易に想像がつく。

佐波が居ないことに気付いた使用人もいるだろうが、お目付役である本分を全うするのが彼らの役目。わざわざ探しまわったりはしないだろう。

でもそうになると…

さあつと血の気が引いた。

——あ、あれから三日って…!!も、もしかして…私、捨て置かれた…!?

佐波の記憶が確かなら、あの宵は皇都滞在の最終日前夜。

あの堅物の長兄が、帰ってこない使用人を待つ為に滞在を延ばしたりなんか絶対にしないだろう。

考えたくはないが、佐波はこの皇都でお役御免となったと考えるのが妥当だ。

——まさか、ここまできて職を失うなんて……！！

自業自得とはいえあまりに”痛い”。

今更後悔しても遅すぎるが、ここでの失業はつまり、今後の生きる糧を失ったことを意味する。

これといって特技もなければコネもない自分が、これからどのようにして見ず知らずの皇都で一人生きて行けばいいのか……

完全に途方に暮れ、愕然としている佐波に、女性はおろおろと問うた。

「如何されました？傷の具合が宜しくないのですか？すぐに最「さい」様を——お医者様をお呼びしますわ。」

「お待ちください」と口早に言っただけで女性が立ち上がると、それとほぼ同時に廊下から軽い複数の足音。

そしてそれを追いかけるように、低い男の音が障子越しに聴こえた。

「こら！お前らは……！ここにはまだ立ち入り禁止だと言っただろう？」

男の声にも足音は止まらない。

たたたた……と迷いの無い足取りで駆ける二つの小さな影は、佐波

のいる部屋の前でぴたりと止まった。

「あら…」

女性が少し困ったような声を上げる。

絶望の縁に辛うじて引つかかっていた佐波も、場の空気が変わったことに気付き、伏せていた顔を上げた。

障子を隔てて、二人の子どもの影が揺らめく。

同じくらしい背丈の二人は、中の様子を伺う為にか、しばしその場に佇み――

そ、と襖が開かれる。

そこから部屋を覗き込んだ二人の子どもに、佐波が「あ」と小さく声を漏らすのと同時に、女性がため息をついた。

「真灯「まほ」、耶灯「かほ」。まだ来てはダメだと言ったでしよう？」

柔らかな叱責に、まるで鏡に映したかのようによく似た子ども達が、全く同じ仕草で俯いた。

8（後書き）

天津国：死した者が昇る、神々の国。現世の業と徳は来世にも持ち越される。

登場人物が増えてきました。名前が…

年の頃は、10に届くか否か、というくらいか。白磁の頬、長い睫毛、その下の黒曜の瞳。

良く似た???という言葉では足りない、瓜二つの容姿の二人の少年は、女性に嗜められながらもその場から離れようとせずに、ただ俯「うつぶ」せに横たわる佐波をじっと見つめていた。

???あれは…

佐波が少年たちに言葉をかけるより早く、女性が二人に近づき、その目線に合わせる様に屈んだ。

「こちらの方は大変なお怪我をされているのですよ。あなたたちの気持ちも分かりますが…今は安静に」

「あつ あの、構いません。」

考えるより先に声が出ていた。

慌てて身を起こそうとして激痛に阻まれ、結局情けなくも布団に俯「うつぶ」した姿のまま、佐波は二人の少年に声をかける。

「火事の時の…です、よね？」

燃え盛る溟楼庵に取り残されていた、あの少年。

あの時は顔を確認出来るような時間も余裕もなかったし、建物を出たところで記憶が飛んでいるから、実は少し自信がないのだけど…

しかしそれを裏付けるように、二人の少年は伏せがちだった目をぱつと輝かせて同時に頷いた。

「……ええつと……どっち……？」

困って女性を見ると、彼女は少し戸惑うように佐波を見返し、やがて諦めたように微笑んだ。

「……真灯「まほ」、耶灯「かほ」、お礼を言いに来たのでしょうか？ 中にお入りなさい。」

ただし、静かに。と言い添えて襖を開け放つと、二人の少年は恐る恐る、しかし期待の隠せない表情で佐波の横たわる布団の側まで寄った。

そして同時に膝を折ると、

「真灯と申します。」

「耶灯と申します。」

一人ずつ名乗り、子どもとは思えない優雅な動作で敬愛の礼をとった。

『真灯を救って頂きましたこと、心より感謝申し上げます。』

「え、あ、いえ……」

二人のあまりにも見事な口上に、佐波は間抜けな返答をして赤面した。

「……皇都の子どもは大人びてるな……」

などとは場違いな感心までしていたのだけど、それよりも気になることがあって口を開く。

「あの、真灯、さん。」

「はい。」

敬愛の礼を解いて、一人が顔を上げた。

「???こちらが真灯か…」

白磁の頬に、真っ直ぐな黒曜の瞳。その無機質なまでの美貌は冬に咲く薔薇のように作り物めいていて、酷く落ち着かない気持ちにさせる。

はらりと頬に一筋柔らかな黒髪が落ちて、子どもだというのに悩ましい色香を漂わせている彼を、佐波は何故だか直視できず目線を少し逸らし、

「け、怪我は…」

「あなた様のお陰で、大事ございません。」

「そ、そうですか…」

それは良かった、と呟くと会話が途絶える。

訪れたやけに重たい沈黙に、佐波は痛む背中に冷や汗が流れるのを感じた。

「???な、何か話さなければ…！」

奇妙な焦燥感に押される様に口を開く。

「あ、も、申し遅れました、私は佐波と申す者で、布津の豪族の用人をして、あ、して、ました。多分。」

あわあわと言葉を訂正し、それでもみつともない形で着地した自分の言葉に、佐波は情けなくてかあつと赤面した。

10かそこらの子どもがこれほど落ち着いているというのに、17の自分がこうでは情けなくもなるといふものだ。

色んな意味で自分に幻滅している佐波を、二人の子どもはじつと見つめている。

まるで佐波の人となりを全て観察してやろうとでもするようなその視線に、佐波は参ってしまった。

「す、すみません、あの…」

本日二度目の助け舟を期待して女性を見ると、彼女はにっこりと微笑んでくれた。

「佐波様、というお名前でしたのね。私も申し遅れました。私はこのお抱え医師である最様の助手をしております、早音「はやね」と申します。佐波様のお世話を申し使っておりますの。御用の際はいつでもお呼びください。」

こちらも見蕩れるくらいの優美な仕草。

佐波は余計に居たたまれなくなつた。

「あ、あの、本当に私などの一介の使用人にこんなに良くして頂いて…。と、ところで、これはどちら様のご好意でしょうか？」

一番気になっていたことだ。

いくらなんでも、あの火事での怪我人一人一人に、ここまでの高待

遇は与えられていないだろう。

どこの誰とも知れない只の使用人風情に広々とした個室を与え、医師の助手までつけるだなんて、佐波の常識では有り得ないことだ。

???では一体、なぜ？

「総主の意向だ。」

その問いに答えたのは、女性???早音でもなければ、二人の子どもでもない。

いつの間にか開かれた襖の前に佇んでいた、黒衣の男だった。

黒地の着流しに、光の具合によつては限りなく黒に近い灰色にも見える羽織。伸ばした長髪は後ろで緩く括られ、背中に垂れている。30にも40にも見える年齢不詳の顔を陰鬱な影で覆っている彼は、さながら遙か東にあるという帝国の物語に登場する死神<ガロン>のようだ。

そんな男の視線が自分に真っ直ぐ向いていることに気付き、佐波はぎよつとした。

男の光を反射させない暗い瞳で見つめられると、死神に「お前を迎えに来た。」とでも言われている気分になって酷く落ち着かない。

蛇に睨まれた蛙よろしく硬直している佐波に、男は低く言った。

「お前を迎えに来た。???と、言われそうだとよく患者に言われる。」

「まあロマンチック。」

今の台詞を全力で前向きに捉えた早音がのんびりと微笑む。
だがもちろん笑えない佐波は、ひたすらに硬直して無表情のまま自分
分に近づいて来る男をだた見つめた。

少年二人が畳をずれて、男の為に場所を空ける。
黒鳥が羽を閉じる様に静かに膝を折った男は、大量の冷や汗を流し
ている佐波に言った。

「俺は最「さい」という。ここの医師だ。総主から言いつかって、
お前の怪我の面倒を見ている。」

「俺は死神だ。冥王から言いつかって、お前の魂を攫いに来た。」
と言われた方がまだしっくりくる男の陰鬱な表情に、佐波は唾を無
理矢理飲み込み、ぎこちなく笑った。

「そ、それは、あの、お、お世話になります…！」
「どうした。傷の具合が悪いか。」

顔を悪くして震えている佐波に、男の顔がぬうつと近づく。
起き上がる事もままならない佐波は「ひい！」と内心悲鳴を上げて、
必死に否定した。

「だ、大丈夫です！もう、殆ど全快かと…！」
「そんなわけが無いだろう。お前、自分がどんな怪我をしたか分か
つてるのか？」

「ど、どんな…？」
「背中全体に忒度の温熱熱傷。肩甲骨のあたりに木材による杙創」
よくそう」。腕を中心に忒度の熱傷と擦過傷、内出血に、他にもあ
るが」

「も、もういいです…」

どうやら自分は結構な怪我らしい。どうりで痛いはずだ。
存在を知って急に痛み出した背中痛みを紛らわす様に、佐波は「
それより」と話題を変えた。

「あの、先ほどここに私がいるのは、総主様のご意向だと…？」
「ああ、そうだ。お前は運がいい。」

男の暗い瞳が、佐波を見る。

そして死を宣告するかのような、暗い口調で言った。

「お前が助けた真灯は、総主の子どもだ。」

9（後書き）

死神<ガロン>…遙か東にある帝国に伝わる神話に出て来る、死をもたらす使者。冥王に仕えている。皇国の神話には登場しないが物語としては有名なので、老若男女誰もが知っている

今日はUP出来ないと思ってたら意外と出来ちゃいました。やってみるもんだ。

作者は医療関係さっぱりなので、記述に大変な間違いがあるやもしれません…

間違いがありましたらこっさり教えて頂けるととっても助かります。

そっくりな双子ですが、見分け方があります。

その話はもうちょっと後に出す、予定です。

「お前が助けたのが総主の子どもでなければ、こんな待遇は得られなかっただろうよ。」

どこか投げやりな黒衣の男——最「さい」の言葉に目を丸くして、佐波は双子を見た。

——総主の、子ども…？

白磁の頬の美童たち。その稀に見る美しさに、てつきり禿「かむろ」だと思つて疑わなかった。

——だが…

何故だか釈然としない。

すぐにその理由に思い至つて、佐波は素直に問つた。

「総主様のご息が、なぜあの晩遊郭に…？」

その問いに、最はわずかに片眉を上げた。が、すぐに元の陰鬱な表情になり、

「あの晩に限らず、総主が行くところには全て同行するようになってる。——それを言うなら、お前の方だ。」

「へ？」

「火事の時にお前を目撃していた者が言うには、お前は燃え盛る涅槃庵の中に単身で飛び込んだそうだな。」

何故だ？と暗い瞳で問われて、佐波は思わずぐくりとした。

——何故って…私は…

意識が記憶を逆撫でる。その感触に背筋が震え、いつのものかも定かではない朧げな光景が閃いた。

??? 姫様…

「っ わ、私はいお、人を捜して…！そ、それより、あの、ここに、以織という名の男娼は???！」

「落ち着け。傷に響くぞ。」

ぐつと起き上がろうとした佐波を、最は面倒そうに押さえる。その腕にしがみついて、佐波は言った。

「お、お願いです…！教えてください！私は、人を…『以織』を捜して遊郭「ここ」に…！」

ここに、いるはずだ。

あれが熱に魘「うな」されて見た幻でなければ。

そうじゃないと言いきれない。でも、そうだと言うにはあまりにも生々しい吐息と、以織の???

「いおり…?」

佐波の言葉を聞き止めた最が、一瞬表情を動かした。

それに気付いて、背中の引き攣れるような痛みを無視して更に詰め寄る。

「以織をご存知なんですか?あの、今年20になる、美しい、えっと、布津から…っ」

「…いいから落ち着け。お前のいう『いおり』が、俺の知る『いおり』だとは限らない。」

「い、いいんですっ なんでも、以織の情報なら、なんでも!」

必死に言い募ると、最は何事かを深く思案するように黙り込み、やがてため息をついた。

「…分かった。だが、まずはお前の話が先だ。」

「えっ?」

「はつきり言おう。お前は疑われている。」

「う、疑われて…?」

なんだか不穏な方向へ進んでいる会話に不安を覚える。

最は腕にしがみついたままぽかんとしている佐波のその手を離しながら言った。

「回り番が言うには、お前はあの晩、二つの現場に居合わせているな。」

「二つの…現場?」

回り番、というのは…湊楼庵の周りをうろろろする佐波に話しかけ

て来た、あの小柄な男のことだろうか。
そういえば、と佐波はあの晩のことを思い起こした。

「??? 霈「ひさめ」さんと合流した時、私は誰かに…しかも複数名に付けられていた。それらも皆”回り番”…？」

あれは確か、突然吹き飛んだ溟楼庵の壁から飛び出してきた男を、偶然通りかかった自分が加勢して捕らえた、その後のことだ。

もしそうなら、やはりあの時から目を付けられていたのか。

他に『居合わせる』ようなものには思い当たるものがないから、恐らく一つ目の”現場”はそれだろう。

「??? だが、二つとは…？」

困惑気味に眉根を寄せた佐波の表情を、その暗い瞳で見つめていた最は、ふ、と口元を歪ませた。

「まあいい。俺の本分は医者だ。お前が何者であろうと、処遇が決まるまでの怪我の面倒は看る。それに、俺がせずとも警吏と回り番がお前を尋問することだろう。」

「じ、尋問!？」

「心配するな。一応お前は総主の恩人だ。真偽の程が定かでないうち、死に至る程の尋問は受けないはずだ。」

「そ、それは拷問というのでは…!？」

細かい事は気にするな、と真顔で言っつて、最は心配そうに佐波を見つめていた早音に視線をやった。

「早音、お前は先に食事の準備をしてくれ。こいつは丸二日何も食べていないからな。」

「あ、はい。畏まりました。」

ハツとした表情で我に返った早音が、楚々と礼をすると立ち上がる。そこにもう一度、最は言葉をかけた。

「ああ、ついでにこの双子も連れて行け。診療の邪魔だ。」

「はい。…真灯、耶灯、行きましょう。」

早音に優しく促されて、双子は少し戸惑うように佐波と最を交互に見る。

その目に浮かぶ訴えかけるような光に、佐波は思わず声をかけていた。

「…もしかして、私に何か???」

???何か、話があるのだろうか。

目が覚めるのを待っていたかのように部屋に入って来た双子の様子を思い出しながらそう問おうと口を開いた佐波を、最がきっぱりと止める。

「全ては診察の後だ。真灯、耶灯。外に出ろ。」

揺るがぬ口調で言われて、双子は渋々といった様子で立ち上がると、静かに部屋を出て行く。

が、部屋を出る直前に一人が振り向き、佐波に小さく手を振った。

???真灯、かな。

反射的に小さく手を振り返す。すると、無表情に近かった少年の顔

がぱつと華やいだ。

????か、可愛い！

ニコニコ笑いながら足早に去って行った少年を無言で見送りながら、内心で少年の可憐さを褒め讃える。

佐波にはかつて幼い弟がいた。一家離散でどこかの貴族の養子として貰われていったはずだが、無事に生きていればあれくらいの年齢になっているかもしれない。

他の兄弟には徹底的に苛められていた佐波だが、一番下のその弟とは彼がまだ幼いこともあって比較的良好な関係だった。というよりは、接点があまりなかった、というべきなのだろうが。

そんなことを考えて癒されていた佐波は、すぐそばで地に沈むような暗い空気を醸し出す男の存在を思い出してぎくりとした。

????そういえば、診察って…

もしかしくなくても、彼がするのだろう。

別に、今更恥ずかしいとかそういうんじゃない。

今の自分の様子を見れば、意識のない自分の怪我を治療してくれたのはこの男なんだと理解も出来るし感謝もしている。

でも、なんとなく不安な気持ちになるのは…この男の醸し出す黒い気の所為か。

???出来れば早音さんに…いないし！

いつの間に部屋を出たのか。すでに姿の見えない早音の姿を部屋の中に探すが、もちろん何処にもいない。

つまり今は、この男????最と二人きり…

「…行っただか。」
「ひっ」

ぼつり、と低く呟いた言葉に過剰に反応した佐波を、最は訝し気に見た。

「どうした、別に獲って食ったりしないぞ。切って貼ったりはするかもしれないが。」

「そ、そそそそれが怖いんです…!!」

男の、どこまでが本気で冗談なのかはつきりしない暗い真顔で言われると、怖さも倍増だ。
若干本気で怯え始めた佐波を、最は暫しじっと見つめた。
そのまま数十秒が経つ。

「…っ あ、あの?」

溜まらずに震える声で言葉をかけると、最は「ああ…」と視線を畳みずらした。
そして、

「お前、『いおり』を探していると言ったな。」

「!は、はい!」

思わぬタイミングで得られそうな情報に、恐怖などどこかへ行ってしまった。

代わりに、体中に緊張が走る。出来ればこんな俯せの状態ではなく、ちゃんと座って話を聞きたいものだが…

どうにかして座れないかと模索している佐波に、最は静かに言った。

「一つ言っておくが、『いおり』という名の男娼は湊楼庵にはいない。」

「…えっ」

ショックで思わず小さく叫んだ佐波の様子を、男の暗い瞳が捉え、そのまま言葉を続ける。

「これはどこの遊郭にも言える事だが、遊郭「ここ」に来て遊女や男娼になる者たちは、それまでの名を捨てて、ここでの通名」とおりな」を持つようになる。場所により様々だが、湊楼庵では遊女には「鳥」の名を。男娼には「花」の名前を付けることになっているようだ。『いおり』もまた、ここでは別の名を持っている。」

「通名…」

言われて、佐波は自分の無知さを痛感した。

使用人同士の風の噂で以織が湊楼庵に売られていったと知ったのは、もう随分前だ。その時は確かに『以織』の名前は出ずに、布津の没落貴族の姫の代わりに売られていった使用人、という呼ばれ方をしていたように思う。

佐波にはそれが以織のことだとすぐに分かったが、あの頃すでに遊郭「ここ」では別の名で呼ばれていたのだ。

「…以織の通名をご存知ですか…？」

恐る恐る問うと、最は僅かに目元を緩めた。

先ほどの歪んだ口元といい???もしかしたら笑顔のつもりなのかもしれない。

「…お前の言う『いおり』が、俺の知っている『いおり』だとしたら、知っている。」

「っ…い、以織は、以織は今…！」

どこに、と口走りそうになるのを、男が止めた。

「焦るな。一つずつだ。…『いおり』の通名は『君影』『きみかげ』という。」

「きみ、かげ…？」

「知らないか。冬の最中に咲く、小さな白い花のことなんだが。」

「…！し、知ってます！」

君影草「きみかげそう」。確か、家が没落する前まで、家の裏の花壇でこっそり二人で育てていた花だ。

控えめな星形の花がいくつも咲く宿根草。冬の最中に雪を割って顔を出す、少し珍しい花。

あの花の種を買って来てくれたのは以織だった。家から離れられない佐波の為に、彼は珍しいものをよく買って来たり拾って来たりして佐波を楽しませてくれていた。

「…？間違いない、以織だ…！！」

歓喜に打ち震えた佐波が、更に詳しく以織の情報を聞き出す、その前に。

黒衣の男は、その陰鬱な表情で淡々と言った。

「『君影』は、2年前に流行病で死んだ。もう、ここには存在しない。」

10（後書き）

君影草は現実には存在しますが、それとは別のものだとお考えください。
（でもモデルはその花なので、基本は同じかも…）

——今暫く待てだど…！？

大皇都内、宮廷庁の渡り廊下を、左相「さそう」は肩を怒らせながら歩んでいた。

吟遊詩人が、天津国の天女もその美しさに惹かれて舞い降りると謳った美しい庭園には一切見向きもせず、彼は無意識に立派なあご髭を撫で、先ほどの皇帝との謁見を反芻「はんすう」する。

その大事な御身の命にも関わることだというのに、まだ若き皇帝は左相の話にまともに取り合った様子も無く、のらりくらりと言葉を躲「かわ」し『審議の結果が出るまで今暫く待たれよ』の一点張り。

最後には『憶測で騒ぎを大きくするな』と釘まで刺され、謁見の間は半刻もたたずに終了した。

多忙な皇帝の偉大なる業務を邪魔するつもりはない。だが、厄介払いと言わんばかりに追い出されれば腹も立つ。

——帝「みかど」は解っておられぬのだ。もし事が起きれば、ご自身の命はおるか、永き世の皇帝家に幕を引きかねぬことを…！

腹から胸にかけて蟠「わだかま」る感情を持て余し、ずんずん廊下を進む左相は、ふと前方から近づいてくる人影に気付いた。

——あれは……

ぐっとわき上がった嫌悪感を飲み込むと、左相は平然を表情に貼付けて、極めていつも通りに振る舞った。

「これは左相閣下。お久しぶりですね。」

宮廷の礼儀としてすれ違い際に一応の礼を取ろうとした左相に、若い男が揚々と声をかける。

壮年の左相からすれば、まだ子どものように見えるその若者は、聞いた話だと今年で27。

ニコニコと如才ない表情をその整った顔にのせ、穏やかな声で歌う様に語りかける様は、一見するだけではただの若い貴族議員、否、議員にすら見えない。

だが、この男がその並ならぬ才覚で、僅か数年でこの地位まで上り詰めたことを知っているだけに、左相に油断はなかった。

「久しいですな、右相「うそう」殿。本日は如何されました。」

にこやかに、友好的な笑みを浮かべて左相が問う。議員になれば、誰しもこれくらいの技術は身に付くものだ。

左相のその問いに、右相——皇国「このくに」で皇帝、左相の次に大きな権力を持つこの若い男は、まるで裏のない笑顔で言った。

「皇帝陛下のご機嫌を伺いに行くところです。閣下は、今お帰りですか？」

「ははっ 執務が忙しいからと追い出されてしまったのですよ。本日は退散致す所存で。」

「おや、そうですね。では私も止めた方がいいかもしれませんねえ。」

男は「ふむ」と一つ頷き、「そういえば」と軽く続けた。

「先だての溟楼庵の大火をご存知ですか？」

「…勿論。皇都内に知らぬ者などおらぬでしょう。」

「ははっ それはそうですね。失礼致しました。——では、その大火が、何者かによる放火の可能性があることはご存知ですか？」

声色を一段低くして、どこか楽しむような口調で言う右相に、左相は平然と応えた。

「そのような噂があると聞いてはおりますな。なんでも、事前に刃物を持った男が押し入ったとか。」

「さすが左相閣下。お耳が早くていらっしやる。今警護方で調べさせているところですが、何分、全て燃えてしまってますからねえ。証拠は殆ど、上がっていないそうですよ。」

情けないことです、と嘆くこの優男が、まさか皇国内の治安を維持する為の司法機関・警護府の”実質の”総司令官だと誰が信じられるだろう。

警護府とは、軍部総統司令府と権力を二分している国家機関だ。

大体の議員は警護府や軍部から担がれた、家位の高い者たちが選出される。

もちろん議員になる者は機関からの脱却が条件とされているから、現在の総司令官は別に存在する。

だが、それは表面だけのこと。実質的には、権威の下に身を寄せるのはどこの機関も同じ事だ。

左相は、ぴくり、と眉を動かした。

「ですが、聞いた話では押し入った男は回り番が捕らえた。」

「ああ。確かに、一時は捕らえたようなのですが、火事のどさくさで…。手引きした遊女も服毒死したそうで…。面目もない状況です。」

ほとほと困った、という顔の男に、左相は内心で毒を吐く。

―― 抜け抜けと… 黒幕の第一容疑者が何を言うか。

けれどももちろん表情には出さずに、同じ様に残念そうな顔を取り繕う。

「それは難儀ですな。では、現在はその輩を手配中なわけですか。軍部「こちら」も、何かお役に立てると良いのですが。」

左相である彼も、右相と同様国家机关―― 軍部からの担ぎ上げだ。国内でのことはどうしたって警護府に分があるが、国境付近ならば軍部にも指導権が与えられる。

もしこの男が黒幕だとすれば、わざわざ実行犯を逃がすためだけに国境を冒すようなリスクは負わないだろうが、事を”成し損ねた”輩が身の危険を感じて国外に逃げ出す可能性はある。それを捕らえられれば、一気に全てのカタが付くのだが…

だが、そんな左相の含みに恐らく気付いているであろう男は、何も知らない無垢な若者のように笑って、

「あ、いいえ。輩の身は確保しているんですよ。まあ、骸」むくろ「としてですが。」

遊郭沿いの川で上がりました。と、さもアッサリと言い放った。

そして思わず口を閉ざした汐甫に構わず、独り言のように呟く。

「不可解なのは、上がった骸が”三つ”だったこと。そしてそのうちの一人の身元は判明しているところですかね。」

「…ほう。そういえば、押し入ったのは二人でしたか。もう一人とは？」

「もう一人の骸は地方豪族の使用人らしいのですが…どうにも、こちらも不可解な話で。」

言いかけて、ふと男が顔を上げる。

それと同時に、右相の後方から若い男が音もなく姿を現した。

「右相閣下。」

「景林「けいりん」か。」

景林と呼ばれた右相の部下は、その感情の読めない能面のような顔を伏せると礼をとった。

「お話し中申し訳ありません。査問の準備が整いました。」

「——ああ、もうそんな時間か。」

皇帝陛下にご挨拶する暇もない、と右相の青年は肩をすくめて笑うのに対して、左相は鋭く目を光らせる。

「右相殿。査問とは？」

「はい。その渦中の溟楼庵より、参考人として総主を召還しているのです。状況は不可解でも、怨恨の線が一番疑わしですから。」

「ほう。しかし、右相殿が直接査問を会す程のものですかな。」

「ははっ 私も参っているのですが…曲がりなりにも、あそこは皇府公認の遊郭街ですからね。”万が一”があつてはならぬと、」

皇帝陛下の勅命でございます、と右相は目を細めた。

「皇帝陛下の——」

思わず表情を固くした左相が、次の言葉を発するよりも早く、今度はまた別の男が渡り廊下を駆けて来るなり声を荒げた。

「左相様！こちらにおいででしたか——あつ　これは右相様も……！」

中年のその男は左相の側に右相の姿を見つけると、慌てて膝を折り礼をとった。

それを軽く手で制して、右相の青年はニツコリ笑う。

「畏まった礼など不要ですよ。私はここで失礼しますから。」

言って、左相に慇懃に礼をした。

「長らくお引き止めしてしまい、申し訳ございませんでした。」

「——ああ、こちらこそ、貴重な時間を頂きましたな。」

出来ることなら、ここで全てを問いただしたいという気持ちに駆られるのを、左相はぐつと顎を引き耐えて同じく礼をとり、けれどもやはり我慢ならず、横を通り過ぎる右相に言葉をかけた。

「……そういえば、右相殿は溟楼庵の先代の総主と懇意の仲であったと伺っております。奥方との縁「えにし」を結んだのも、先代総主の仲立ちだと。——いやはや、羨ましい縁故ですなあ。」

彼の正室は、皇家とも繋がりのある貴族の娘だ。婚姻を結ぶことで現在の地位を得た”成り上がり”の右相を揶揄するように言う左相に、彼の足が止まった。そして穏やかに振り返り、

「ええ。私のような何も持たぬ男を受け入れてくれた妻には感謝しています。もちろん先代総主にも、色々とお世話になりました。婿養子としての立場は、まあ、納まりが悪くはありますが。」

贅沢ですよねえ、と笑う右相。

その姿はどこから見ても年相応の、ただの若い男だ。

——揺さぶりも効かぬか。…忌々しい。

左相が考える限り、今回の黒幕として一番疑わしいのがこの男であることは間違いない。

ただの一仕官だった男が、あつという間に頂上まで上り詰めて来て、次は更に上——左相の地位まで脅かしている。

…否、左相の地位ばかりではない。男の野心一つで国家が揺らぐ。それほどの才覚をこの若き右相は秘めている。

——今回の件、その布石として起こした騒ぎだとしたら…

左相は、内心で舌打ちした。

この男の底知れぬ腹を探ったところで埒があかない。軍部からの叩き上げである自分と同等に渡り合う男の度量には感謝すらするが、敵となるならば全力で潰す覚悟でいかなば、こちらまで引きずり込まれてしまう。

左相は気持ちを切り替え、今度こそ別れの礼を述べた。

「詰まらぬ詮索をしましたな、失敬。では、私もこれで。」

後ろに今しがた来たばかりの中年の下士官を引き連れて、左相は風を切って去って行く。

その背を見送って、右相の青年は踵を返し、背後から静かに付き従う下士官に言った。

「総主は。」

「閣下の執務室に通しております。」

「そうか。——にしても左相様も、お人が悪いな。」

ふふ、と楽しそうに笑う男に、主に忠実な下士官の男は無言で返す。それに構わず、男は続けた。

「気付いてはおられぬだろうが、いい線突いてきた。いつそ手を貸してくれるなら、話は早いのだが。」

「それは無理な相談でしょう。閣下の個人的な願いなど、受け入れられるどころかそれを盾にされかねません。」

「わかつてるさ。だからこうして、面倒なことにわざわざ首を突っ込んでいる。」

至極詰まらなそうにそう呟いて、ふと思いつて下士官に告げた。

「今日は帰らぬと、家に伝えてくれ。」

「…先月期から一度もお帰りになられていませんが。」

「他人の家のことに口を出すもんじゃないよ。」

「ですが、奥様が」

つい言い募った下士官に、男は振り返った。

男の本質を表すような、穏やかな笑顔を消した冷たい表情。

その口元が微かに歪んだ。

「僕の妻は、彼女じゃないよ。」

下士官はさつと膝を折り「失礼いたしました」と頭を下げた。

それを一瞥して、男は再び踵を返す。

全てが、酷く面倒だった。いっそ地位など返上して、一人で行動した方が いいのではないか。

もう何度も考えた思案が過って、その度に首を振る。

身分も肩書きもない自分がこの世界でどれほど卑小な生き物であるか、知らぬ訳でもない。

動かせる手駒は、多ければ多い程いい。

——早く。一刻も早く。

最愛の妻を脳裏に浮かべた青年は、小さく微笑むと、未だ膝を折り頭を下げている下士官に告げた。

「——参ろう。」

青白い月明かりが、部屋の薄闇を照らしている。

多くの人間がこの屋敷に滞在しているずなのに、どういいうわけか物

音一つしない。

まるで冥府の前にあるという、惜離「せきり」の谷のようだと、耳鳴りがする頭で佐波はぼんやりと思った。

惜離の谷は、死人と生者の夢の通路とも云われている。思いの強い死人が、冥府の門をくぐる前に、この谷を通って生者の夢枕に立ち別れを惜しむのだと。

”青く静かなる谷、時を刻まず。されど止「とど」まることは許さず。己「おの」が愚欲を制し、歩き通した者だけが、再び輪廻で見「まみ」えることを許される。”

皇国「このくに」の吟遊詩人ならば誰でも謳える『冥府不迷異「めいふまよわずのこと」』の一節を思い出し、佐波は硬直していた頬を僅かに歪ませた。

昔、佐波の屋敷に訪れた吟遊詩人が、この謳を詠んだことがある。まるで死の世界を行って帰って来たかのように、すらすらと諳「そら」んじる男に佐波は感歎し、以織にその話を聞かせた。すると以織は、いつもの穏やかな笑みを消して、真面目な顔で言ったのだ。

『冥府などという存在は、私は信じません。死ねば人はそれまでです。』

その言葉は、佐波の知っている以織の姿とはかけ離れた、酷く冷たいものだった。

それに驚いて言葉を失った佐波に、以織はようやく自分の言葉の威力に気付いたのか、小さな声で付け足した。

『…冥府に行けば、人は業と徳だけの存在になり、現世での記憶を全て失い新たな生を受けると聞きます。私は、そんなのは嫌です。』
『…どうして?』

『私にとっては、姫様のお側にいられる、この世こそが天津国です。思い出すら失って、どうやって新しい生を受けられましょう。』

それくらなら、全てが無に帰す方がどれほど心安らかか、と言う真剣な顔の以織に、佐波は一瞬固まって、そして破顔した。

『以織は吟遊詩人になれるね。いや、見世芝居の演じ手もよさそう！』

ニコニコ笑って応える佐波に、彼は少しだけ物足りなさそうな顔をしたが、すぐにふわりと笑った。

その笑みが大好きで、思わず抱きついた佐波を、彼は大切なものを囲うように柔らかく抱きとめる。

まるで幼い恋人同士のような、密やかで穏やかな、閉ざされた世界。風が舞い、雲が流れ、やがて別れの冬が訪れた、その後も。

枯れる事のないあの日の光景を頼りに、佐波は長い長い冬を一人で歩んで来たのだ。

焦点を失った瞳が、じわりと滲む。

瞼が爆ぜるように瞬いて、ぼろりと珠の涙が溢れた。

黒衣の医師——最は言った。

2年前の冬。 ”君影” は流行の病に倒れ、三日三晩の高熱の末に死んだ、と。

『あの年は例年よりも流行病による死者が多かった。湊楼庵だけでも一ヶ月（一ヶ月）で十数名の死人が出ている。もちろん、俺も全

ての死人の名前を覚えているわけではない。だが、君影の死は別だ。君影は太夫「たゆう」だった。ここに来て2年足らずで、遊郭の最上位まで上り詰めた。最後の顧客は、前皇帝だ。」

弔いも、埋葬も、歴代の太夫一絢爛だった。と最は静かに語って、茫然自失している佐波を見た。

『死んだとき、君影は18だった。死ぬ3年程前、布津の方から流れてきたとも聞いたことがある。しかし、お前の”いおり”が、君影だという証拠はない。君影の念写も、姿絵も、顧客の履歴さえ前皇帝が徹底的に廃棄させたからな。だがもし”そう”なら…』

残念だ、と呟いて、彼は佐波の怪我の措置もそこに部屋を去った。

人払いをしたのは、治療をする為ではなく、このことを知った佐波が受ける衝撃を想定してのことだったのだろう。

実際、佐波は男が部屋を去るまでの間、一言も口がきけなかった。「嘘だ」と絶ることも、「それは以織じゃない」と笑い飛ばすことも、何一つ出来ない。

ただ穴の開いた肺で呼吸をするような、底の無い桶で水を汲むような、果てしない無力感と脱力感が佐波を支配していた。

——もし。

青白く光る障子を眺めながら、佐波は思う。

——もし、最の云う”いおり”が、自分の探している”以織”だとしたら。

否、本当は気付いている。

同じ時期、同じ出身、同じ名の男娼が遊郭に売られてくるなんて物語よりも奇妙な話より、死んだその太夫が以織だったと考える方が遙かに自然だ。

”いおり”が”以織”である理由を探すより、ない理由を探す方が困難であることに、とつくに気付いているはずの頭が、けれど受け入れる事を拒否する。

それを受け入れるということはつまり、佐波が本当に本当の意味で、全てを失ったことを意味するからだ。

家も、家族も、仕事も失い、約束まで絶たれた人生に、一体なんの意味があるだろう。

—— 2年。 2年も前に、以織は逝ってしまったというのか。

佐波との約束を待つことなく、一人で、旅立ってしまったというのか。

記憶の中の以織の姿が幾つも瞬いて、肺から震える熱い吐息が溢れ、かつと目の奥が熱くなった。

絶望の雫が、次々に力無い身体から滑る落ちる。

悔しくて、全てが煩わしくて—— どうしようもなく寂しかった。

会いたい。ただ一目でいい。言葉を交わせなくとも、罵られても、恨まれても、殺されたって構わない。

ただ、ただひたすらに、以織に会いたい。

思い通りにならぬ身を擦って、佐波は泣いた。

溢れた涙は、伏せた枕に吸い取られて消えていく。

嘆きも慟哭も全て受け入れる、青い月明かりの部屋で。

佐波は絶望に終わりなどないと—— 知った。

サツキは、目の前で半身を起こし、死んだような顔で藥湯を啜る少女——佐波を観察していた。

彼女は、こういうのも失礼だが、取り留めて特徴のない平凡な顔立ちをしている。

前回の見立てでは、背丈は17という歳程にはあつたはずだ。

どちらかという肉薄で、さすがに男と比べると丸みはあるが、中世的な体つき。

髪を結っている時は一目で女子だと分かったが、火事で焼かれた髪が肩ほどで長短散らばり、そして現在のやや囊「やつ」れ鋭さを持った表情から、14、5の少年のようにも見える。

年齢的には年頃と云えるのだから、化粧の一つでもすれば随分印象が変わるだろうに、と思いながらも、この素朴さがある意味彼女の魅力であり、無害さの象徴かもしれないと思い直した。

——しかし、見た目では人は推し量れない。

見た目の怪しさで云えば最上級のルツカといつも一緒にいるだけに、その辺りは抜かりない。

…抜かりない、はずなのだが。

佐波の尋ね役として選ばれたサツキは、ここに来る前に、面会の許可を得る為に医務室を訪れた。

昨日は佐波の体調が思わしくないと断られたので、もしかしたら数日は無理かもしれないと覚悟していたが、今朝はあっさりと許可が下った。――ただし、条件付きで。

『あの娘は今、不安定な精神状態にある。今後アレから情報を引き出したいなら、あまり急かさないでやれ。』

いつ見ても不気味な黒衣の医師・最は机に向かい、黙々と書き物をする手を休めずにそう言った。

彼もまた、その死神のような容貌に似合わず意外と細やかな気遣いをする、見た目では推し量れない人物だ。

『不安定……って、火事の事で？』

思わず、サツキは問い返していた。

壁に開いた穴から飛び出して来た男に、躊躇無く的確な蹴りを入れるような少女だ。

白刃を恐れるどころか、素早くその胸元に飛び込んだり、燃え盛る火の中に飛び込んで行ったりと、年頃の娘にしては”少々”雄々しい姿も目撃しているサツキからすれば、それくらいで今更精神が揺れるようなヤワな子じゃないだろうと思わずにいられない。

サツキの訝し気な問いに、最は手を一旦止めて、ゆっくりと振り返る。

――その光を返さない黒々とした瞳は、ただ静かに「詮索無用」

と告げていた。

仕方なく引き下がったものの、釈然としない。

第一、急かすなと云われても、そう悠長にはしていられない。

今のうちに何がどう悪いのか知っておかなければ、言葉を選び損ねてしまうかもしれない。

勿論それは尋問を有利に進めたいという回り番「こちら」の驕りであり、佐波の心を土足で踏み躪「にじ」りたくないという気持ちの現れでもある。

情報を仕入れる為に次にサツキが向かったのは炊事場だった。

朝一番の大仕事——臥龍城に滞在する全ての人間の朝餉の支度とその片付け——がようやく終わった其処「そこ」は、既に昼食の準備に取りかかっている、酷く混雑していた。

溟樓庵ではサツキも時々加勢に呼ばれたことがあったが、厨房はまさに戦場の名に相応しい場所だった。

それまでは夜通し客の相手をする姐さんや兄さんの体力に勝るものはないと思っていたが、昼夜問わず食材と格闘し続ける厨房人はその上を行っている。

サツキは慌ただしく動き回る厨房人の邪魔にならないところで目を走らせ、目的の人物——早音を見つけた。

臥龍城「ここ」での彼女は主に病人食の担当で、朝から忙しく働いている。

その合間に佐波の世話をしているというから、彼女も相当タフだ。呼ぶと、彼女はその優しい気な面差しでサツキを見留め、すぐに駆け寄ってくれた。

まるで仲の良い姉妹のように接してくれる早音は、突如殺伐とした世界に放り出されたサツキにとって、オアシスのような存在だ。

忙しい彼女にまず謝罪をしてから事のあらましを告げると、早音は「まあ」と頬に手を当てて困った顔をした。

『私も、最様から詳しくはお聞きしていません。昨晚、食事をお持ちしましたが、その時から既に佐波様のお心はここに在らずで……。出された食事にも全くの無反応で、まるで身体を残して心だけが冥府に行ってしまったようなお顔をしていらっしかったですわ。』

佐波の様子を思い出しているのか、早音の表情が翳る。

そして、少し躊躇うような間を見せた後、そっと声を潜めた。

『…実は、そのご様子がどうしても気になって、最様にお伺いしたのです。そうしたら最様は』

——あの娘の探し人が、すでにこの世にいなかった。それだけのことだ。

静かにそう答えて、早音を下がらせた。

口では”それだけ”と言いながら、彼も佐波の様子を気に掛けていた事を、長年側で仕える早音が気付かないわけがない。

『きつと酷くお心を痛めていることでしょうね…』と気遣わしく咳く早音に対し、サツキは脳天からさぁっと血の気が引いていくのを感じていた。

——探し人が、すでにこの世にいない。

それは、サツキが最も聞きたくない言葉だった。

「…あの、…ありがとうございます。」
「えっ？」

いつの間にか思案に耽「ふけ」っていたらしい。

目をぱちぱちさせて焦点を合わせると、薬湯を飲み干した佐波が、血色の悪い顔でサツキを見ていた。

ちなみに薬湯は、早音から持って行く様に頼まれたものだ。朝食に手をつけられなかった佐波の為に作られたものらしい。

その旨を伝えると、佐波は青白い顔に申し訳なさそうな表情を浮かべ、素直に薬湯に口をつけた。

あれだけの怪我をしたのだ。最は許可を出したが、まだ体調が思わしくないのかもしれない。

???否、体調よりも、心傷が彼女から生気を奪っているのだ。

佐波は赤く充血した目でじっとサツキを見つめ、そして不意に頭を下げた。

背中の怪我の所為で殆ど礼とは云えない程の首の動きだったが、それが何事が畏まった行為であることは明らかだ。

「…早音様からお聞きしました。あの火事の夜、私の怪我を真っ先に見て下さったのは、サツキ様だったのですね。」

「…ああ、そういえばそんなことも…」

その後があんまりにもごたごたしていたので、すっかり忘却の彼方だった。

しかし、畏まって礼を言われるまでのことでもない。

結局サツキがしたのは止血と傷口を水で洗う事くらいで、その後は重傷だと聞きつけて応援に来てくれた他の医師達に任せたりだったのだから。

謙遜と取られてしまいかもな、と思いながらも「大した事はしてないわ」と応えると、案の定佐波は首を振った。

「最様から、最初の処置が早かったから、この程度で済んだのだと教えていただきました。サツキ様には、医術の知識が…？」

「ええつと…まあ。…怪我の具合は？」

元の世界では、確かに看護を学んでいたけれど、自慢出来る程の経験はない。

なんとなく後ろめたくてサツキが早々に話を逸らすと、佐波はふ、と口の端を歪めるだけの笑みを浮かべた。

「大事ございません。皆様のご尽力のお陰です。」

そう言つて、おもむろに睫毛を伏せる。

「…こちらの方々には、本当に良くして頂いております。ですが、このような厚遇は、私のような使用人風情には過ぎたものです。幸い、身を起こせるまでに回復いたしました。これ以上…こちらでお世話になるわけには参りません。」

彼女は再び、今度は可能な限り深く頭を下げた。

「ご恩は生涯忘れません。治療代、宿代、食事代は、必ずお返しに参ります。どうぞ、離宿のお許しを、進言しては頂けないでしょうか。」

静かな声だった。平坦で、熱もなく、それ故に聞く者を頷かせてしまうような。

だが、もちろんその願いを聞きとめることなど、土台無理な話だ。

「それは出来ないわ。」

サツキは出来るだけ冷たく、ハッキリ言い放った。

「あなたをここから出すことは出来ない。そして他の者と同じ待遇に置く事も、外部の者と接触させることも出来ない。——どうしてか、わかる？」

頭を下げ誠意を見せる彼女に対し、自分のこの高慢な態度はどうだ。と心の中で自分を罵倒する。

それでもサツキには、佐波の提案を叶えてあげる事も、受け止める事すら出来ない。

回りくどく断ることよりも、今彼女が置かれている現状を正確に伝える事が”誠意”だと、サツキは信じた。

「病み上がりの貴方に、こんなことは言いたくない。でも、貴方はこの騒動の容疑者の一人なの。現場に居合わせている以上、全てが明るみになるまでは、解放することは出来ないわ。」

「…騒動とは…あの晩の…白刃を持った男達のことですか。」

まるで断られることを知っていたかの様な落ち着きで、佐波は尋ねる。

揺さぶりをかけられていることは明らかなのに、なぜ今、こんなにも真っ直ぐな目で見つめて来る事が出来るのか。

常人ならば、全く身に覚えのない罪の容疑者だと言われれば動揺して当然のはず。

では彼女が？まさか…

いつの間にか公平を忘れ、佐波に肩入れしようとしている自分に気

付いて、内心慌てた。

しかし表面には、あくまでも仕事の顔を貼付ける。これくらいのこととで、呑まれるワケにはいかない。

サツキは顎を引いた。

「そうとも言えるし、そうでないとも言える。」

「……？」

「因果関係が明らかでないの。結論を出すには情報が足りない。……でも、あなたの現在の嫌疑はハッキリしてるわ。」

その表情の変化一つ見逃すまいと、目を凝らす。

『何も信じるな。人も、己も。俺たちの仕事は只一つ。疑うことのみと知れ』

そう教えてくれたのは、サツキとルツカに仕事を与えた男だった。

彼は無情な掟を口にした、それと同じ口で言った。

『忘れるな。お前が気を許した数だけ人が死ぬ。疑うことで、守れるものもある。』

なんて世界だ、と思った。

だが、これがサツキが今生きている世界の現実。

受け入れるか否かは問題ではない。生きたければ、受け入れるしかない。

サツキは、理性の命ずるままに、表情を凍らせて言った。

「あなたへの嫌疑は……？？？総主の御子の誘拐未遂よ。」

12（後書き）

今回はサツキ視点です。ある意味ダブルヒロイン。
最先生が意外と優しい人で私もちよつと吃驚してます。

体調、ほぼ完治です。熱も引きました！

励ましのお言葉、本当に嬉しかったです。

ありがとうございました！ラブ！m（
――）m

「誘、拐…？」

佐波の表情のない顔に、少しの動揺が広がった。

その瞳孔の動き、仕草、口調に人間が嘘を付く時の癖を見つけようとしている自分がいる。

サツキはやるせなくなつた。

「…あなたが、火の中から真灯を助け出したのは事実よ。でも、それが偶然か故意か、私たちに判じる事は出来ない。それに」
「待って下さい。」

初めて佐波が言葉を遮った。

「なぜ”誘拐”だと？私には、どうにも突飛な話に思えてならないのですが。」

緊張の影を表情に落として言う。

その言はもつともであるが、疑いの心を通してみれば、白々しくもある。

サツキは視線を下げ、冷静である為に一つ息をついた。

「順を追って話すわ。四日前の夜…」

——四日前の、あの火事の夜。

サツキは班長から、不審な動きを見せているらしき湊楼庵の油役「あぶらやく」を見張るようにとの命を受けた。

油役とは行灯に灯油「あかりゆ」を注す役目のことだ。

基本的に世間とは真逆の時間感覚を持っているのが遊郭というものの。陽の入り、夫々「それぞれ」の遊郭から松明を片手に飛び出した油役たちが、街を彩る極彩色の紙燈籠に灯りを点したのを合図に、客を迎える大門が解錠される。

油役たちはその後も各客間を回り続け、灯りが決して絶えぬように夜通し働くのだ。

彼らには他にも、防犯や脱走防止、そして閨「ねや」での遊女男娼を客の横暴から守るといった仕事がある。

回り番が外の警護ならば、油役は内部の監視役といったところか。

ただ回り番は遊郭街全体で組織されたものであるが、油役は各遊郭が雇い入れている使用人だ。

班長が受けた報告によると、近頃その油役の一人に、勤務外の外出が増えていくという。

自分の休憩時間に郭の外に出るのは自由だが、使用人や行商人の為に昼時解放している小門を通る者は、誰であろうと逐一身元の確認と手荷物の検査を受け、それは事細かに台帳に記される。

その台帳を見れば、どこの遊郭の使用人がどのような用件で市井に出かけたのか、また、月に何回、どれくらいの時間かなどが分かるようになっている。

台帳役の調べによると、前月に比べて、その油役の外出回数は約二倍にも増えていた。

出向く用件も明確ではなく、それに気付いた他の油役が試しに後を

付けたが、撒かれてしまったらしい。

普段真面目で実直な男であるが故に、疑いは深まり、ついに回り番の出番と相成ったのだ。

先日大きな捕り物があつた為、警戒を怠らない意味を込めて、本当ならば数人体制で見張りたいところだったが、その日は月に一度の総主回楼「かいろう」の日。

遊郭街に軒を並べる郭の主たちが一つ箇所集まり、総主である湊楼庵の主と会談する為に集められる日だった。

湊楼庵は最古にして最大の郭「くるわ」だから、その主は自動的にこの遊郭街全てを束ねる”総主”となり、故に回り番の元締めも湊楼庵の総主ということになる。

遊郭が独自に雇っている用心棒達の警護はもちろんあるが、さらにその周りを固め見回りに徹するのが回り番の仕事だ。

万年人手不足の回り番としては、月に一度のこの日が一番頭が痛い。回楼に掛け切りで警備の薄くなるその日を狙って事を起こそうとする輩は大勢いるわけで、そちらの警戒を怠る事なく——時に力で解決しながら——街の秩序を守らなければならない。

この手の仕事に回されることの多いサツキとしてもさすがに「あと二人は融通して欲しい！」と班長に直談判したのだが、宛てがわれたのは公認相棒として認められているルツカただ一人。

もちろんルツカで不服な訳ではないが、体格からして規格外の彼とどうやって”見張れ”というのか、サツキには酷く疑問だった。

こうなればいつそ直接問い質してやろうかとも考えたが、回り番は遊郭で働く者たちの受けが頗る「すこぶ」る悪い。

密告・囹「おとり」・尋問・拷問、その他必要であればどんな事でも躊躇わない、遊郭街の私警吏ともいふべき存在なのだから、鬱陶しいを通り越して恐れられるのも道理だ。

面と向かつて行けば不必要に怯えられ、掴みかけたしっぱを切られる可能性がある。

それにサツキは——非常にご都合主義だと分かつてはいるが——その拷問紛いの尋問がどうしても好きになれない。

出来れば、何かしらの証拠を掴み、それを元に相手を自白に追い込みたかった。

——そうしてサツキが後手後手に回っている間に、この騒動は始まった。

恐らく当初より疑われていることに気付いていた男は、回り番であるサツキの目が自分に付いていることに気付くと、突如懷から白刃を抜いてサツキに襲いかかったのだ。

包丁、剃刀「かみそり」、簪「かんざし」の一本に至るまで嚴重に管理された遊郭で、ただの油役が白刃を所持出来るはずもない。

驚いて初太刀を避けながら、その間合いと刀身の長さから、白刃が狭い建物の中での斬り合いを想定した得物だと気付いた。

——用意周到。その割に、男の動きは素人で、緻密に練られたであろう計画とのアンバランスさが際立つ。

闇雲に白刃を振り回し、壁に、柱に、障子に無惨な跡を残しながら何事かを狂ったように叫ぶ男に気付いて、部屋から遊女が顔を出す。悲鳴。それに呼び起こされるように次々に騒ぎが広まり、辺りは騒然とした。

騒ぎがこれ以上大きくなるのを防ぐ為に、サツキは相棒の名を叫んだ。

呼び声に返事はない。だが、確実に意図を汲んだ大男は、その巨軀に似合わず得意な潜伏を破り、白刃を振り回す男そのものに強烈な拳を打ち込んだ。

どんっ という重い音。

横の障子が男と共に吹き飛び、ついでにその向こうの壁格子を破壊したのが見えた。

いつもの通り容赦も思慮もない力加減に、騒ぎは一段と酷くなる。

内心ルツカに『物の大切さとお金』の再教育を本気で考えていたサツキは、いつの間にかすぐ側に迫っていた別の男の白刃に気付くのが遅れた。

真っ直ぐ突き出されたそれは、サツキに届く直前に、騒ぎで駆けつけた他の回り番の懐刀によって防がれる。

礼を言う暇もなく、傾れ込むように打ち合いに突入するそちらを一旦思考から外して、ルツカが吹き飛ばした男を回収しようとするも、一足遅かった。

運良く軽傷で済んだのか、男は転がるようにして外と繋がる大穴――

――壊された壁格子――に飛び出したのだ。

――逃がすか！――

サツキは自身もその後を追いながら、咄嗟に叫んだ。

『誰か！そいつ捕まえて！！』

「――そしてあなたが居た。あなたは丸腰で男を伸」の「して、その後飛び出した白刃の男にも怯まなかった。」

じつと佐波の目を見つめる。

疑われている事への嫌悪も、自身の功績に対する賞賛の色もない、ただ静かな瞳。

自分が何か巨大なものに挑んでいるような気分になって、サツキは苦く笑った。

――こんな若い子に雰囲気で吞まれるようじゃ、まだまだね。自嘲したおかげで幾分か楽になって、少し肩から力を抜く。

「これは火事の後にハッキリしたのだけど、あの時敬麻？」けいま

しん」を飲んだ遊女は、油役の男と懇意の仲だったそうよ。白刃の男との因果関係は分からないけど、”白刃”の手配は手引きを図った遊女と油役の仕業と考えるのが妥当ね。」

「…恋仲、だったのですか。」

ぽつり、と言葉が返って少し驚きながら、サツキは頷いた。

「言葉も十分に交わせないうのにね。男女つてのは不思議だね。」

内部の者であっても、行動を須「すべから」く管理された遊女・男娼との間に、逢瀬の隙など与えられない。

油役の男と東館の遊女”鴉「かもめ」”の接点は、男が行灯に油を差しに来る、その僅かな時間だけだった。

客に組敷かれ喘ぐ愛しい女と、油差しの合間にそつと目線を交わす。たったそれだけの、やるせない、辛いばかりの逢瀬は一陽期（一年間）以上続いていたそうだ。

事を起こすまでに思い詰めるのも、仕方がない話なのかもしれない。——否、恐らく二人とも、その報われぬ恋に”油”を注いだ何者かによって利用されたのだ。

一つ瞬いて、サツキは本題を切り出した。

「あの日は総主回楼の日だった。月に一度、街に軒を連ねる遊郭の主達が、湊楼庵の総主と会談するの。

基本臥龍城「ここ」に滞在している総主が湊楼庵に訪れる時は、その御子である真灯と耶灯も同行するのが通例。

あの晩も、もちろん揃って来ていたわ。

——ここから先は、真灯の証言よ。

真灯と耶灯は、総主が主達と会談している間は、いつも別室で作法

や学術を習っているの。

二人が講師を待っていると、”油役”の男が、部屋の行灯に油を注しに現れた。

男は湊楼庵に雇われて五年以上になる古株で、真灯や耶灯とも顔見知りだった。

その油役に『総主が呼んでいる』と言われて、真灯はそれに従って部屋を出た。

用心棒達も、油役の男の実直さを知っていたからつい気を許し、真灯を率先する彼を見送ったそうよ。

一緒に働いていた他の油役達も未だに信じられない様子だし、よっぽど人望のあった男だったんだと思う。

ともかく、真灯はその後すぐに階段下の物置に猿ぐつわで閉じ込められた。

男は『傷つけたりしないから大人しくここで待っていてくれ。次にここを開けて入ってきた男の言葉に従って欲しい』と言ってすぐに立ち去った。

油役の男の顔を思い浮かべる。

細面で小柄な男。混乱で揺れる瞳は、泣きそうに歪んでいた。

サツキはその男を知らなかった。

遊郭街に流れ着いて2年経つが、数千人規模の従業者・使用人達全てを把握しているわけではない。

でも、回り番にとっては知らない方がいい時もある。人となりを知っていれば、斬る時に躊躇いが生じるからだ。

知るなら最低限、名前と役目だけでいい。

どれだけ実直だろうと、勤勉だろうと、傾くのは一瞬だ。一度傾けば、もう元の位置に戻る事はない。

それを学んだからこそ、サツキはようやく”疑う”という己の仕事を受け入れる事ができたのだ。

「——時系列でいうとこの直後、男が何食わぬ顔で仕事に戻ったその時から、命を受けた私達が見張りだし、それに気付いた油役が取り乱して白刃を抜いた。

その後はさっきの話の通り。もう一人の白刃の男と共に捕らえて、二人とも遊郭街の地下牢に連行され、人手が集まり次第尋問を開始する予定だった。——火事が起こるまではね。」

そうだ。あの火事さえなければ、今頃は全てが明らかになっていたかもしれないのに。

こんな風に、傷心の少女を問いつめる事もなかったかも知れないのに——

思わず緩みそうになる心をぐっと引き締める。

まだ、ここからが本番だ。

13（後書き）

更新、大変遅くなりました。（土下座）
もう少しサツキ視点が続きます。

「私たちが白刃の男達を捕らえてすぐに、西館裏手から火が上がった」

最初にそれに気付いたのは、やはり灯油を各客間に差して回っていた油役だった。

男が戸の隙間から流れ込む黒煙に驚き、慌てて戸を開けた時には、既に一部屋丸ごと火の海と化していたという。

火は瞬く間に燃え広がり、火事に気付いた者達の悲鳴や怒声で辺りは混乱に包まれ、サツキ達回り番は須「すべから」く従業者と客の誘導・救護に充てられた。

「火事を起こしたのが真灯を攫おうと画策した輩達かどうかは、今のところ確証はないわ。でもそう考えるのが妥当かもしれない。男達は火事の混乱に乗じて真灯を街の外まで連れ去ろうとした…。どちらにせよ、とんだ失策ね。真灯が言うには、真灯を連れ出そうとした男は、崩れて来た天井の下敷きになったみたい」

「…天井の下敷き…」

今まで黙って聞いていた佐波が、ふと言葉を洩らした。

彼女はまるで自分へ問いかけているかのようになり、ゆっくりと数回瞬き、

「私が真灯さんを見つけた時、すぐ側に崩れ落ちた柱の下敷きにな

った男の死体がありました。：腕に古い刀傷が」

「：多分そいつね。燃えちゃって何も残ってないんだけど」

腕に古い刀傷。もし彼女の話が本当なら、ピースの一つになるかもしれない。

確りとその情報を頭に叩き込みながら続けた。

「真灯が煙に撒かれて動けなくなっていたところに、あなたが現れた。あなたは真灯を火の中から連れ出し、その際に怪我をして、臥龍城「ここ」に運ばれた。???ここまでが今分かっている現状。ここからは、推測が混じるわ」

サツキは息を吸った。

「三日前、三体の他殺死体が川から上がったわ。そのうちの二体は、火事の晩に捕らえた白刃の男達だった」

「：！」

「誰かの手助けがあったのかもしれないけど：火事に紛れて地下牢から脱出したんだと思う。でも結局、何者かに斬り捨てられた」

見張りとして回り番の人員を割いて一人置いていたが、こちらは燃え残った地下牢で死体が見つかっている。

雇われて日の浅い男だったが、気の良い陽気な性格が皆に好かれていた。

脳裏に浮かんだ彼の笑顔を胸に刻んで言う。

「問題は三体目の死体よ。——あなた、布津の豪族家の使用人ね？」

「は、い…？」

「調べさせて貰ったわ。三つ目の死体は、家印の帯宛「おびあて」

をしていた。——これに見覚えは？」

サツキは、懷から懷紙を取り出すと、そつと畳の上に置いた。佐波の視線がそれを見留めるのを確認してから、懷紙を開く。その途端、

「——っ！」

今まで戸惑いの表情だった佐波の顔色が明らかに変わった。驚愕。そして困惑。まるで哀願するような視線を向けられて、サツキはそれをしつかりと受け止め、言った。

「これは、川から上がった死体が持っていた帯宛よ。これが何か——分かるわね？」

「……………わたしの仕えている…豪族家の家印、です…」

崩ぜんと答える佐波の目が、事実を拒むかのように何度も瞬く。

帯宛は、誰しもが持つ衣服の装飾品の一つだが、特に”家”の使用人達にとっては身分を証明する為の唯一の物でもあり、もし失くしたり、盗難にあいでもしたら、即お役御免とされるほど重要な物だ。その為帯宛は、普段から肌身離さぬように、家印を象った輪の中心に開いた二穴から帯を通し、身体に固定出来るようになっていた。命綱とも呼べるその帯宛を、売買するような輩も時にはいるようだが、裏に掘られた番号から個人の特定が可能な為、そのような危険を冒す者は少ない。

もちろんそれを知っているからこそ、これが物証になりえるのだ。

佐波が唇を震わせて、言葉を絞り出した。

「これは…誰の——誰の持ち物ですか？　なぜ、死体が——」
「…身元の確認はまだ済んでいないけど、時機に分かるわ。宿の方にいたあなたの雇い主——豪族家嫡子と使用人達は、警吏の方で足止め中よ。事件当日遊郭に来ていた三男と数名の使用人が行方不明になってゐるみたイだけど。」
「行方不明…！？」

佐波の声が震えた。

ようやく自分の置かれている状況が読めて来たのもあるだろうが、その言葉には仲間を純粹に心配する響きがあった。

サツキは同情心を抑えるのに苦心しながら、平然を装い言う。

「正直、状況だけ見ればあなたもあなたの雇い主も限りなく黒に近い存在よ。他所の使用人が火の中に飛び込んで命がけで子どもを救うより、それが崩れた”計画”の一部だったと考えた方がしっくり来るわ」

「…つまり、私が白刃の男達の仲間で…真灯さんの誘拐の役を担っている…？」

「とうより、あなたの仕える豪族家が”主犯”じゃないかって話ね」

「な、なぜ！」

「なぜかは私も知りたイわ。？？？それより、あなたよ」

佐波の動揺に揺れる瞳を、ひたり、と見つめた。

「あなたがこの計画に加担してゐる証拠を探すよりも、加担して”いない”証拠を探す方が遥かに難しイ……分かるわね？」

——悪魔の証明。サツキの世界では、時にそう呼ばれる”消極的

事実の証明”だ。

”ある”ことよりも”ない”ことを証明する方が困難を極めるのは、どこの世界でも同じらしい。

数秒、数十秒の沈黙が二人の間に落ちる。

じりじりとした緊張感に包まれた部屋は、驚く程静かだ。

こく、とどちらかの喉が鳴る。

言葉を発しようと口を開けた佐波が、やはり思い止まるように口を閉じ、それを数度繰り返した後、ようやく喉を押し開いた。

「私には…私には、サツキ様の意図が…分かりません」

吐息のような、掠れた声だった。

言葉の意味が分からずに眉根を寄せたサツキに、佐波は青ざめた顔で微かに笑った。

「…あなたのお話から察するに、私は嫌疑の渦中にあるようです。しかも、状況的に私が疑われるのは道理。なのに、あなたはきちんと状況を説明してくれて、更には私の身には不相応なこのような好待遇を許している。…正直、それが善意なのか、何か作為あつてのことなのか…」

言いかけて、ハツとしたような顔になり、すぐに首を垂れた。

「お許し下さい、疑っているのではなく…。ただ今の話を聞いてますます…私がこんなに良くしていただいている事に疑問を…それに、サツキ様のお気遣いにも???」

「…”善意”は信じられない?」

どうやら、自分が思うよりも佐波は色々と考えを巡らせていたよう

だ。

そう問うと、彼女は更に申し訳なさそうに頭を垂れ、

「…私の生まれ育った布津では、旧体制の身分制度が未だに根付いているところが多いのです。私のお世話になっていた豪商家のように、皇都との取引がある裕福な商家などはかなりマシですが、未だに使用人を”縷「る」”として家畜同様に扱う家もあります」

「る？」

知らない単語に思わず問い返すと、佐波は一瞬固まり、すぐに「ああ」と納得の声を上げた。

「サツキ様は、皇国「このくに」の生まれではなかったのでしたね。縷「る」”は身分階級の最下級の別称です」

「最下級…」

つまり、奴隷か。

佐波はコクンと頷いた。

「今は身分制度は解消されていますが、皇帝のお膝元である皇都を離れると、使用人を”縷”と扱う場所も多く…。…ええっと…だから、サツキ様を疑うわけではないのですが…どうしても…その」

「…自分が”力技”の尋問も受けずに、怪我の治療を受けていることが不思議だと…？」

「…ハッキリ申しますと…不思議です」

サツキは思わず呻きそうになった。

正直、そこを疑問に思われると少々…困る。

実際、佐波の身元が割れた時から、回り番の中には「指の数本でも

落としてやれば”本体”について何か喋るのではないか」と口にする者も少なからずいた。

確かに、ここまで状況が揃っているのなら、その方が確実だろう。もし冤罪だとしても、所詮は一介の使用人。潰してもどこからも文句はでまい。…それが皆の概ねの意見だった。

だがサツキにはそれを是と出来なかった。

サツキは佐波が火の中に飛び込んだ姿も、大怪我をしながら真灯を助けた姿も知っている唯一の人間だ。

あの時、怪我で意識の朦朧としていたであろう佐波が、真灯の頭を撫でた場面がどうしても頭から離れてくれない。

それだけで彼女を白だと言い張る気はない。だけど、拷問の末に潰れた彼女を見なくなかった。

悩んだ末に、班長に「仮にも総主の恩人である」ことを進言して、新たな証拠が出るまでは”実力行使”を控えるように求めたのはサツキだ。

班長はシドロモドロで説明するサツキを鋭く見据えながら、けれど最後には「ならお前が全ての責を受けろ」と尋ね役を一任したのだ。

???多分、班長も私の甘さに気付いてる。気付いていて、それでも任してくれた。

だからこそ、佐波には自分の甘さを見抜かれなかった。

死んでいった仲間の為にも、サツキたちの関係は対等ではなく、あくまでも佐波は疑われる立場なのだと、心に刻んでもらわねばならない。

「…次からは警吏も含めての尋問になるわ」

複雑な顔でサツキがそう言うと、佐波は今度はしっかりと???泣きそつな瞳を歪めて微笑んでみせた。

全てを分かっているような、深く凧いだ瞳。

「はい。覚悟は出来ております。ただ????」

その瞳が翳る。

「私がその…三人目の死体と面会することは…出来ないのでしょうかね」

「…それは無理ね」

その方が身元の確認は早いだろうが、もし本当に犯人側だった場合、変に情報を掻き回されても困る。

佐波は何事かを考えるように黙り込み、そつと問ってきた。

「…他の使用人達は、どのように過ごしているのでしょうか」

「軟禁状態だけど…今のところ、不審な点はないそうよ」

サツキがそう言うと、佐波はホツとしたように肩の力を抜いた。そして数回、自分を落ち着かせるように瞬いた後、背中 of 傷を庇いながらゆっくりと頭を下げた。

「私の証言で、彼らの処遇が良くなるのなら、どんなことでもお話します。どうぞ宜「よ」しなに」

「それはもちろん…」

望むところ、と言いかけて、ふと外の様子が賑わっていることに気付いた。

佐波の部屋は様々なことに配慮した結果、臥龍城の離れに用意されている。

ここまで賑わいが聴こえるということは、そろそろ食事時なのかも

しれない。

どうやら、随分時間が経っていたようだ。

「でも、とりあえず一旦私は下がるわ。診療もあるだろうし……」

診療の邪魔はしないことは最初に最と約束している。

一先ず一旦下がって出直すかと考えていたサツキの耳に、廊下の向こうから女性????早音の高い制止の声が届いた。

「深「しん」様……お待ちください！」

ドカドカとした足音にハッと顔を上げたサツキは、事態に気付くと思いつき顔を顰める。

——よりもよって、あいつか！

瞬時に浮かんだ”出来れば絶対会いたくない”顔に、腰を浮かした、その瞬間。

障子がぴしゃつと音をたてて開かれた。

「公務である！罪人を引き渡せ！」

元の世界でサツキが一番嫌いだったものは、勉強だった。

資格の為に学校に通ってはいたが、生まれもつての行動派であるサツキは、教科書よりも実地で学ぶ方が性に合っていたのだ。

だがそれを口にしたところで『勉強が出来ない人間の僻み』にしか聴こえないことは、9年間の義務教育+3年の高校生活で骨身に染みていた。

試験然り、就職然り、結婚然り…。

兎角「とかく」人間とは紙に縛られて一生を終えるのだな…と軽い絶望を感じながら、それでもサツキは平凡に生きてきた。

ある日、突然その平凡を奪われるまで。

この世界に来てからのサツキの奮闘は筆舌尽くし難いものであり…長くなるので割愛するが、この世界に来て、サツキの”嫌いなものランキング”の順位に変化が起こった。

歴代一位の『勉強』を蹴落とし、見事トップに輝いたのは――

「お前だな。件「くだん」の使用人というのは」

――警吏「こいつ」のような、『権力者』だ。

聞く者を凍らせる、”権力”を深く染み込ませた高圧的な物言い。公服である灰藍色の詰め襟を纏い、短髪を清潔に切りそろえた、つり目の男。

男はその鋭い眼光を、部屋の中の二人——サツキと……主に佐波に向けると、確認ではなく断定してそう言い放ち、止める間もなくずかずか部屋に上がってきた。しかも土足で。

突然の来訪者に佐波は驚きで瞠目していたが、反対にサツキは怒りの所為で痛み出したこめかみを押さえて目を閉じた。自分を落ち着かせる為だ。

良くも悪くも直情型のサツキは、怒りに冷静な判断力を奪われることも暫しある。

言っではいけない言葉をつい口走ってしまったたり、口が出る前に手が出たり……。

小学校中学年頃、そんな自分が嫌で幼なじみに相談したら、その彼はサツキに良い方法を教えてくれた。

” 怒りを感じたら、まず目を閉じて10秒数える事 ”

その間に呼吸を意識してゆっくりにし、怒りを感じる相手や事柄をしっかりと見つめる事。

どうして自分が怒ったのか、その原因となったものは何なのか。いつまでかかってもいいから、目を背けずにきちんと原因を探す事。本質で気の短いサツキには算数のテストより難問だったが、諦めずに何度も何度もそれを繰り返すうちに、少しずつコツが掴めてきた。自分の怒りのポイントと原因さえ分かれば、対処する方法も事前に考えていられる。

我を忘れる直前にそれを条件反射で思い出せば、事態を悪化させずにすむ。人を傷つけずにすむ。

『自分の怒りに他人を巻き込んだんじゃいけないよ。サツキさんが怒っているのは、サツキさんの為なんだから』

嫌になるくらい、自分とは正反対の冷静な幼なじみのその声を思い出す度に、サツキは自分の感情制御力の未熟さを思い知った。

それは離ればなれになった、今でも。

——しかし、何事にも例外というものがある。

例えばこのように… 10 数える暇もなく男の手がサツキを横切り、啞然とする佐波の着物を引き裂く様にして暴いたりしたら？？？それは明らかな”例外”だ。

ゴッ！

サツキは迷わず男の顎に拳を打った。

男が呻いてよろめき、膝をつく。脳震盪を起こしているのだろう。

女の力で男を一撃に伸すなんてことは難しいが、知識さえあればやれないこともない。

痛む拳をもう一度握り直して、サツキは怒髪天を突く勢いで叫んだ。

『死に晒せこの変態！！』

「さ、サツキさん…！？」

突然現れた男に着物を暴かれて一番動揺しているであろう佐波が、開けた着物を怪我をしてない方の腕でかき抱きながら驚愕の声を上げる。

それはそうだ。サツキが今殴ったのは、皇国「このくに」の公職…警護府の警吏「けいり」。

つまり権力を行使する権限を与えられた『権力者』だ。

彼へ振り上げた拳は、そのまま皇国に対する反逆とみられてもおかしくない。

——しかし。

だからといって警吏達「こいつら」の粗暴を見て見ぬ振りすること

は、サツキには出来ない。

正義感なんて高尚なものじゃなく、感じているのは胸が焼けるくらい
の激しい怒り。

サツキは、佐波の為でも、他の誰の為でもなく、『自分の為』に怒
っているのだ。

「…つくそつ！^{はんどじん}蛮土人が…！！」

頭を抑えて呻く男は、それでも鋭さの落ちない眼光でサツキを睨み
上げた。

ちなみに『蛮土人』とは、皇国の人間がよく使う、他国の人間を表
す蔑称だ。

比較的文化も国の機能も他国より発達して文明的な生活を送ってい
る彼らは、暫しこのように自分より劣るモノを卑下する。

否、それが劣っているかどうかではなく、自分たちと違うというだ
けで差別の対象とするのだ。

他国から流れ着いたサツキも、もちろん彼らの中では”差別”の対
象であり、「『イコール』自分たちよりも劣る生き物という解釈に
なるのだと、同じ様に他国から流れて来た回り番の先輩から教えて
もらった。

『オレはそんな当たり前のことを聞くお前さんが不思議だがねえ。

それとも、お前さんの故郷「くに」じゃあ違ったのかい？』

老獪な彼に笑ってそう言われて、サツキは己の浅はかな問いを恥じ
た。

サツキの世界にも”差別”はあった。

だが、サツキは自分が差別される側に立ったことが一度もなかった。
…つまり、そういうことなのだ。

見下されれば悔しく、嗤われれば苦しい。当たり前な事実を、サツ
キは我が身に降り掛かるまで考えた事も無かった。

サツキは、自分を激しく睨む男を睨み返す。

「女の子の胸元こじ開けるなんてどういっつもり!？」

「女かどうか分からなかったから確かめただけだ!」

「ふっざけンじゃないわよ!どっからどう見ても女の子でしょうが
ああ!」

「見ても分からなかったと言ってるだろう!」

怒声が飛び交い、今にもお互い殴り掛からんばかりに間合いを詰める二人を、完全に取り残された佐波が呆然と見ている。

内心男の『見た目じゃ女と判断出来ない』発言に小さくショックを受けていたりもするが、そんなことよりサツキを止めなければと我に返り、叫んだ。

「さ、サツキ様!ダメです!相手は警吏様ですよ!？」

「警吏だろうとさっきのは完全アウトよ!てかあなたも怒りなさい
!怒るべきよ!」

「いいや分別を弁「わきま」えてないのはお前の方だ!身の程を知らんのか!？」

「じゃかああしィィ!痴漢が身の程を語ってンじゃないわよこの『ボケなす』!」

「『ボケナス』!?!なんだ『ぼけな』!いや違っ!痴漢だと!?
お前、公職の俺を痴漢呼ばわりするとは」

「『お巡りさーん』!痴漢ですー!」

「痴漢じゃない!くそっなんなんだ『オマワリサーン』って!」

「あんたとは真逆の人よ!」

「そんなロクデナシを呼んでどうする!」

「ロクデナシはお前じゃああ!」

どんどん下らない応酬になる二人を、かける言葉も無く佐波は眺めた。

そしてそろそろ「ばーかばーか」と最低知能レベルの口喧嘩が始まりそうな頃合いになって、ようやく口を挟む機会を得た。

「あ、あの！…警吏様？」

「イイのよこんな馬鹿に”様”なんか付けなくても！」

「貴様…！どこまで俺を侮辱する気だ！？今ここで斬り捨てることだつて出来るんだぞ！」

「その前に私があんたを『なます切り』にしてやるわよ！」

「だから蛮土語を使うな！妙に気になるだろうが！」

再び始まった口論…というよりも掛け合い漫才に、佐波は困り果てながら次の機会待っていたが、ふと耳を澄ませた。

部屋の怒声で聞き取り難いが、廊下を歩いて近づいてくる足音がする。

気付いて慌てて二人にそれを知らせようとした瞬間、開いたままの障子から、男の姿が現れた。

「警吏、どうなっている！」

言いながら、こちらも土足で上がり込んできたのは、中年の男だった。

小肥りな身体を立派に誂「あつら」えられた上級の公服に包んでいるその男は、じろりと部屋の中を見渡すと、ぴたりと口論を止めて硬直している警吏とサツキに視線を向けた。

「なんだ。さつさと罪人を引き立てんか！こちら暇ではないのだぞ！」

男は苛立った口調でそう言うと、次に再び呆気にとられている佐波に目を向け、そして、ふん、と鼻で笑う。

「その男か女が分からんやつが、そうだな。おい警吏、早く捕らえる！」

「ちよつと！…ちよつと誰よあれ！」

突然現れたあからさまに嫌いなタイプの男に、サツキが慌てて警吏の男の胸ぐらを引き寄せ囁く。

男の登場は警吏にとっても好ましいものではなかったのか、彼は小さく「だから早く差し出してればいいものを…」と愚痴りながらも、サツキにだけ聴こえる様に低く囁き返した。

「…清州「きよす」様だ。皇国国護府の役員らしい…」

「こくごふ？」

「軍部だ」

——軍部…？

国内の事件に、なぜ軍部が絡んでくるのか…。

第一、仲の悪い代名詞としても使われるくらい陰悪な警護府と軍部の人間がなぜ行動を共にしている…？

極めて不審だが、とりあえずは目先のことだ。

サツキは——本当に死ぬ程嫌だったが——膝をつき形式的な礼をとった。

「清州様。本日はご足労頂き、感謝いたします。しかしながら…」

「ふん。お前、売女か？」

いつもより5割増で整った声を発したサツキの言葉を、男——清州が、まるでサツキの言葉など耳に入らぬという風に遮った。

「……………は？」

「売女かと聞いている。」

敢えて聞き返してやったというのに、ずけずけと問い重ねて来た男は、サツキの身体を嘗める様に見定め、下碑た笑みで口を歪ませた。

「売女なら、買ってやるか。丁度獵犬に雌犬を宛てがおうと考えていたところよ。先頃は盛って煩いからなあ。」

———よりもよって、そんな卑猥な会話から切り出すとは、恐れ入る。

怒り故に一瞬で血の気が引き、次いで燃え上がる様に血流が早くなるのを感じながら、けれどサツキは懸命に平静を装った。

こんなところで不興を買っても、こちらには何の利もない。

とにかく今は男を機嫌良く喋らせ、ここに来た理由と目的を聞き出す事が先決だ。

———額に青筋を立てながらも”10秒ルール”で怒りを押さえ込んだサツキは、苦勞して笑みの形にした口から次の言葉を切り出そうとし

———しかし、サツキの代わりに男に答えたのは、先ほどまで呆氣にとられていたはずの佐波だった。

「”売女”は蔑称でございます。清州様。湊楼庵「ここ」では、”遊女”または”娼婦”と。」

静かな声だった。

責める色もなければ、怒りの色もない。

ただ事実のみを伝える彼女の言葉に、清州は一瞬、ぽかんとした顔をした。

しかしやがて佐波の言葉が意味するところに思い至ると、足先から頭の先まで這い上がって来たであろう怒りにみるみる顔を赤くし、咄嗟に懷に差していた扇子を佐波に投げつける。

「売女を売女と呼んで何が悪い！罪人の分際で俺を愚弄するとは！」

引き攣れた声で叫ぶ男。

扇子の飾り金を受けて出来た佐波の頬の傷からうつすらと血が流れる。

それを見て、彼女の台詞で硬直していたサツキはようやく金縛り状態から解かれると、信じられない展開に目を剥いた。

—— な、何事！？

隣で同じ様に警吏が目を剥いている。

「正気か！？」と今にも叫びそうな口をぱくさせて、同意を求める様にサツキと視線を交わした。

—— ちょ、何この最悪な展開！

混乱で打ち震えながらも、サツキが慌てて男の怒りを鎮めようと謝罪の言葉を口にしようとした、その直前。

再び佐波が口を開く。

「善い悪いの問題ではございません。ただ、間違っていると申し上げているのです」

毅然とした物言い。

頬の傷に触れる事もなく、彼女は厭に据「す」わった目で清州と真つ向から対峙していた。

今度はサツキが呆氣にとられる番だった。

先ほど警吏に着物を暴かれた時ですら文句の一つも言わなかったというのに、なぜ直接自分が受けた訳でもない清州の言葉にこうも反応しているのかさっぱり分からない。

分かるのは、今、とんでもなく拙い方向に話が転がっていつているということだけ――

男は怒りに顔を赤く染めながら怒声を上げた。

「警吏！この塵虫の腕を斬れ！」

やはり、というか、この上なく権力者としての腐り具合を発揮した清州の台詞に、サツキはぎくりと震えた。

笑い事ではない。冗談でも、脅しでもなく、清州は本気で言っている。

だとすれば、もしかして本気で、今この場で佐波を斬らせるつもりなのか。

――そこまで皇国「このくに」の権力は――権力者は腐っているのか。

あまりに理不尽な清州の態度に愕然として声も出ないサツキの代わりに、こちらもようやく不穏な事の流れに気付いたのか、警吏が慌てて返答をした。

「っ！しかし上部からは」

「煩い！生きてさえいればいいのだろう！腕を……いや、耳も、鼻も、全て削げ！今すぐだ！」

口角に泡を飛ばし、顔を怒りの赤で染め上げた清州が、駄々をこねる子どものように地団駄を踏む。

——つ、付いていけない……！

自分で手を下さず、人にやらせようとしている時点で既にムカつきを通り越して呆れてしまふ。いや、自分でされても迷惑だが。

——と、とにかく、今はこの男の怒りを鎮めない……！

佐波と共に土下座してどうにか許してもらえないものだろうか、と現実逃避にも甘い事を考えたサツキを裏切る様に、地団駄を踏んでいる清州をじっと見つめていた佐波が、その視線を男から外す事もなく、静かに、けれどよく通る声を上げた。

「警吏様。どうぞお斬りください」

ギョツとして佐波を見る。名を呼ばれた警吏も同様だ。

彼女はその言葉の意味を吟味出来ないでいるサツキたちなど眼中に無い様子で、不思議な程暗く澄んだ瞳で言った。

「私の腕を斬れば……顔を削げば、私があなた様に謝罪し命を乞うとお思いですか？ならば、お斬りください。あなた様にはその”権利”がある。そうでしょう？」

でも、と佐波は目を細める。

「“権力”では、私に謝罪させることは出来ない。”権力”では、私を殺すことは出来ても、意志を変えることは出来ない」

「お、おのれ……!!」

これまた一瞬呆気にとられた男は、しかし今度はすぐに佐波の言葉の意味を”正しく”理解すると、サツキが反応するより早く佐波の胸ぐらを掴み上げた。

「塵虫の分際で、何をほざくか!」

無遠慮に持ち上げられた佐波は、背中の怪我を意識してか一瞬痛み
に顔を顰め、しかし次の瞬間、見る者を震え上がらせるような鋭い
眼光で清州を見上げ、叫んだ。

「“権力”では何も傷つけられない!!」

「何!?!」

「売女と蔑まれようが、犬と交わろうが、遊女が誇り高き女である
ように!何者にも、その尊厳を奪う事は、出来ない!!」

——既視感。

サツキは呆然としながら、どこかでこのような光景を見た事がある
気がしていた。

あれは確か——風路土「かざると」のどこかで遭った、戦士の最
期。

命果てるまで戦った男は、最期に咆哮を上げた。

まるで歓喜に震えるような、それは命を燃やす者の叫び。

戦う事で己の存在を明らかにする、生まれもつての戦士の気質——

「し、痴れ者が」

サツキ同様、佐波に吞まれた清州が掠れた虚勢を張った。
しかしそれを、佐波は決して逃がしはしない。

「清州様」

佐波に名を呼ばれて、男がびくりと身体を揺らした。
怯えている。

男の3分の一程しか生きていない小娘に。
奴隷とそう変わらぬ、一介の使用人に。

胸ぐらを掴んだまま硬直した男の顔を至近距離に見据えながら、佐波はうつすらと、甘い笑みさえ浮かべた。
場に酷く不似合いな、蕩けるような眼差し。
その場にいる全員を呑み込んで、彼女はそつと囁いた。

「——私を殺しなさい」

——そして思い知ればいい。
己の誇る”権力”の無力さを。——
人一人の命を奪うという、その重大さを。

15（後書き）

警吏の彼はサツキの『』（日本語）をどのように変換して想像しているのでしょうか（笑）
なんだかんだでまだ続きます！

4 / 1 2 後半改正しました（汗）内容は変わっていませんが…

——まずい。明らかにまずい。

唾を飲み込む音まで聴こえてきそうな、酷く緊迫した空気の中で、サツキはようやく我に返った。そして必死に己の冷静さをかき集める。

何度瞬こうが覆されない、目前の光景。

男に胸ぐらを掴まれ、身体を半分宙に浮かせながらも、佐波は決して相手から目を逸らさない。

食らいつく様に、とは少し違う。相手が食らいついて来るその一瞬を狙う、老獪な獣のような目だ。

サツキの場所からでは男の表情までは伺えないが、その肥えた身体がぶるぶると震えているのが”怒り”の所為なのは明らかだった。

——考える、考える、考える…

なぜ警吏が軍部のお偉いさんと一緒に来たのかなど、今はもうどうでもいい。

問題は——大変腹立たしいことに——この部屋にいる全ての命の与奪権を、この頭の悪い鬼畜セクハラ親父…もといお偉いさん、清州「きよす」が握っていることだ。

どうすれば男の手から佐波を取り戻すことが出来るだろうか？

男の腰ある飾りのような豪華な刀をチラチラ見ながら必死に考える。

あれに男の手が伸びたら、お終いだ。佐波は切られる。元より怪我人なのだ。死なない理由を捜す方が難しい。

ならば、先に刀を奪うか？——そんな事したら、明日を待たずに自分が晒し首だ。

では口で説得する？…あれだけ激昂した男を？無駄に気位が高く、見るからに陰湿そうなあを男を？……何と言って？

自分の手の先から熱が消え、小刻み震え出したのにも気付かず、サツキは額にだけ意識を集中させていた。

——…そもそも、なぜ佐波は男に逆らった？

権力者を嫌う自分ですら、ここで生きる為には彼らに平伏さねばならないことくらい知っている。

佐波はその年齢に似合わず、礼儀正しい謙虚な子だ。その常識は身に沁みているはず。

気が短いと自負する自分ならともかく、彼女がキレるなんてよっぽど…

ふ、とサツキの脳裏に、これまでの佐波の行動や言動が過った。

気落ちした、生気の薄い顔。

容疑者だと突きつけられても動揺をみせず、自分が拷問を受ける可能性ですら、青い顔で笑って受け止めた。

まるで……そうだ、まるで、この世のことなど、もはやどうでもいいと言わんばかりに——

——あの娘の探し人が、すでにこの世にいなかった。それだけのことだ——

「う、」

りん、と過った、早音が聞いたという最の言葉。
それから閃き導き出した答えに、サツキは思わず小さく呻いた。

——まさか…まさかあの子、ただ単に自棄「やけ」になってるだけ…！？

よろ、と足下がよろけそうになる。

だがそう考えると、彼女の今までの行動が理解出来る気がした。

佐波はサツキがこの部屋にきた当初から、多分、冷静といわれる状態ではなかった。

——恐らく最初から、キレていた。

でもそのキレ方があまりにも静か過ぎて、他からはただ気落ちしているかのように見えていたのだろう。

地下をたゆたうマグマのような激情を一気に噴き出させた切っ掛けは、間違いなく清州の言動だ。

その何が彼女の逆鱗だったのかまでは分からないが…

きっと佐波は、全て分かった上でやっている。上に逆らう事の意味も、その後の自分がどうなるのかも。

——だから尚のこと質が悪い。

いつの間にか思考が佐波を助け出すことからずれていることにも気付かずに長考していたサツキは、廊下から聴こえて来る幾人もの足音で我に返った。

しかし、その音で我に返ったのはサツキだけではない。

「…お、のれ…！痴れ者がああ…！」

佐波の胸ぐらを掴んでいた男が、硬直から解き放たれ、佐波を――

佐波を、力任せに障子に投げ飛ばしたのだ。

声を上げる暇もなかった。

佐波の軽い身体は障子に叩き付けられ、その衝撃で障子の枠組みごと廊下に投げ出された。

どこからか甲高い悲鳴が上がる。足音がバタバタと近づき、騒ぎを聞きつけて現れたであろう使用人達が、壊れた障子の上に力無く横たわる佐波の周りを囲んだ。

「それを殺せ！」

助け起こそうとした使用人達を、清州の恫喝が止める。

びくりと動きを止めた使用人達を横に放るようにつき飛ばし、ドカと佐波に近づいた男は、呻いて意識を浮上させた佐波の腹に激しい蹴りを入れた。

「がっ」と空気を吐き出して、佐波の身体が廊下を飛び出し、その向こうの中庭に転がり落ちる。

乾いた芝の上に落ちた佐波が、身体を折り曲げて激しく咳き込むのが聴こえて、サツキはようやく震える身体を動かせた。

「佐波……！」

駆け寄ろうとしたサツキの腕を、横で同じ様に放心していた警吏が掴んで止める。

驚いて見上げると、彼も驚いたような顔で自分の手を見て、そして忌々し気にその手を振り払い言った。

「お前が行ってどうする！もう取り返しがつかないことくらい」

「関係ないわよ！」

「聞け！」

警吏がぐいつとサツキの肩を掴んだ。

力加減の無いそれに苦痛で顔を歪ませるサツキになど構わず、男は低く諭す様に言う。

「お前が出ても、死体が一つから二つに増えるだけだ。それくらいは分かるだろう！」

最後の言葉は、懇願のようにも聴こえた。

緊張と動揺を隠しきれない警吏の表情に、サツキは体中の血が一気に下がるのを感じる。

—— たすけられない。

女の悲鳴が上がる。中庭に降り立った清州が、地面に転がる佐波に更なる暴行を加えているのだ。

騒ぎで集まり出した使用人達は、何かと口々に叫びながら、怒り狂って少女を蹴り殴る清州の姿を認めると、皆石の様に硬直した。男の召物から彼が公職であると察した全ての者は、彼に逆らうことの意味を知っている。

そしてその怒りを買った少女を、もう助ける事が出来ないことも。

—— なぜ、こんなことに。

庭から男が佐波に暴行を加える音が生々しく聴こえて来る。呆然と震えながらそれを聴く事しかできないサツキの横から、幾ばくかの躊躇いの後、警吏が飛び出す様に清州の元に駆けけた。

「清州様！どうかそれ以上は！上部から罪人を”無事に”運ぶ様にと申し使っております！」

警吏は芝の上に膝をつく、平伏して叫んだ。

同じ公職といえど、その位は格段に違う。

さすがにここにいる他の者と同じ様に斬り捨てられたりはしないだろうが、それでも自分の職を失う覚悟は必要だった。

だが、震えながら頭を下げる警吏の言葉も、男の激昂を治めることは出来ない。

「知った事か！」

吠える様に叫んで佐波の髪をぐいっと引つ張り頭を上げさせると、思つままに殴る。

もはや受け身も取れない佐波の身体は、人形のようにどしやりと地面にたたき落とされた。

再び警吏が声を上げる。

「清州様！これは左相様のお言葉であつたはず！どうぞ、お言葉を違えるようなことは……！」

その言葉に、男の動きが一瞬止まった。

そして苛立たし気に地面を何度か踏みしめると、また佐波の胸ぐらを引っぱり上げ、ぐったりしている彼女に唾を飛ばして叫んだ。

「命を乞え！俺の足を舐め、己の指を噛み切り差し出せ！お前のよくな屑でも、これが最後の慈悲であることくらい分かるだろう！」

…例え命を乞えたとして、今の佐波には己の指を噛み切る程の力も残っていない。

一目瞭然の少女の痛々しい姿に、誰もが言葉を失い、緊張して成り行きを見守るしかなかった。

けぼ、と佐波の口から赤い血の固まりが流れ、その口元が震える。

「…と、は…」

荒い吐息のような細かい声が、この地獄のような光景には酷く不似合いな、明るく美しい庭の中に落ちた。

「…ひと、は、…み、な………とう、…とい…」

サツキは己の耳を疑った。

——今、佐波はなんと言った？

掠れていて、苦痛に歪んだ声は聞き取り難かったが、全神経を集中させていた耳には、確かに聞き取れたはずの言葉。
だが肝心のその意味が理解出来ない。

いや、意味は分かる。分かるはずなのに——

——…ひとは、みな…

目の前の光景と、今しがた佐波が放った言葉を完全に合致させるのに数瞬を要し、

——理解した瞬間、ガツン、と頭を叩かれたような衝撃がサツキを襲った。

——人は皆、尊い——

佐波の言葉は、命乞いでもなければ、男を呪う言葉でもなかった。それは、酷くシンプルな思想。

勉強は嫌いだっただが、その思想を表す名詞くらいは、サツキも知っている。

『人間が、一人の人間として人生をおくり、他者とのかわりを取りむすぶにあたって、決して犯してはならないとされる権利』

「『人権』…？」

——でも、なんで今、この場でそれを…？

あまりにも場違い過ぎる佐波の言葉に、当然のように浮かんた疑問。それに、更なる疑問が重なった。

そういえば…今まで考えた事もなかったが、この国には——この世界には、『人権』という言葉は存在するのだろうか。

殺人、窃盗、詐欺、差別。それらが平然と行われるのがこの世界の”普通”なのだと思理矢理自分を納得させていたが、だがでは『なぜそうなのか』というところまで考えたことは…確かに今まで一度もない。

自分の世界とこの世界では何が違う？

生まれ育った国が、なぜ平和だった？

なぜ市民は守られ、当然のように法に統治されていた？

あまりにも当たり前過ぎて、考えた事もなかった事実。

この世界との折り合いを付ける為に、必死に考えないようにしていたこと。

——もしかしてこの世界には、人権は確立していないの…？

互いの尊厳を認め、身分の差なく権利を主張する”権利”。

サツキにとっては当たり前の思想が、この世界では馴染みの無い、ごくマイノリティの思想だというのが——

「戯れ言を…！」

サツキが思考を飛ばしている間に、恐らく佐波の言葉の本当の意味など理解してもいないだろう清州が、佐波の胸ぐらから手を離し、遂に腰の刀に手をかける。

抵抗する力も無く再び地面に崩れ落ちた佐波を見て、サツキは咄嗟に懷にいつも忍ばせている一振りの小刀に手を伸ばした。

——男が刀を抜けば、斬ろう。

不思議なことに、今までの緊張と迷いが嘘の様に、ただ自然とその考えが浮かんだ。

何故だかは分からないが、漠然と、今彼女を死なせてはいけない、という激しい使命感に身体と思考が支配されている。

この感情をなんと言うのだろうか？ 熱く、冷たく、まるで世界の全てが見渡せるような爽快感。

ようやく巡り会えた何かに、心震えるような——泣きたくなるような、絶対的な想い。

——佐波。

この世界にその言葉があるのかどうかは知らないが、佐波のような人間を、サツキの世界では『思想家』と呼んでいた。どの時代でも激しい弾圧を受け、謂われない暴力と偏見に身を晒しながらも、決して諦めずに己の思想を貫く。

剣や力ではなく、己の才覚のみで戦う、歴とした勇敢なる戦士——

——守らなければ。

彼女を。彼女の持つ思想と、それを貫き通す意志を。

計り知れない力に突き動かされる様に、サツキがタイミングを見計らう為に男の手元に意識を集中した——その時。

突如、佐波と男の間を、小さな影が走り割った。

それは十歳程の美しい子どもで……………

「ま、」

——真灯！？

何処から出て来たのか、裸足で佐波に駆け寄った双子の片割れの少年にサツキはぎょっとし、その衝撃で我に返った。????そして愕然とする。

——今、私は…

震える手を、そっと懐の小刀から離す。

己が仕出かそうとしていた事の大きさに、血の気が引いた。

自分は圧倒的に権力の勝るこの場で、なぜ一瞬でも『戦う』という選択肢を選び、そして実行しようとした？

まるで盤上の王「キング」を守る、捨て身の歩兵「ポーン」のように。

それは本当に、自分の意志だった？

——自分には、まだ叶えていない願いや、使命があるというのに——？

己の危険思想に冷や汗を流す。

冷静になれ！と自分に強く言い聞かせて、現状を見極めようと、目の前の光景に意識を集中させた、その時。

真灯が、佐波を背に隠すようにして男を見上げ、叫んだ。

「この方は、私の命の恩人です。これ以上は、許せません……！」

16（後書き）

あ、いつか言おうと思っていつも忘れていたのですが（汗）
評価・お気に入り登録ありがとうございます！嬉しくて鼻血噴きそ
うです…

次回も更新がんばります！

「ま」

「こ、こら、真灯！」

サツキが少年の名を呼ぶより早く、焦燥を滲ませた男の呼び声が中庭に響き渡った。

一同の視線が集まる中、真灯が現れたのと同じ方向から飛び出すようにして姿を現した声の主は、目の前に広がる光景——位の高い公服に身を包んだ中年の男の前に立ち塞がる真灯の姿——に、まるで足が地面に張り付いたかのようにぴたりと動きを止め——見る間に蒼白になる。

——あの男は…

その男の顔に見覚えがあって、サツキは記憶を素早く浚った。

——…そうだ、何度か湊楼庵で見た事がある…確か双子の御守役の…

歳の頃は20代の前半程だろうか。短く刈り込んだ髪に、穏やかな垂れ目を持つ、若い男。

聞いた話では、元々は男娼として売られてきたところ、その笛の腕前を買われて、総主直々に彼の息子達の笛の指南役にと抜擢されたのだとか。

名は何と言ったか……確か…

「葵「あおい」！」

蒼白で硬直している男の後ろから、真灯と寸分違わぬ容姿の少年が飛び出してくる。

名を呼ばれた若い男？？葵は、身体をビクリと揺らして硬直を解くと、駆け寄ってきた少年？？耶灯を慌てて制した。

「来るな！」

「でも真灯が！」

焦燥に駆られた叫び声。

制止を振り切って駆け寄ろうとする耶灯を後ろに押しつけるようにして、葵は真灯と真灯の対峙する清州の元に駆け寄ると、その足下にざっと平伏した。

「も、申し訳ございません！此度「こたび」は子どもが失礼を……！」
「なんだ貴様等は！」

横槍が入ったことで動揺したのか、清州が怒りに戸惑いを含ませた声を上げる。

刀に手をかける自分に臆することもなく、燃えるような怒りに染まった瞳で見上げている子どもの美しい容姿にも怯んだようだった。その様子に葵は慌てて真灯の腕を引っ張り、地面に膝を付かせた。

「ま、真灯！早く謝れ！」

無理矢理に頭を下げさせられそうになって、真灯は暴れてその戒めを解く。

「なんでっ　なんで誰も佐波様を助けないんだ！早く、最を呼んで！」

「馬鹿！場を弁「わきま」えろ！」

「嫌だ！誰か、最を……！」

「坊ちゃん、医者「せんせい」は郭「くるわ」の往診でお留守のよ
うだ。」

今の今まで集まった野次馬に埋もれて、その気配一つ見せなかった男が声を上げる。

良く知ったその声に、サツキはギョツとして辺りを確認し、その姿を確認するなり小さく叫んだ。

「佐々目「さざめ」班長……！」

下男のような質素な衣服で小柄な身を包んだ、灰髪の男。

ぱっと見は好々爺のようにも見えるが、ふとした瞬間に若者のような精悍な表情をするこの年齢不詳の男は、サツキの直属の上司だ。

彼はいつの間にか、清州と真灯が対峙する中庭の中央近くまで歩み寄っていた。

なんで班長がここに！と叫んで問いそうになったサツキより早く、次から次へと現れる横槍に痺れを切らした清州が苛立たし気に叫ぶ。

「どうなっている！全員斬りたいのか……！」

叫ぶなり腰の刀を抜き放った清州に、その場に集まっていた使用人達は我に返ったようにどよめき、巻き添えを恐れて逃げ出す者やその場で平身する者で溢れ混乱が起こった。

「煩い！黙れ！黙らんか……！」

もはや清州の言葉など通らない。

サツキも我が身の安全を守る為に好き勝手去って行く使用人に突き飛ばされて、前のめりに倒れそうになる。

その腕を掴んで支えたのは、これまた見知った男だった。

「う、空木「うつぎ」さん！」

「また面倒なことをしてくれたなあ、サツキ」

「うつ」

年齢はサツキよりやや年上。短い黒髪の、は虫類を思わせる、痩せた冷たいつり目の男だ。

サツキと同じ回り番・班で、同じ”副班”という肩書きを持つこの男は、何かとサツキを邪見にしている。

その割に面倒見がいい性格なのか、このように要所要所で助けられることも暫しある所為で、サツキにとっては憎むに憎めない存在だ。

「??? な、なんでここに班長と副班が揃ってるの!? …もしかして、私、見張られてた…!？」

サツキが動揺しているうちに空木は至極面倒そうにサツキの腕を放すと、彼女の耳を引っ張る様にして自分の口に近づけた。

「イ、イ たっ」

「屋敷が囲まれている」

「へ、へっ？」

「恐らくは清州の手の者だ。…いや、もしくは左相か」

ぎらり、とその視線を中庭で怒鳴り続けている清州に向けると、す

ぐにまたサツキを見る。

「どういう思案かは知らんが、総主の留守を狙ったのは間違いないだろう。あの使用人を攫う気のような」

「な、なぜ…！」

「分からん。???が、分かることもある」

???な、何が??

問いを出す間もなく、清州の怒声を割るようにして、嫌に飄々とした佐々目の声が響いた。

「どうやら大変な粗相があつたようで…清州様のお怒りは至極ごもつともにごさいますれば、全てはこの秩序を守る私どもの不手際。何卒、御沙汰は手前に頂戴したく」

「っ班長!？」

その言葉に驚愕して、堪らずサツキは声を上げた。

この騒ぎは、誰がなんと言おうとその場に最初からいながら防ぎきれなかったサツキの責任だ。

責められるべきは自分なのに、その咎を、彼は一挙に引き受けるつもりで居る。

???そんな、そんなこと…!

させるワケにはいけない、と駆け出そうとしたサツキを、その肩を掴んで空木がアツサリと引き戻す。

「馬鹿。お前が出てもどうにもならん」

「でも!」

「変に動かれて迷惑被るのは佐々目班長だぞ」

「でも!!」

「『でもでも』と、お前は本当に頭が悪いなあ。いいから、佐々目さんの意図をその足りない頭で考えてろ」

「か、考えるったって…!」

動揺のあまり、今にも泣き出しそうな目で空木を見上げたサツキに、彼ははあーっとわざとらしいため息をついた。

「…佐々目さんは”時間を作ってる”んだ」

「えっ?」

「お前は大人しく見てろ。それと泣くな!鬱陶しい!」

「うつっ」

???や、優しくないけど優しい…!

荒々しく頭を叩かれて、サツキはぐずぐずと鼻をならした。

これだからこの男は苦手なのだ。いつそ全てにおいて邪見にしてくれるなら、嫌いになれるのに。

サツキがオロオロしている間にも、事態は転がって行く。

佐々目の言葉に、清州は自分を立て直す様に、大声で叫び返した。

「ではなんとする!お前の首を斬り、献上するとも言うのか!」

「お望みであれば」

ニヤリと、まるで挑発するかのような笑みさえ浮かべて、佐々目は膝を付き頭を差し出すようにして下げた。

あまりにも平然と行われるその動作に、清州が一瞬鼻白み、次いで再び怒り喚き出す。

「わ、わ、私を馬鹿にしおって……！お、お、お前の、お前の薄汚い首などでっ　っ、償えると思ってか……！」

「よもやそのようなことは」

かかと笑って、佐々目はまるで少年のような仕草で小首を傾げてみせた。

「この身がお気に召さないのであれば仕様がな。ならばそのお怒りは、やはりこの者自身に償わせるのが宜しいかもしれません」

佐々目はちらりと、地面に力無く横たわる、満身創痍の佐波に視線をやった。

びくつと肩を震わせた真灯は慌てて守る様に佐波の頭を掻き抱き、その様子を平身していた葵が素早く身を上げて、真灯を佐波から引き離すように抱え上げる。

「葵っ！離せ！」

「離せるか！お前に何かあれば、俺が総主に殺されるんだぞ！」

「父上は、関係、ない！」

身体を捻って必死にその腕から逃れようとする真灯を、葵は懸命に抱えてその場を身を伏せて後ずさった。

「…父上、だっつ？」

しかし、折角逃れる機会を得た葵達を止めたのは、驚いた事に怒り沸騰中のはずの清州だった。

瞠目して葵に抱えられた真灯を見つめ、何事かに驚愕している男に、佐々目は素早く答えを返した。

「彼「あ」の子どもは溟楼庵総主様の御子、真灯様にございます。何卒、ご容赦下さいませ」

「総主の……子……」

あれが、と男が小さく呟いたのを、佐々目は聞き漏らさなかった。束の間怒りを忘れて真灯に見入っている清州に、そうつと誘導するように声をかける。

「…先ほどの警吏の言葉によると、この罪人を”無事に”運ぶ様にとの命があらりのようで。さしずめ、尋問されるおつもりだったのでしょうか……ではどのように致しましょうか」
「…な、なにっ？」

我に返ったらしき清州が慌てて問い返すと、佐々目は平然と続けた。

「その者は、元々火事で大怪我をしていた。更にこの様子では、もう長くはありますまい。今医者はこちらに居らず、呼び出しても二刻はかかる。…となれば、罪人は移送する間に死に至るでしょうなあ」
「…っ」

「喩え命が保ったとしても、この怪我では治療せねば取り調べなどに不都合が出ましよう。どのように御上にそれを報告されるおつもりで？ 罪人が火事で怪我を負っていたことは、既に上部なら誰もがご存知のはず。清州様がどのように説明されようと、この罪人の様子では御上は清州様が”意図的に”手を挙げたのではないかと勘ぐられますわなあ……」

「……………」

佐々目の言葉に、清州はあんどりと口を開け、次いで憤慨したように顔を赤くした。

誰もが藪蛇だと思う中で、しかし佐々目だけは一人平然とした顔で、「どうでしょう。ここは一つ、私どもにこの者の処罰を任せては頂けませんか」

畳み掛けるようにそう言つて、再びニヤリと笑つた。

彼を上司に持つて2年経つサツキからすれば、あの笑みの恐ろしさを知らない人間を可哀想に思う。

あれは悪魔の笑みだ。人を誘い出し、それらしき知恵を授け、勝手に墮落していくのを待つ悪魔の微笑み。

善からぬ思惑のある輩が、彼の口車に乗せられて勝手に脱落していく様を何度も見ているサツキは、佐々目の含みのある笑みに思わず震えた。

「な、ならん！それは、私がこの手で」

「清州様の御刀で、その者を一思いに処罰されるのも良いでしょうが…果たしてそのようなご慈悲が必要かどうか」

「じ、慈悲だと？」

意外な言葉を聞いたというように瞠目する清州に、佐々目は「はあ」と相づちを打ち、

「慈悲、にございます。このまま放置するだけで、この者はこれから死に至るまでの数刻を、苦しみの中に終えましょうに。それを早目てやるのは、慈悲というものにございましょう？」

如何にももつともらしく言つ。

佐々目の言葉に目に見えて狼狽える清州の姿に、サツキはいつものがらの上司の悪魔っぷりに場違いな感嘆のため息をついた。

その横でぼつりと「泣いた鴉」からす」が…」と呟いた空木は全力

無視の方向で、それでもハラハラしながら佐々目の仕掛ける罠を守る。

「しかし…もちろん、それでは清州様のお気持ちは静まりますまいて…」

相手を落し、立て、持ち上げ、また落とす??? 緩急を付けながら、佐々目は言葉を繰り出す。

会話の主導権を握られているとは知らず…否、喻え分かっていたとしても、先に狼狽えた時点で既に負けているようなのだが…予想通りに清州が口を開いた。

「こ、このまま咎めもなく見過ごすことは出来ん！」

その言葉に、佐々目は笑った。年齢を更に分からなくさせる、若々しい澁刺として笑みだ。

「ならば、地下牢に繋ぎましょう。牢の中にはその死の見届け人としてそちらの警吏を御借りしたいのですが、如何ですか」

いきなり呼ばれて、今の今まで事の成り行きを地面に平身して見守っていた警吏がギョツとして顔を上げた。

が、もちろん反論など出来るはずもなく、悔しそうな顔で再び平伏し、了承の意を示す。

それを見て取り、清州は苛立たしそくに、けれど当初よりは随分冷めた頭で思案深気に問った。

「…上部には何と報告する」

「罪人は火事の怪我で死んだ、と」

「………この死体は」

「明日、清州様にのみ御見せしましょう」

「???ダメ!」

「あつ オイ、こら真灯!」

真灯は葵の拘束を自力で解くと、再び横たわる佐波に被さる様に
して抱きしめた。

「いやだ! いやだいやだ! 佐波様を…! 佐波様を死なせたく
ない…!!」

「真灯!」

堪らず駆け寄ってきた寸分違わぬ容姿の少年?? 耶灯は、そんな片
割れの姿に狼狽えながらも、清州に向かって平身した。

「お、お願いです! 真灯を…っ 佐波様を…御赦し下さい…!!」

幼子が懸命に助命を願う姿は、憐れみを誘う。

清州も子どもを斬る程の悪漢ではないのか、ぐっと喉に何かを詰ま
らせたように低く唸り…やがて小さく呟いた。

「…明日、だな」

「はい」

「もしその言葉を裏切るようなことあれば、お前達の目を刳り貫い
て犬に食わせるからな!」

「御意に」

畏まって頭を下げた佐々目にようやく溜飲を下げて、清州は屋敷中
に響き渡るような怒声を張り上げた。

「ここでの事は他言ならん！良いな！」

清州の言葉にその場にいたほぼ全ての者が、ざ、と平身した。もし事が外に漏れれば、ここにいる者達は皆、佐波と同様かそれ以上の目に遭うだろう。

一先ず目前の安全を確保する為に躊躇い無く頭を下げる使用人たちの間で、サツキも同様に頭を下げながら、きつく唇を噛み締めた。

――権力……

ただの肩書きが、この世界では全てを征している。命が平等だという理念も、きつと未だ無い。

差別され、区別されるのがこの国では当然の常識で。

だから身元も保証されぬような人間は、権力の元で媚びへつらいながら生きる以外に長生きする方法がないのだ。

……佐波……

あんたは、なんでこれに逆らおうとしたの？ それは、命を懸けるほどのもの？

噛み締めた唇が切れて、口の中に血の味が広がる。

そつと顔を上げ、騒ぎの渦中にありながらも地に臥し意識を失っている佐波を見つめていると、不意に視線を感じた。

無意識にその視線を辿れば、そこにはじつと熱の無い目でこちらを見つめる佐々目が。

反射的にぎくつと身体が強ばり、そんなサツキの様子に”あの笑み”を浮かべた佐々目は、視線を清州に戻すと「では」と声を上げた。

「宜しゅうございますか」

「勝手にしろっ」

捨て台詞で完全降伏した清州が、手の刀を腰に差し直すまでをじっと見つめてから、佐々目は平然とした顔で「サツキ、」と名を呼び、
「???そして、

「その”お客さん”を、地下牢へ」

17（後書き）

主人公が氣を失っている間に登場人物が増えて行く…

3話に出て来た年齢不詳のお方は回り番の班長さんでした！。

そして8話に台詞だけ出て来た男が葵です。

「ありゃあ、魔性だな」

臥龍城の地下牢への入り口は、母屋から離れ、風情のある雅な庭の一隅に、静かに口を開けている。

石畳の階段を暫く下り、さらに知っている者ですら迷いそうな入り組んだ地下道を進むと、形状からして凶悪な用具や器具が確かに使用されているとわかる、実用的に配置された拷問部屋に行き当たり、そのすぐ側に、冷たい石床のむき出しになった牢が姿を現す。

溟楼庵で約2年勤めているサツキも、臥龍城の地下牢に来るのはこれが初めてだった。

そもそも、臥龍城は総主の為の建物であって、一介の使用人が軽々しく来れる建物ではない。

皇帝陛下が逐わす、皇都の中の更に中核である”大皇都”の中に存在するだけに、ここに来るまでに幾つもの関所を通り、身分を示さなくてはならないのだ。

2年間でサツキが臥龍城を訪れたのは、今日が2度目。

あの時はもう二度とここを訪ねる事は無いと思っていたものだが、得てして期待を裏切ってくれるのが社会というものらしい。

もつと言うなれば2年後の自分が再びここを訪れた際に、17の少女を地下牢に投げ込み、見殺しにすることになるうとは、想像するべくもなかった。

——知っていたら、早々に辞めていた？

答えはきつと是だろう。だが、考えても詮方ない事だ。

事実、事は起こった。そしてサツキは、佐波を見殺しにしている。

現在進行形で、最悪な形の未来を進んでいるのは間違いない。

束の間閉じた瞼の裏に、今しがた見た佐波の姿が浮かんた。

結局手を貸す事になった空木「うつぎ」が、背負っていた佐波を地下牢に横たえると、彼女は微かに身じろぎ、薄らと瞼を腫らした目を開けた。

痛みに耐える様な荒い呼吸。唇も、瞼も切れ、顔は痣と血に染まっていた。

火事で怪我していた方の背中に繋がる左腕は、完全に折れてしまったのか歪な方角を向き、開いた傷からの出血で、その背中を滴る程に赤く濡らしていた彼女は、呻きながら、辛うじて言葉を発した。

『……う……な、さ……』

それが自分たちに向けられた謝罪の言葉だとすぐに理解し、応えを返す間もなく、サツキは空木に引つ張られる様にして牢から出された。

抗議の視線を向ければ、問答無用の視線で返される。

空木は牢の監視に据えた数名の用心棒と、苦い顔で佇む警吏の深に黙礼をすると、さっさと踵を返して元来た道を辿り、アツサリ地表に舞い戻った。

いつの間にか日は暮れていた。頬を撫でる晩秋の風は、柔らかく乾いている。

そして茜色の西日に照らされる空木の背中を澁々追いかけていたサツキに、彼は開口一番、冒頭の台詞を呟いたのだ。

「…ましよう？」

『魔』『性』だ。面倒だから意味は自分で察しろ」

普段使わないような単語を出されて、慌てて自分の中の辞書を引く。

日常会話は不自由なく使える様になったけれど、未だに知らない言葉も多い。

回り番で使う為の遠回りな追求や回りくどい脅しなどは覚えたが、商人がするようなビジネスライクな会話は絶対出来ない自信がある。それでも勉強の嫌いなサツキが僅か2年程でこの言語を習得出来たのは、皇国の言葉が、元の世界——日本語と酷似しているからだ。文法もほぼ同じだし、漢字に良く似た固文字を使うところも、それを崩した平文字を使うところも似ている。

サツキはルツカと共に皇国「ここ」に辿り着くまでの約3年間、様々な国を回って来たが、暮らしていると云えるまでに拠点を構えたのも、きちんと言語を習得出来たのも、皇国「このくに」は初めてだった。

ただ発音だけは、日本語にない子音を使うものもあって苦手だった。りするのだが…

そういえば、空木もまた皇国外の生まれで、確か皇国領の貧しい公領地だったとか聞いた気がする。

ちなみに皇国領とは、皇国の植民地的支配下に置かれた国の別称だ。どこの世界でも”支配”とは同じらしく、皇国領に住む人々は自国の言葉と共に皇国の言葉を必然的に習わされるのだとか。

故に言葉に何不自由していない空木は、いつもの如く、人を馬鹿にしきった冷たい目でサツキを見下ろして続けた。

「あの使用人、お前の手には負えんぞ。さっさと諦めて佐々目さんに任せろ」

あの人ならすぐに真実を捕らえられる。と、熱の無い声で淡々と諭す空木に、サツキは沈黙で応えた。

確かに、佐々目ならすぐに佐波の本性を暴くだろう。

だが、回り番に半生を費やして来た彼は、良い意味でも悪い意味でも回り番の掟の化身のような人だ。

彼女の利用価値と存在価値を即座に計った彼が、どのような手段で佐波を追いつめるかと考えるとぞっとする。

今回のことだって、きつと最初からサツキ一人に任せる気はなかったのだろう。

傾くのは一瞬。傾いたら、二度と同じ位置には戻れない。――佐々目がサツキの説得に頷いたのは、サツキを『泳がせ』、もし『傾けば』佐波と一緒に片付ける気だったのではないか。

――『俺たちの仕事は只一つ。疑うことのみと知れ』――

それは仲間にさえも適用される、回り番の絶対的な掟「おきて」。

黙り込んだサツキに構う事なく、空木は歩きを止める事なく言葉を続けた。

「ありやあ厄介な質「たち」だ。もし全てが計算だったら、末恐ろしいよ。恐らく佐々目さんでも手こずるだろうな」

「……！ な、何故です？」

予想外に危険視されている佐波に驚いて問うと、空木は白々とした視線を小走りに自分を追いかけるサツキに向け、

「お前あの時、清州を斬ろうとしただろう」

平然と、爆弾を落とした。

あからさまにギクリと全身を強ばらせた立ち止まったサツキに、彼は「やっぱりな」と呟いて、再び前を見据えて歩く。

ギクシャクしながらもどうにかその背に再び追いついたサツキが、

何と言葉を切り出そうかと迷っているうちに、空木が何でもないとのように口を開いた。

「別に責めてやしないさ。俺だってあの男はいつか『なます切り』にしてやりたいと思ってるしな」

「ちょっ！イ、いつから私を見張ってたンですか！？」

空木の口から何気なく飛び出す『日本語』（しかも使用法合ってる！）に耳を疑いながら問うと、彼は平然と応える。

「お前があの警吏といちゃこらしてる辺りからかな」

「空木さんちゃんと目え開けてました！？」

あのやり取りの何処をどう見たらそうなる！？

どうせ見張るなら正確に！と口走りそうになったサツキを、空木はじろっと思据え、

「んな事はどうでもいい。お前、なんで自分が清州を斬ろうとしたのか、ちゃんと分かってるか？」

「——え？」

「…だから、お前はもうこの件から手を引けって言ってるんだ」

お前じゃ『喰われる』ぞ、と呟く。

——喰われるったって…

「…でも、別にあの子に喉『けしか』けられたから、斬ろうと思っただけじゃないし…」

ぼつりと呟き返せば、更に強く睨まれた。

「それがお前の弱さだと言ってるんだ。なぜあの使用人を庇う？疑うべき容疑者であることは明白なのに、お前はなんで」あの使用人の為に”刀を抜こうとした？その理由にも行き着かない愚鈍なやつは、回り番には要らない。早々に出て行け。」

「…っ」

「あ、ルツカは置いて行けよ。あれは役に立つ」

「…っ！う、空木さんっ！」

冗談のように何気なく言っているが、この男はこれで至極本気なのだ。

思わず縋る様に声を上げるとサツキを、空木は冷たく眺め、

「お前はあの使用人の懐に無防備に飛び込みすぎた。その所為で正否の判断すら危うくなっている。…いや、その様子じゃあお前は既にあの使用人に完全に喰われちゃってるみたいだな」

「だ、だから喰われるって」

「魔性だ」

スパッとサツキの言葉を遮って言った。

「あの使用人は、人を惹き付ける妙な才能がある。言葉、声、立ち振る舞い、視線。容姿が入れば完璧だったんだろうが、まああの外見でも十分通用するみたいだな。現にお前が堕ちてるわけだし。そういう人間の性を『魔性』と呼ぶ」

「…まじょう…ですか？」

まじょうって、あの『魔性』で意味は合ってるんだろうか。

でもそれって、魔性の女とか、そういう使われ方じゃなかったっけ…？

…佐波が？……………ま、魔性の女……………？

佐波のあの人畜無害そうな外見を思い出してぐるぐる思考を回しているサツキに、空木が更に続ける。

「『力になりたい』『助けたい』『守りたい』『役に立ちたい』——正しいのか間違っているのかは関係なく、ただ人にそう思わせる才だ。勾引「かどわか」すんじゃない。本人が自分で思う様に仕向ける。それ故に、自分が正常に判断できていないことに気付かせない。——なあ、恐ろしいだろう？」

彼はそう言っで、痩せた頬に笑みを浮かべた。人となりを伺わせる——冷たい笑みだ。

「ああいう人間はな、大体無自覚なんだ。自分が発している甘い匂いにも気付かず、周りを魅了していく。魅了された人間は、己が『他人の意志』に奥深くまで侵されているのにも関わらず、それを認めない。それが自尊心に強く絡み付いているからだ。——お前もあの使用人に魅了されている自分を認めたくはないんだろう？…そういうことだ」

あの使用人、太夫たゆうの素質があるな、と面白そうに顎を摩る空木に、啞然としてしまう。

——佐波が……………？

……言われてみれば確かに、あの時なぜ自分が刀を抜こうとしたのか、その理由が今となってはあやふやだ。

佐波と知り合ったのはつい最近だというのに、それより深い付き合い合いの回り番の任務を差し置き、彼女を優先しようとした。

あの時はそれが『絶対』だという確信があったのだ。沸き上がる歓喜さえ感じた。

自分こそが正しく、間違っているのは目の前の光景なのだと。彼女を助ける為なら、最悪刺し違えてでも止めようと本気で思っていた。――その正否は全く考えずに。

――でも、あれは確かに自分の意志だったはずだ。佐波を助けたという思いは、間違いなく自分の……

背筋を冷たい汗が流れた。

どう考えても、違和感がない。

でも、それこそが”問題”なのだと、空木は言っているのだ。

??? 私は……

「まあ、だからってあの使用人が”事”の犯人だとは思ってないさ。主犯にしては身を晒しすぎるし、馬鹿みたいに無防備だ。大方、主犯かもしれない豪族家の雇い主もあの使用人の特異な体質までは知らないんだろう。知っていたら、もっと上手く利用していただろうしな」

「…ど、どうして…」

どうして、空木はそれに気付いたのだろう。否、空木だけじゃない。きっと佐々目も気付いている。

彼らと佐波の接点の一つもなかったはずだ。なのに、なぜ彼女のそれに気付けた？

不安定に移ろぐ視線でそれだけ問うと、空木は鼻で笑った。

「言ってるだろう? 『疑う』ことが仕事だと。お前は先入観を持つ

てあいつを見ている。それはお前が”あの晩”のあいつの姿を見ているからだ。俺たちはそれを知らない。だから、出会い頭から疑ってかかれる。――まあ、あの容姿に少々騙されかけたのは認めるがな」

彼は面白くなさそうにそう呟いて、さつさと歩き出した。

サツキはどうにか考えをまとめようとしながら――

ふ、と当然の事実に行き当たり、慌てて空木の背中を追う。

「で、でも、何にしたって佐波は、あの怪我じゃ助からなインじゃ……！」

清州には、明日佐波の死体を見せると確約してしまっている。

この件から手を引くも何も――もう既に、残された道などないのではないか。

必死に追いつがるサツキに、空木は立ち止まって振り返った。

その顔にありありと「お前は馬鹿か」と書いてあって、ぎくりとする。

――な、何か間違った事を言っただろうか……！？

戦々恐々と空木の言葉を待つサツキに、彼は数回怒鳴ろうとし、しかしそれをどうにか堪えると、深い嘆息と共に言った。

「……お前、本当に知らないのか。それともただ単に馬鹿なのか、どっちだ？」

「ど、どっち？」

「ああ、もう答えなくていいぞ。俺の中では答えが出てくるからな。――いいか？」

失礼な物言いに反論する間もなく、空木は自分でサツキとの距離を縮めると、がしっとその肩を掴んだ。

—— 吃驚するくらいよく似合う、怒り笑いを浮かべて。

「一度しか言わないから良く聞けよ？ あの使用人は、助かる。以上、終わり、解散。じゃあな」

「っえええっ！？ ちよ、ちよっと空木さん！？」

身も蓋もなく言い放って颯爽と去ろうとする空木に飛びかかって止める。

痩せている割に力の強い彼は、サツキの体当たりに怯む事なく、しがみつくサツキを引きずりながらずんずん前方に進んだ。
全く取り合わない空木に、サツキは叫び続ける。

「ままま待つて！ 待つて下さいって！ え？ なんで？ なんでですか！？ だって医師「せんせい」も不在なんでしょう！？ あれ？ それとももしかしてあれ嘘ですか！？」

「… お前、本当にしぶといなあ。 所謂いえば班長は、お前のそのしぶとさが好きみたいだぞ。 俺にはわからん価値観だが」

「お褒めに預かり光栄です！ が！ それより…！」

「最は本当に留守だよ。 昼前郭に呼ばれて往診にいったんだ」

サツキの粘り強さに負けた形で、空木は呆れた様にそう答えて立ち止まった。

「じゃ、じゃあやっぱり最低でも二刻は戻れないインじゃ…！」

ここはサツキの世界とは違う。 医療の発達はややかで、輸血もままならない。

火事の怪我で元々体力が落ちている佐波を、あのまま止血もせずに放っておけば、例え二刻で最が戻れても、もう処置など出来ないのではないか。

脳裏に再び浮かぶ、ぐったりした佐波の姿。

自分なら、応急の手当くらいは出来た。止血して、傷口に黴菌が入らないようにすることだつて。

でもサツキはそれをしなかった。それはきっと人として間違っている。でも、この世界では常識で。

ぐらぐらと思考が定まらないサツキを見て取つて、空木は呆れ果てた声を上げた。

「お前なあ…。そもそも、ただ治療するだけなら早音を呼べば済むところを、なんでそうしないか、分かつてるのか？」

「???そ、そういえば…！」

すっかり忘れていた早音の存在にあわあわしてるサツキを面白そうに眺めながら、空木は声量を落とす。

「清州の手の者が内部にまだいる。最であろうと、正面から行つて治療なんか出来るものか」

「ええっ!? なら…！」

「だーかーらー」

らしくもなく焦れた様にそう言つて、空木の手がおもむろにがサツキの頬に伸びた。

柔らかく、強引に。

まるで恋人同士の戯れのような動きでそのまま引き寄せられ、耳に吐息がかかる???

「だから佐々目さんは”地下牢”に入れたんだろう？ 溟楼庵と臥龍城は、地下道で繋がっているんだ。…本当に知らなかったのか？」

18 (後書き)

う、嘘つきました… (涙) 次回までサツキさん視点です… 申し訳な
さすぎる…orz

陰険で容赦がなく、人を冷たく見下すことが生き甲斐のようなこの男の口から紡がれるにしては、低い、厭に良い声だった。

その所為で一瞬何を囁かれたのか分からず、ぽかんとしたサツキは、次いでその意味を呑み込むと驚きで大声を――

「、むぐっ!？」

「やると思ってたんだよお前は…」

固い手のひらでさり気なくサツキの口を覆った空木は、耳の側でげんなりした声を出した。

「こんな場所で大声出してくれるなよ。何処で聴かれてるとも限らんぞ」

「む、むっ」

「そのまま黙って聴け。いいか。何の為に佐々目さんがあんな回りくどいことして時間作ったと思う?――あの使用人を治療して匿う為に決まってるだろう?」

言葉の端々に苛立を見せながらも、口を抑えていない方の手で、まるで愛おしむようにサツキの頬を撫でる。

その凄まじい温度差に鳥肌を立てている彼女に構う事なく、空木は続けた。

「上の道だと二刻の道が、地下だと直結で一刻かからない。もう使いは走らせてあるから、じき最が地下道を通って帰ってくるだろう。あとは、本人の体力にかけるしかねえな。もし間に合わずあの使用人が死んだら、俺たちは重要な容疑者であり総主の御子の恩人でもあるあの使用人をみすみす見殺しにした罪で、戻られた総主からお叱りを受けるだろうよ。ちなみにお前、この場合の”お叱り”が何か知ってるか？ 軽い臨死体験だぞ？ 貴重な機会だから一度やられてみると良い。いい具合に人間歪むから」

「む、む…っ」

「清州との決めごとは、大した問題じゃない。総主が帰れば解決するだろう。どうせ自分で確認になんか来やしない。ああいうタイプの人間は、意外と打たれ弱いしな。あの使用人が清州の自尊心を叩いてくれたおかげで、しばらくは溟楼庵に関わるのも厭なはずだ」

囁きながら空木の指が、サツキの顎のラインを滑る。

その悩まし気な動作は、端から見れば恋人同士の親愛なる行為に見えるかもしれないが、当事者であるサツキはこの指が自分の喉に食い込む様をありありと想像して青くなっていた。

—— た、質「たち」が悪いのはあんたじゃないか…！

出来ることならぶん殴ってでも距離をとりたい。

でも空木のこの行動は恐らく、まだ屋敷にいるという清州の手の者を意識してのことだろうから、必死に衝動を押さえこんだ。

…睨むのはさすがに止めないが。

空木は至近距離で自分を睨むサツキを面白そうに眺めながら言う。

「あの使用人は、暫くは遊郭街の方で匿うことになるだろう。溟楼庵は再建中だが、借宿の方にも奥座敷くらいはある。そこで身体を直しつつ、尋問出来る様になればそのように手配する。ただし、極

秘裏にだ。あの使用人が生きていることがバレたら、俺たちは当然として、下手したら総主まで揃って反逆罪と偽装罪で斬首だ」

『反逆罪と偽装罪で斬首』の言葉にギクリと身体を強ばらせたサツキを、慰める様に撫でる手とは対照的に、彼の目は「動揺してんじやねえよ」と強く睨んで来る。

「警護府と軍部が両方絡んでくることなんて、そうそう無い。だからこそ、”分ることもある”。…多分、佐々目さんも気付いているだろうが、今回の件——恐らく、『密輸』に関係がある」

「み」

「喋るなって言っただろう？　ん？　分らないか？　そうか、ならその口、口で塞いでやろうか？」

「……………」

青ざめて全力で首を振るサツキに、空木はアッサリ「冗談に決まってるだろう」と平然と言う。

———そ、その冗談を本気で実行出来る男が何を言うか…！

回り番に入りたての頃、当時から副班だった空木の噂は色々聞いていたが、その中の一つに、彼が昔湊楼庵の男娼だった、という話があった。

最初は、これは虫類みたいな痩せた男が男娼だなんて絶対有り得ない！と、噂を嘘と決めてかかっていたが、時間が経つにつれて、彼の人となりと仕事ぶりを見る機会が増え、噂があながち嘘じゃないことを知った。

熱の無い冷たい視線は時に人の心を揺さぶり、心の籠らない誘い文句は、逆に支配欲をかき立てる。

男相手でも女相手でも、自由自在に嘘と本能を操るその手腕は、非

道と恐れられる回り番として申し分ない能力だ。

彼がどういう経緯で男娼から回り番に入ったのかは知らないが、班長の人選は正しかったといえるだろう。

…だが、このように本気と嘘と冗談の境目が酷く曖昧な男であるため、同僚に持つと大変苦労する。

——きつと空木にとっては、総てが”本気”で、総てが”嘘”なのだ。

必要とあれば誰とでも寝るし、どのような約束も平然と破れる。

心の殺し方を誰よりもよく知っている——『空木』は、そういう男だ。

無言で打ち震えているサツキを面白そうに眺めながら、彼は更に続ける。

「あの豪商家は貿易で生計を立てているらしいな。それに布津といえば、国境の州だろう。禁制品を国外に流していたとしても、意外じゃない。密輸は国家反逆罪だから、捜査は警護府と軍部が共同で行うもんだ。宿で足止めしてるっていう豪族商家の長男坊が白状したのかは知らねえが、もし『密輸』だとしたら、今回の事件のお陰で近しい証拠が上がったとみて間違いないだろうな」

警吏共は最初から、あの使用人を”罪人”と呼んでいたしな。と呟き、

「あいつらが知りたいのは、行方不明になっている三男坊のことだろう。火事の混乱で大門の記帳がおろそかになっちまってたから、いつ頃街を出たのか、…それとも”出ていないのか”、それすら分らん。あの使用人を拘束して吐かせるつもりだったんだろうが、清

州がとんだ馬鹿者で番狂わせというわけだ。：まあ、俺たちにすれば清州様々だがな。

お陰で俺たちはあの使用人を”独り占め”出来る。『密輸』なんて大層な罪状の為じゃない。『不審火』や『三体の他殺体』との関係も、まあ今はどうでもいい。——俺たちの仕事は、あの使用人が『総主の御子の誘拐未遂』に関わっているか否かを確かめることだ」

上手く行けば囹「おとり」にも使えるかもしれん、と呟いて、空木は滅多に見せないような艶やかな笑みを浮かべた。

「どのように捌「さば」いてやるかなあ。ああいう無自覚な魔性は、意外と自分に従順な者に弱いもんだ。懇「ねんご」ろになってみるか？ いや、ありやあ快感に流される人種じゃないな。かといって直接的な暴力には強そうだからなあ。間接的に、周りの人間を弄んでみるか」

まあ、何にしても最後には殺「や」るんだが。と、楽しそうに言う男に、サツキは瞠目した。

その様子に、空木は片眉を上げる。

「そりやそうだろう？ あの使用人は死んだ事になってるんだ。生かして出す気は更々無い。真実が分かるまでの使い捨てだ」

——使い捨て。

さあつと血の気が引いた。

そうだ。佐々目も、空木も、佐波を助けようとして行動を起こしたのではない。

佐波の知っているかもしれない情報に一体どれほどの価値があるの

かは分らないが、結局のところ、彼女が容疑者である以上、追求の手を緩める事はできないのだ。

それどころか容疑が晴れたとしても存在そのものが”危険”となれば、無事に生かしておくことも出来ない。

——生き延びても、彼女の命の灯は風前に晒されている。

それに気付いて、心が一気に沈み込んだサツキの様子を観察するように眺めながら、その固い手がサツキの頬を労る様に撫で、柔らかく、優しい声がそつと耳に落ちた。

「だからお前は手を引けと言っている。お前、飼い猫の首を絞めた事があるか？ 親の爪を剥いだことは？ ——仲間の首を刎ねたことはあるか？」

愛を囁くかの如き声色で、過酷なまでの現実を紡ぐ。

「生きる為の殺生とはワケが違う。自分が必死になればどうにかなるんじゃないかなんて思うなよ。遊郭「ここ」は足掻けば助かるような浅瀬じゃない。 ——深淵なる、底なしの沼だ」

恍惚とした吐息が頬に掛かり、サツキは間近にある男の顔を凝視した。

闇を覗くような、暗く光る瞳。

足下からガラガラと崩れていくような、錯覚。

????闇に、吞まれる????

崩ぜんと固まるサツキに、空木は近距離にあった顔を更に近づけ、

「???徐「おもむろ」に、唇に唇を重ねた。

瞬間、何が起こったのか分らずにぼかんとしたサツキは、数秒の間の後、文字通り飛び上がって距離をとり、

「——* & # ! @ # + ! # \$ @ % な、なななな!!?」

真っ赤になって口を押さえ、意味不明な叫び声を上げる。
そんなサツキを今度は諫め^{いさ}なかつた空木は、代わりに盛大なため息をついてみせた。

「お前：ちゅーくらいでその反応って…幾つだよ」

「あ、ああああんたが”ちゅー”とか言うな!! ななな何で」

「嫌がるかなと思って。」

「『ぶつ殺す!!』」

正統な理由があつたって最悪なのに、嫌がらせとか最悪の極みだ!

わなわなと口を拭いながら怒りに震えるサツキに対し、空木は「『ぶつ殺す』…」と興味深そうに呟く。

何ごとにつけの適応能力の高いこの男は、サツキの時折発する日本語にも興味を持っているようで、時折一人で使用法を推測しては楽しんでるようだ。

今回も新しい単語を引き出せたことに満足したのか、空木は先ほどの暗澹「あんたん」たる空気など感じさせない清々しい顔で続けた。

「まあ、どの道お前は手を引かざるを得んだろ。この件にはお前の嫌いな権力者どもが群がってやがるしな」
「うっ」

いとも容易く話題と態度を切り替える男に、未だ”ちゅー”の衝撃から立ち直れないサツキは、動揺しながらも思わず唸った。

…確かに、権力者は嫌いだ。今回の件で更に嫌いになったとも言える。

だが、嫌いなものに背を向けて逃げるのも自分らしくない気もしていて——正直、酷く混乱している。

黙るサツキに、空木はニヤリと笑い、

「知ってるか？ 皇国府の左相と右相が、今回の件でどちらが主導を握るか、政局で火花を散らしているらしい。突き詰めれば軍部と警護府の確執だな」

「確執…？」

「まあ、普通は官位第二位の左相に第三位の右相が逆らうなんて、有り得ていいことじゃない。…つまりそれほど、この国の内側の均衡が崩れてるってことさ」

堅牢なる蒼き血脈の皇国も、臓腑が腐っては仕様が無い。と続けて、皇国の統治下にある小国生まれの彼は、嫌みな程楽し気に微笑んだ。

？？聞くところによると、かつて絶対的な権力を誇った皇帝家の勢力が年々弱まり、警護府と軍部、貴族議院に政「まつりごと」を委譲せざるを得なくなってきたらしい。

皇国にとって、皇「すめらぎ」こそが法であり、絶対的な力であった。

しかしそれが過去のものになりかけている今、増長した権力者の横暴が絶え間なく、皇都から離れた各州も、代官による横領、賄賂、

法外な重税で貧困の一途を辿っているのだ。

——政治家が腐れば、国も腐る。…本当、どこの世界も根本は一緒ね。

巻き込まれるこちらとしては、大変面白くない。

ムツツリと黙り込んだサツキに、空木は唐突に「そういえば」と切り出した。

「右相といえば、お前が遊郭「ここ」に来る前は、湊楼庵の常連だったんだぞ」

「…ああ、姐さんたちから少し聞きました」

あまり——否、全然良い噂ではなかったが。

げんなりして応えようと、空木はしみじみと言った。

「当時はまだ右相じゃなかったがな。見目も悪くないし、中々に頭も切れる。騒いで遊女を傷つけたりもしない、実に模範的な客だった」

「……でも、変態なんでしょう？」

「遊郭なんざ変態だらけだ。まだアレくらいの変態なら、害はない」「害はなくても…」

生理的に受け付けない。

サツキは姐さん達から聞いた右相の噂を思い出して身震いした。

『あの方は、死んだ遊女を観に来てたのよう』

コロコロと笑いながら、白粉の上に綺麗な朱を引いた姐さんが可笑しそくに語る。

『良い男だったけど、妾「あたし」らには指一本触れなかった。死んだ女と、売られて来たばかりの初女「うぶめ」が啼き叫ぶのを観て回る方が、アレより好きだったみたいねえ。うぶふ…』

姐さんの猫のような目が細くなり、笑みを描く。

女を抱かずとも、金は払う。だから誰も何も言わない。言わせない。…そういうことなのか。

サツキからしてみれば、どんな色男だろうが、金持ちだろうが、権力者だろうが、そんな悪趣味な人間は”変態”以外の何者でもない。だが、教えてくれた姐さんは、最後にこう言葉を結んだ。

『無理だとしても、一度くらいは抱かれてみたかったわあ。今や皇国家のお姫様と結婚されて、右相様ですものねえ。客に聞かせるには、丁度いい寝物語だと思わないかい？』

…まあ、確かに遊郭を訪れる人間が色物を好む傾向があるのは認めるが…

???…やっぱり遊郭「ここ」は魔の住まう絢爛たる楼獄「ろっこく」だ。

と、その時再認識したのを思い出していたサツキに、何事もなかったかのように歩き出した空木が、ふと、思い出したかのように振り返った。

「清州の小間使い共も、臥龍城「ここ」にいる間は手を出してはこないだろうが、その分帰りしなは用心しろよ。拷問で情報「ネタ」を吐くくらいなら自害しろ。お前から漏れたと分ったら、二度殺し

てやる。」

いつも通りの、冷たく人を見下す顔。その熱のない瞳に、なぜか安堵を覚えるのは――多分気のせいだ。

全力で先ほどの事故（誰が何と言うと不幸な事故）を忘れる方向で、取り敢えず言葉で噛み付こうと口を開いたサツキに、空木は不意に後方を指差してみせた。

「迎えがきてるぞ。」

「???? へ？」

思わず振り返る。

気配0で全く気付かなかったが、いつの間にかサツキの歩幅で30歩ほど離れた木下……むしろ木に並ぶ背丈の……白い布を頭から被った大男が、静かに佇んでいた。

「ルツカ！」

今朝あつたはずなのに、ものすごく久しぶりに見た気がする相棒に喜んで駆け寄ろうとする。

が、それは後ろから襟首をがっしり握ってきた空木の手によって強引に止められた。

喉が締めまり「ぐえ！」と乙女にあるまじき悲鳴を上げたサツキに対し、彼は猫の首を掴み上げる様にしてサツキの首を絞めながら、ゆっくり言った。

「いいか。お前は絶対、この件から手を引けよ。」

「う、ぐ……！ イ、イヤ、でも……」

「も一回ちゅーされるか？」

「け、結構です……！！」

こいつ最悪な脅しを覚えやがった！

ワナワナしながらも反論出来ないサツキを最後に満足気に見やって、空木はすつと、静かに歩き去る。

あつという間に何処かへ消えてしまった空木に心の中で最大の悪態をつきながら、サツキは再び大男——ルツカに向かって駆けた。

茜色だった空は、重たい闇を纏い始めていた。

西の夜空に一際明るいう恒星が瞬く。あれはきつと、サツキの世界にはない星。それとも、宇宙は繋がっているのだろうか？

短い時間でそんなことを考えていたサツキがルツカに駆け寄ると、彼はいつもそうするように、屈んで腕を差し出してきた。

その腕に掴まると、もう一方の手で支えられながらいつもの定位置——赤子を抱き上げるような形で？大男の腕の中に収まる。

なんだかんだで、ここが一番安心する。

なにセルツカは馬鹿みたいに強い。サツキが知る中では最強だ。

出逢った当初は死ぬ程ビクビクしていたが、彼との付き合いもかれこれ5年。慣れない方が難しい。

男がサツキには決して手を挙げないことは、共に過ごして来た年月で知っている。その理由は、未だによく分らないのだけど。

「…ルツカ、あの…」

サツキは、見慣れた怪しい白い頭巾に開けられた穴から覗く彼の目に、自身の瞳を合わせた。

彼がこの位置にサツキを置きたがるのは、多分目線だ。

身長差がありすぎて普段は顔さえのぞけないが、腕にのれば男の白い頭巾からほんの僅かに覗く褐色の肌や、意外に長い睫毛と、その下の砂漠の空のような色の瞳が見える。

何やら難しい理由で人前ではこのような怪しい面体をしているが、その素顔が雄々しく精悍で存外に美しいことは、ここではきつとサツキしか知らない。

「私…拙い事、しちゃって、それで」

バツが悪いが、言わないわけにもいかずに早口に報告しようとしたら、不意にサツキを乗せた腕が揺れた。

「んわ！？なに！？」

危うく落ちるところだったサツキが驚いてルツカを見ると、彼はその砂漠の空色の瞳でじつとサツキを見つめていた。

——もしかして、今のは励ましてくれたんだろうか…？

男の、相も変わらず分かり難い感情表現に、思わず小さく笑ってしまふ。

滅多に喋らないし、奇妙なところも多いこの大男だが、彼がサツキの一番の理解者であり保護者であるのは間違いない。

——ルツカなら、誰より信じられる。

状況は困難だ。解決策もなければ、自分の意志さえハッキリとは定まらない。

一人なら早々に諦め、流れに添う事を選んだらう今回の件。

でも、サツキは幸か不幸か、一人ではない。

—— 為「な」すべき事を。

サツキは決意の灯る瞳を、砂漠の空色の瞳に重ねた。

「お願い、ルツカ。手伝って欲しいことがあるの」

19（後書き）

遅くなりました…。…ちゅーを脅しに使う男・空木（笑）

変なところにフラグ立ってますが、そっちは置いてとりあえずこれにてサツキさん視点はお終いです。

次回から佐波視点に戻りますが…まだまだ波乱の予感です。

人は臨終の前に呼吸が変わるといふ。

佐波は霞んでいく意識の中で、徐々に自分の呼吸が苦し気になっていくのに気付いていた。

—— ああ、まずいな…

体中がバラバラになりそうなほど痛み、冷水に浸かっているような寒気と息苦しさで、意識を保っていることが難しくなってきた。今まで何度か死ぬ程の恐怖や危機を体感したが、ここまで”死”に近づいたのは初めてだ。

瞑った瞼の裏に、安寧の常闇が蠢く。初めて見るはずのそれは、けれど何故だか妙に懐かしい。

それは佐波がこの世に生まれ来る前、確かに総てを預けていた原始の闇の揺籠。

—— 怖い…

ようやくこの身体に馴染んだ魂が、切り離される恐怖に怯えている。震える身体を掻き抱く力も、もはや残っては居ない。

どうにかして苦しみを逃したくて、下顎を動かすようにして呼吸した。

——私は…

私は、愚か者だ。約束一つ守れない、それどころか周りの人間を巻き込んで揉め事を起こし、そのツケを他人に取らせてしまうような、最悪の人間。

——でも、許せなかった…

どうしても、あの男——清州の言葉が、我慢ならなかった。遊女を畜生のように扱うあの男に、もし以織が触られていたらと思うと、目の前が真っ黒に塗りつぶされ、我を忘れた。

あのような権力者に逆らうなど、少しでも世の中を知っていれば、絶対にしないであろう浅はかで愚かな行為だ。

喻え内心でどう思っていようが、表面では頭を沈め、平身して仕えるべき相手。

その相手に、真っ向から歯向かった結果が、地下牢で一人臨終を迎えようとしている自分に重なっている。

しかもそのような人間に成り果てた理由が、己自身が引き起こしたことによる自暴自棄だというのだから、弁解の余地もない。

自嘲しようにも、もう表情筋一つ動かせない。代わりに、瞑ったままの目の端から一筋、血の交じった涙が溢れた。

——以織…

会いたかった。

ただ、会いたかった。

死に瀕している今でさえ、こんなにも寂しい。

以織を一人で逝かせてしまった癖に、自分が一人で逝くことに堪らない恐怖を感じている。

それはきつと、冥府でも以織と再会することが叶わないだろうこと

を察しているからだ。

自分は、天津国には逝けない。

それは、用心棒としての仕事の最中、生まれて初めて人を斬った時からずっと考えてきたことだ。

相手は山賊だった。積み荷と仲間を守るためには仕方がなかった。だから斬った。

でも、その数ヶ月後、同じ場所で再び現れた山賊は、以前佐波が殺した男の息子だった。

佐波は、苦戦しながらも最後はその息子も殺した。

彼は「父を返せ」と泣きながら死んでいった。

—— 後から聞いた話、彼らは山賊ではなく、貧困と重税に喘ぐ村の人々だった。

それからだ。佐波が”命”を考える様になったのは。

自分が斬り捨てた命の重さを知り、取り返しがつかないことを知ってようやく、佐波は己の仕出かしたことの残酷さを知った。

己の命を守るため。仲間の命を守るため。そういう名目の為に刀を抜けば、自己防衛は出来る。殺した命を”仕方ない”と斬り捨てる事が出来る。

でも、それじゃ駄目だ。佐波は仲間が同じ理由で誰かに殺されてもきつと納得できない。間違いなく相手を憎み、その憎悪は激しい怒りとして相手に振り下ろされるだろう。

殺戮の連鎖を止めたければ、どちらか一方を根絶やしにするしかない。だがそれも新たな連鎖を生むだけ。

命を奪うということは、そういう無間地獄を作ることには他ならない。佐波はその地獄を作った。その地獄で今も苦しんでいるのは、彼らの残された家族。

こんな自分がこのうのと天津国に旅立てるはずもなければ、先に逝

っている以織と再会できるはずもない。

冥府で裁かれた魂は、その業「ごう」の比重で天津国での再生の道と、獄洛「ごくらく」という冥府の深海への道に分たれるときく。

獄洛に沈んだ魂は、そこで数々の苦痛を味わい、身を削って汚れを落とした魂だけが、再び海面…天津国を目指せる。

以織を追って逝けるまでに、一体どれほどの時間をその深海で過ごすことになるか…想像するのも酷く恐ろしい。

??? それとも、これで良かったのだろうか…

会いたい、会いたいと願いながら、一方で以織に会うのが同じくらい怖かった。

彼の知る”佐波”は、簞の中で何も知らず、また知られることなく育った無垢な存在であるはず。

美しくもなければ、知性があるわけでもない。女だというのに、それらしいことは殆ど出来ない、見窄「みすば」らしい自分。

もし再会出来たとしても、5年振りに会う以織は、そんな成長を遂げた自分の姿を見てどう思っただろう。

以織の心根の優しさや清廉さを、佐波は誰より知っている気である。どのような生活を送ろうと、どのように蔑ろの扱いを受けようと、

以織の心根自体が歪む事はきつとない。

泥水の中でも、珠が珠であるように。

佐波が以織に出会った頃には既に、彼は完成された個を持っていたからだ。

でも、より多くのものを見聞きし成長した彼が、今の佐波を知って昔の様に接してくれる保証はどこにもなかった。

…否、確実に”昔の様な”関係には、どう望んでも戻れまい。

佐波はもう貴族の子女ではなく、以織もまた、使用人の子ではない。一度手放してしまった縁を再度繋ぐことが、どれほど難しいことか…この5年で骨身に染みている。

???ならばいつそ、この記憶を抱いたまま、獄洛の海に沈む方がいいのかもしれない。

…自分が彼の為に出来る事は、本当にもう何も無い。

美しく優しい記憶を抱いて、苦悶の海底で、彼の次なる生での幸福を全霊で祈る。

それすら、今の自分に許されるかどうか。

ふと、昔以織が冥府を信じないと言っていた姿が記憶を掠った。

あの時は彼の言葉の意味が理解出来なかったが???今なら解る。きっと彼は、あの頃から既に知っていたのだ。

関係が永遠でないことを。終わりが訪れた後に襲い来る、絶対的な寂しさを。

ぐわん、と、視えてもいない世界が歪んだ。

——ああ、…駄目だ。…もう…

牢の外で聴こえていたはずの看守の声が聞こえない。どこから落ちて響いていた水音も。

その代わりに耳鳴りが酷く鳴る。いや、これは耳鳴りではない。 ” 静寂 ” という音だ。

苦しいが、不思議と身体が軽くなるような錯覚。

感覚から死んでいつているのだろうか、と考えた頭も鈍っているのだろう。それを恐怖に感じることはない。

あるのはただ、細い息と、少しの思考だ。

——以織…

ぶつ切りになる思考で、佐波は最期に以織のことを想った。

以織も、死ぬ時は怖かっただろう。一人で、寂しかっただろう。生きて、やりたいことがあっただろう。

もしかしたら、遊郭に居る間に好いた人がいたかもしれない。

そんな人を残して死んでいくのは——本当に辛かっただろう。帰る場所も、何も持っていない自分でさえ辛いのだ。

恥知らずにも、生きたいと思っているのだ。

——以織、以織……

ごめんなさい。ごめんなさい。

私は最期まで、自分の為にしか生きられなかった。

あなたが私にしてくれたことの一つも恩を返せなかった。

会わせる顔がない。恥ずかしくて、情けなくて、——悔しい。

……でも……わたし、は……あな、た……に……

常闇の揺り籠に抱かれる。

意識が”静寂”と共にゆっくりと身体から解け——

——佐波は、ふつ、と呼吸を止めた。

どん！ という衝撃を胸に受け、空気の固まりを無理矢理に吐き出された。

その痛みに「はぁ！」と息を吸い込み、再び吐き出す。

何事が起きているのかも分からぬまま、瞬時に沸き上がった激しい嘔吐感と体中の痛みに、佐波は苦悶の声を上げた。

「――？戻ったか」

水の中から音を聞いているような、奇妙な音声だった。

遠くから呼びかけられているような、近くで囁かれているような、曖昧模糊とした声に反応して開こうとした目に、暗い何かが覆いかぶさる。

「閉じている。瞼が切れている。目に血が入るぞ」

端的に告げる妙に陰鬱な声が、佐波の朦朧とした記憶を揺らす。

——だ、れ…？

「……あ………」

状況が全く分らず、その恐怖から声を発しようとしたが、舌も上手く回らない。

それどころか力の入らない舌で潰れかかった気道に、何かが乱暴に突っ込まれて嘔吐「えず」いた。

「気道を確保する管を入れた。今は応急の手当しか出来ない。我慢してくれ」

——手、当…？

何かなんだか分からない。分かるのは、今もの凄く、吐きたいということだけ——

「吐くときは言え。吐瀉物で窒息なんて笑えんぞ」

「は、ぐっ」

言われた先から猛烈な吐き気を催して身体を跳ねさせると、”誰か”は手際よく管を引き抜き、佐波の身体を横向きに倒した。

「吐けるだけ吐いたら、また管を入れるからな」

——な、何が起こつて、いる…？

胃の中を全て吐き出しながら、佐波は混乱していた。

——じ、自分は、ええと……ええつと……あ、れ……？

朦朧とした頭には、どのような情景も映し出されない。

空っぽだ。恐ろしいほど、何もない。

ぞつと背筋を通った寒気は、全身の痛みと吐き気で霧散される。

”誰か”の言葉の通り吐けるだけ吐くと、ひと呼吸の後に、口の端から冷たい物が流れて来た。

「口の中を漱「すす」ぐだけだ。吐き出せるか？お前の身体はまだ水も受け入れられないからな」

「う、げほ…っ」

吐き出すというより、喘ぐ口の端から勝手に流れ出た水を吸い込んだ気管支が、強烈に痛んだ。

どうやったって逃れられない苦痛にガクガク震える佐波の額の汗を布で拭いながら”誰か”は「ところで」と、不思議な親しみすら感じさせる陰鬱な声で続けた。

「死にかけているところ悪いが——お前には今から、脱獄してもらう」

20（後書き）

一度死んで脱獄するヒロインって…

「溟楼庵の大火の参考人が死んだそうです」

形式張った礼をして入室してきた自分付きの下士官に目をくれる事もなく、青年は一言「そう」と答えた。

青年——右相は、その整った顔に柔らかな笑みを浮かべながら、手元の書類を捲り、書き足し、時には項目「ページ」ごと塵箱に捨てている。

これらの機密書類は、部屋にある暖炉で燃やされ、灰となつてからしか室外に出される事を許されない。

既に塵箱に溢れ返って床に広がっているそれらをちらりと目の端で確認して、下士官の男は右相の青年が凡「おおよ」そ何刻机に向かっているのかを算出した。

——ざっと、六刻か…

諮問会から帰ってずっと、ということだ。

凡人の集中力ならばとづくに切れている頃合いだろうが、この若き右相には雑作もないことらしかった。

仕事量、采配力、判断力、決断力、どれをとっても彼程国の中枢に相応しい人間もそう居ない。

加えてその野心。始終浮かべる穏やかな笑みの下には、常に冷酷で獰猛な獣が、“障害物”の喉笛を噛み砕く為に息をひそめている。その歯牙にかかった数多のかつての役員の顔を思い浮かべながら、下士官の男は水差しから杯に水を注ぎ、右相の青年に差し出した。

「休憩なさいませんか。見たところ、急ぎのものでもないのでしょう?。」

男の言葉に、青年は顔を上げた。そして笑みを深める。

「景林「けいりん」、君くらいなものだよ。僕にそういう助言をするのは」

「不要でしたか?」

「いや、助かるよ。どうにも、根を詰めすぎてしまみたいでね」

軽快に笑って下士官の男——景林の手から杯を受け取る。

上司が喉を潤すのを無感動に見つめながら、景林は口を開いた。

「参考人の死に、軍部の清州の関与があるとの報告が」

「きよす?…ああ、清州ね。いたね、そういえば」

記憶力が飛び抜けていい青年に、一瞬眉をひそませる”清州”の存在感の薄さに驚くべきか、それとも数百、数千人規模の組織の中にいるそんな役員すら覚えていた青年の方にこそ驚嘆するべきなのか。

青年はほんの少しだけ視線を下げ、手元の書類を一瞥すると、その上に無造作に肘をついて聴く体勢に入った。

「で、その清州が参考人を死なせたと?」

「はい。」臨「りん」からの報告ですと、参考人の不遜な態度に清州が逆上したと」

臨とは、右相が使っている密偵集団の名称だ。どこにでも入り込み、どこからでも知らせを運ぶ。

政治は情報戦だ。このような組織を持っているのは何も右相に限ったことではなく、皇帝、左相はもちろんのこと、力のある貴族議員・役員なら誰でも一人、二人は従えている。

ぎい、と椅子を軋ませ、青年は深く座り足を組む。

「…おかしい話だな。そもそも国内での参考人の身柄の確保は警吏の仕事だ。軍部「あちら」はあちらで密輸の件での捜査のつもりなんだろうが、役員がわざわざ自ら出向く様なことでもない」

「警護府「こちら」を出し抜きたかつたのでは？管轄は違えど、警吏と軍部役員では格が違いますから、容易に容疑者を奪えると考えたのかもしれませんが」

「それにしても随分とお粗末な人選だ。清州は確か、世襲役員だろう？気位ばかり高い、この政界「せかい」じゃ珍しくもない人種の」

世襲役員とは、その名の通り家名や金銭で官位を買った役員のことだ。

今の政界では、実に8割もの役員が相当する。

上には媚び、下には非道な振る舞いし、鬱憤が溜まれば言いがかりをつけて部下に暴力を振るう——そして場合によっては相手の命を奪うことも珍しくない、なんとも迷惑この上ない人種だ。

もちろん皇国の法律では殺人を禁じてはいるが、官位のある者とうでない者とは、罰の重さには雲泥の差がある。告発されることも滅多にない為、彼らの罪は黙殺されることが多い。

「ヤツを使うくらいなら、他にも選択肢は山ほど在っただろうに。

…特に、左相閣下の采配ならば」

青年右相とは違い、左相は永きに渉る皇帝側近の血族出身で、生まれながらに上位の格を持ち、誰よりも深く皇国の中枢に関わってい

る。

それだけに彼の政治上の實力は凄まじく、出世に手段を選ばない青年右相と云えど、迂闊には手を出しかねる相手。

その左相が、清州のような世襲役員を自ら使うだろうか？——答
えは、”否”。

「仰る通りです」

右相の言葉に、景林は頷く。

「どうやら清州を向かわせたのは、左相様直接の指示ではなく、現軍部総統司令長官の功醒「こうだい」様のようです」

「功醒？…ああ、なるほどね」

左相が軍部の実質の実権を握っているとはいえ、今は政界の人間だ。命令を下したのは左相かもしれないが、部下の采配は現総司令官の功醒に任せたのだろう。

…それにしても。

「…妙だな」

一連の流れに、意図的なものを感じる。

そもそも今回の件は、捲れば捲る程項目「ページ」の増える本のようだ。

溟楼庵の大火から始まり、誘拐未遂、殺人、地方豪族家の密輸疑惑…そしてその全ての共通項だった一人の参考人の死には、普段なら有り得ぬ人事が絡んでいる。

自分がこの物語の作者ならば、どのような結末を用意するだろう？

——そんなことを考えて、右相の青年はふ、と笑った。

確かに放火や殺人なんて、国内では珍しくもない。密輸も、賄賂と汚職に塗れた政界ではよくあることで。

なのにこの件だけが際立って見えるのは、それらに連続性と、微かに”別の目的”が匂うからだ。

さながら林の中に一本の木を隠す様に。

これまでの事件の裏側で、密かに動く”影”を感じる。

——その”影”こそが、”真相”。

「…どうやら、綻びが見えて来たなあ」

ニツコリと、無垢な若者らしい笑みを浮かべる青年右相に、彼付きの下士官は畏まった礼を捧げた。

「」命令を」

「功醍と清州の詳しい調査と尾行を”臨”に。あと君の部下を数名溟楼庵に配置してくれ。死んだ参考人の遺体の確認もだ。——悪

いけど、今回は君にも裏で動いてもらう。いいかい？」

「一命を賭しても」

「大げさだな」

小さく笑って、彼は「ああ、ついでに」と続けた。

「今日はもう遅いし、執務室」ここに泊まるよ。そう家に伝えてくれないか」

「奥方：——季薇」きら」姫様が閣下のお帰りをお待ちです」

景林が能面のような無表情でそれを告げると、青年は笑みを深める。

「不甲斐ない夫だろう？ 独り寝が寂しいようなら、君が相手をし

てあげてくれると僕も助かるんだけど」

「不甲斐ないばかりか、不誠実ですね」

「心ない相手に性欲の捌け口として使われるよりは、彼女にとって
も良いかと思つてね」

「それは私でも同じ事です」

「さて、それはどうかな」

青年は杯を傾け、喉を潤しながら、

「君は優秀だ。従順で忠実。時に僕以上に職務に冷酷になれる。？
？？けど、姫のことになると、途端に感情を見せるね？」

言つてニツコリ下士官に笑いかける。

その邪気の無い？？その所為で本気で殺意の湧く様な？？笑みを向
けられた下士官は、一瞬口を噤「つく」み、

「……………時々……………」

至極重たいため息をついた。

「…あなたの水に毒を忍ばせたくなる」

「君なら出来るだろうね」

でも僕は君を信用しているから。と明るく言う青年に、景林は舌打
ちしたい衝動を寸で堪えた。

代わりに、反撃を試みる。

「閣下が成そうとしていることは、狂気の沙汰です。しかもそれが、
行方の知れない”奥方”の為だとは？？左相様が知れば、さぞか
し喜ばれましょう。あなたの弱みを握ったと」

「左相閣下に言うかい？」

「いいえ。私は閣下の”僕”です。閣下の失墜など望むはずがない」
「僕の失墜は、牽いては姫の哀しみだものねえ」

愛しい姫君の為に、その夫で皇国「このくに」を傾けようとしている悪魔に手を貸す。

…なんとも健気で、実に単純な思考だ。

けれど右相である青年は、そんな下士官を誰よりも高く買い、信用している。

或る意味姫という人質を盾にしているわけだが、互いにそれくらいの牽制があつた方が、この二人の関係は上手くいくのだ。

「????閣下は、どうなさるおつもりですか」

いつも言い包められる立場の下士官が低く呟く。

「閣下の”奥方”がもし、もうこの世にいなければ????」

????探し人が、既にこの世に居ないとしたら????

右相の青年は、もう何度も自分に掛けたその問いを下士官の口から聞いて????それでも微笑んでみせた。

「さあねえ…。なら、この世以外を探すでしょう」

諦めるつもりなど毛頭ない。

その為に血反吐を吐きながら這い上がってきた。

全ては、少しでも高みから、彼女の行方を探す為。

ただそれだけの為に、多くのものを裏切り、切り捨て、ここまで成り上がって来たのだ。

…彼女を見失って、もう既に5年もの月日が流れていようと。

???この手に、取り戻す。

それが青年の、意味の無い世界に意味を齎「もたら」す、唯一無二の光なのだから。

*

じじ…と灯油「あかりゆ」が燃える匂いと、微かに血の匂いがした。
清潔に整えられてはいるが、高い場所に横に細長い天窓があるばかりの、四畳程の小さな部屋。

四方は固い木材の壁に囲われ、出入り口も、通常の半分程の大きさしかない。

元々は茶室用に設計されたが、建物自体を遊郭に買い取られてからは、主に捻を破った遊女の拘置部屋として使われている。床が畳ではなく板張りなのは、折檻を受ける遊女の血を容易に拭える為にだ。

その冷たい床に、青年は座っている。

行灯に半身照らされた彼の身体は、もう半分を闇に蝕まれ、地面に濃い影を落としていた。

まるでその闇に溶け込もうとするかのように、青年は暗い色合いの着流しの上から、同じ様に暗褐色の羽織を肩に掛けているが、闇に浮かぶ様な匂い立つ色香を纏わせる青年の美貌は、闇の中に在って尚、消せるものではない。

彼はけぶるような睫毛を伏せ、すつと通った鼻筋の下にある形よい唇を固く結び、ただ只管「ひたすら」にある一点を注視し続けている。

視線の先には――布団に横たえられた、一人の少女。

上から寝布を掛ける事も出来ぬ程に満身創痍である少女は、命の気配すら失せたかのような姿で、包帯と湿布に包まれた身体を布団に沈めている。

顔面にも大きく張られた湿布は少女の両目までも覆い、薄く開いた唇はカラカラに乾いていた。

水飴の中を泳ぐような永い静寂を破り、青年の指が、戸惑いながらそつと少女に伸ばされた時。

――風もなく、灯りが揺らめく。

「…意気地のないことだ。」

部屋の隅。男の背後から、低く嗤う声がする。

「叩き起こして、感動の再会でもしたらどうだ。今なら、その娘も容易にお前を受け入れるかもしれんぞ」

僅かな光源すら避けるように闇に身を浸したその男が音もなく姿を現したというのに、背を向ける美貌の青年は、振り返って相手を確認することもなく、ただ少女に伸ばしかけた手を、ゆっくりと自身の膝に戻した。

「…何の用だ」

青年が低く囁くように呟くと、闇の中の男は耳障りな声で小さく嗤った。

「お前こそ、こんなところに居てもいいのか？ 見つければお前は元より、この娘にも害が及ぶだろうに」

闇の中の男の視線が、横たわる少女に向けられる。それを知った青年は、忌々し気に闇に振り返った。

「消えろ。この女「ひと」の居る処に、闇「おまえ」が近づくな。」
「それこそ、お互い様だろう。」

闇が可笑しそうに嗤い、そしてひたりと声を潜める。

「何を怯えている？ 闇も恐れぬお前が、その娘の前ではただの小僧のようだ。——娘に知られるのが怖いかな？」

増殖する闇がぬるりと住処を離れ、手を伸ばす。

「娘を傷つけることが怖いかな？ 娘を裏切ることが怖いかな？ 娘に嫌われることが怖いかな？——容易く他を切り捨てるお前が、惚れた女からの軽蔑には耐えられぬと、そういうことか」

行灯の灯りが揺れ、芯の焼ける匂いがする。

ざわざわ、ざわざわと蠢く闇が青年を包囲し、カラカラと嗤った。

「だがもう遅い。お前の成した事は、すでに取り返す宛の無い過去だ。娘に逢う前まで時を遡り、自害でもしない限り、お前がこの娘を傷つけ裏切る”現在「いま」”を変える事は出来まい。——苦しいかな？ 苦しいだろうなあ……？ そうだ、ここを抜け出したらどうだ？ ……否、娘を置いて一人ゆく事など、お前には出来るわけがないか。身代わりに身体を売ったくらいだ。……あの時は随分驚かされたぞ。まさか、お前の方が”奪われる”とは」

微動だにしない青年の瞳に浮かぶ、酷く暗い感情を煽る様に、闇がその形よい耳にそうつと口をつける。

「その娘が大切ならば、その腕に囲えばいい。毎朝毎晩可愛がり、とろとろに溶かしてしまえばいい。——そしてお前無しじゃ息を吸う事も憊なくなつた頃合いを見計らい、娘の小さな耳に、甘く囁くんだ。」

——『あなたの生家を潰したのは、私です』と——」

全て、嘘だったのです、と。

「……黙れ」

青年が、低く唸る。

それと同時に、青年を囲っていた分厚い闇が、ふう、と風に吹かれる様に揺らいだ。

元の明るさに戻った部屋で、闇色の毛皮に覆われた獰猛で気高い獣が、激しい怒りをもって闇と対峙している。

射殺そうとせんばかりの視線を当てられた闇は、カラカラと嗤いながら消えてゆく。

「可哀想な男だよ、お前は。愛を知りもせずに、愛されたくて溜まらない。愛し方も知らない癖に、愛したくて溜まらない。…月を欲しがる小僧のようなだ。ああ、哀れな男だよ…」

最期に、嘲りを残して。

重しを外したかのように軽くなった闇の中で、行灯の灯が揺らめく。じじ…と芯を焼く音。

青年は酷く疲れた顔で、何も知らずに横たわる少女に向き直った。

少女の顔には、まだ赤みのある痣や小さな傷が残っている。

薬のお陰で激痛に眠りを妨げられる事もなく、外界から完全に遮断された状態の彼女のカラカラに乾いた唇に、青年はそつと手を伸ばして触れた。

「——愛なら、知っている」

その囁きと同じくらいに甘く濡れた白い指先が、少女の唇を優しくなぞる。

先ほどの獰猛さなど微塵も見せずに、木漏れ日の下で身体を休める獣のような従順さで少女に寄り添う青年は、暫しの間そっやって心を安めていたが、やがて名残惜し気にその指を離すと、虚空に声を

かけた。

「我が姫を、このような痛ましい姿にした罪を、どう償わせる」

「…首をお持ちしましょうか」

静かに返って来る応え。

老いも若さも感じさせない無機質なその声に、青年は底冷えする憎悪の透けた笑みを浮かべた。

「首など。…欲しいものは、出来る限り永久に続く『苦痛』だ。生きている事を後悔しようとも、止める事も出来ない永遠の連鎖に閉じ込めて、命果てるまで翩ってやろう。もちろんお前達も同罪だ。…だがお前達の償いは、別にある。心せよ」

大気も凍るような青年の微笑みに、彼に従う忠実な獣は、平身してその言を受けた。

「御意に。——総主様」

——行灯の灯が揺れる。

——雪が、散らついていた。

白く、清廉な世界が数度瞬いて、佐波はその場に立ち尽くしている自分に気付いた。

体が軽い。目の前の靄が晴れたように、頭も明瞭としている。

なんの杞憂もない、音も熱もないその世界で、佐波はゆっくりと空を見上げた。

——…雪だ。

無意識に手の平を虚空に差し向ける。

振り落ちる花びらのようなそれは、けれど佐波の手には触れず、空気をすり抜けて地面に零れていった。

——…ここは…

ようやく思考が回り始め、佐波はその場所を明確にしようと視界を彷徨わせる。

すると佐波の視界を助けるように、世界はぐるりと回転した。

白いばかりの景色が淡い陰影を描き、遠近を映し、——やがて、雪の舞う広場へと姿を確定する。

広場…いや、違う。佐波は、此処を知っていた。知らないはずがない。

だって此処は――

『約束を…して、頂けますか』

声。少年のまだ柔らかいその細い声に、佐波の意識は急速に過去を遡った。

視界が揺れる。その次の瞬間には、佐波の目前、ほんの数歩の距離に、彼らはいた。

白い地面に膝を折り、薄い衣服を粉雪に濡らして、二人の子どもが祈りを捧げるようにその手を繋いでいる。

その一方の使用人然とした服装の黒髪の少年が、項垂れる少女の手を握り、震える声を上げていた。

『私を、迎えに来て下さると…約束して頂けますか』

――この、記憶は…

震える。そうだ、この記憶は。

何度も何度も繰り返し、忘れる暇も無い程思い浮かべた、あの日の光景。

愕然とする佐波を置いて、白い白い世界は、それでもゆっくりと進んで行く。

『…嘘でも構いません。…嘘で、いいのです。ただ、姫様が頷いてくだされば、それでいい』

白い吐息が立ち昇る。降り続く雪片の間から、赤くかじかんだ二人

の繋いだ手が見えた。

少女が重たい首をのろのろと持ち上げる。

その頬は赤く腫れ、よく見れば顔も腕も——全身、雪と泥に塗れていた。

少年はそんな少女の汚れた頬を、空いた手で何度も撫でる。

何度も何度も、まるでその輪郭を手の平に記憶させるように。

そうすることで、互いが一つに溶け込めると、信じているように。

『そうすれば、私は明日も生きることが出来る。明日も、明後日も、姫様を想っていていられる』

少年が、少女に顔を近づけた。

涙は既に凍っていた。睫毛に積もった雪片がキラキラ輝くその光景に、佐波は——

…ああ——ああ。

——佐波は、目を覆いたくなった。

思い出したくない。

思い出したくない。

この記憶は、かつて佐波の希望だった。

この記憶が在る限り、迷いなど持たない、持ちようが無いと思っていた。

思っていた。

思っていたのに。

——以織。

以織、以織、以織。

その名を呼ぶ。空気を振動させない音で、佐波は叫んだ。

駄目。行つては駄目。

”わたし”はその約束を果たせない。

嘘でもいいと云つたあなたの、それでも消えなかったであろう希望を、私は打ち砕く。

あなたがこれから、どれほど辛い目に遭うか——”その”私は、まだ知らない。知らないから、手を放せたの。

お願い、ねえ、それよりその手を取って、どうか逃げて。少しでも遠くへ。少しでも永く。

生き存「ながら」える必要なんかない。

直ぐに連れ戻されることになると、飢えで、寒さで命尽きようと——私たちは——私は貫くべきだった。

彼を大切だと思つたら。身代わりにしたくないと思つたら。己の姑息さを、弱さを嘆く前に。

私は、彼と伴にあることを、貫くべきだったのに。

声が、白い光景の中の二人に届くことは無い。決してない。

俯き、それでも、どうか、どうかと叫んだ佐波の耳を、少年の固く、それでいて恍惚とした声が打った。

『姫様、これは罰なのです』

——コレハ、罰ナノデス——

記憶に吹き込んだ、古くも生々しい言葉。

佐波は顔を上げる。その目に、少女の耳に口を当て、囁く少年の姿が映った。

『私は罪を犯し……あなたを、悲しませた。だから、これは当然の報

いなのです』

目の前の光景と、記憶に差異はない。ないはずなのに、何故だかこれが初めて聞く言葉のように思えて、佐波は一字一句聞き逃すまいと感覚を澄ませた。

『あなたはまだ知らなくて良い。…どうか、知らないままできて下さい。あなたには、知られたくない。——嫌われたく、ない。

…ああ、でもいつか。いつかあなたも知る時が来る。解っているのです。私の本当の償いは、そこから始まると。あなたが全てを知って、それでも私と伴にあることを望んでくれるなら、私は——』

少年の言葉が途切れる。

呼ばれたように顔を跳ね上げ、背後を確認した彼は”誰か”に小さく頷いてみせると、再び少女に向き直った。

もう猶予がない。これが最後だと、その表情が告げている。

崩ぜんとしていた少女も、彼のその表情に気付いて、腫れた顔を歪ませた。

幼く、無知で無力な少女。

それでも少女は、この別れが、己の力ではどうやっても回避出来ないことを知っていた。

少年が、両手で佐波の片手を握った。

その手に力が籠り、許しを請うように頭を垂れ、——そして、彼は云う。

『姫様……私の姫様。どうか、お願いします。いつか、”その時”が来たら、…必ず、』

——必ず、私を迎えに来て下さると、約束して頂けませんか——

*

「起きろ」

最の囁くような低い声に、佐波の瞼がぴくりと動いた。包帯を解いたばかりの瞼には、真新しい傷がある。

痛々しいが、そのお陰で眼球は守られたのだと思えば、そう悲惨にも見えない。

それよりも、青ざめているを通り越して土気色になりつつある顔色の方が、よっぽど悲惨で、悲壮だった。

最の呼びかけに、佐波は薄らと瞼を持ち上げ、喘ぐように口を開いた。

「……さ、い……様……」

掠れた、小さな声。弱々しい小動物の鳴き声のようなそれに、最は応える。

「よく耐えたな。一通りの施術は終わった。そろそろ麻酔が切れる

頃だろうから、先に痛み止めを飲むといい。中に睡眠薬も混ぜておくから、よく眠れる」

感情の籠らない鋭利な口調だというのに、云っている内容は酷く優しい。

麻酔で意識を失う前に見たままの最の姿に、佐波は小さく瞬いてそれに応えた。

どうやら、あれから???脱獄の日から、数日が経過しているようだった。

その間怪我の高熱で生死を彷徨った佐波には、今の正確な日時は愚か、ここが具体的に何処なのか、何故自分が再び手厚い治療を受けているのかさえ、さっぱり検討がつかない状態だ。

分かっているのは、運ばれたのが四畳程の小さな部屋で、そこでひたすらに眠らされ、起こされたと思えば激痛の伴う施術（手術）を体中に施されたことくらいだ。

特に火事で負傷した左肩から腕にかけては何箇所もの骨折があり、一度の施術では麻酔の時間が足りず、今回が二度目となった。

麻酔でまだ霞がかった意識の中、先ほどの夢の光景が視界を横切り、佐波は思わず、ふ、と口元を緩めた。

「…い、おり、を……見たのです……夢の、……中、で………」

喉を押し開いて、もつれそうになる舌をどうにか動かし言葉を紡ぐ。その恍惚とした声に、手早く薬剤を調合していた最はその動きをピタリと止めた。

場の空気が僅かに変わったことにも気付かずに、佐波は夢の中を歩くように囁く。

「……迎えに……来ると……約束……した、のです……」
「……あまり喋るな。舌を噛むぞ」

最の静かな忠告を、佐波はゆっくりと破る。

「最、様……本当に、……以織は、もう、この世に……居ない、の
でしょう、か……」

揺れる灯りが、布団に横たわる佐波の輪郭と、黒い羽織の最を照らし、壁や床に依「よ」り濃い影を生む。
じじ……と灯り油の芯が燃える音が、厭に大きく聴こえた。

「もし……そう、なら……私は、これから……」

——どうすれば、いいのか。

何度も心の中で自問したことなのに、口に出せばより一層の焦燥を得る。

正常な判断が出来る状態の佐波なら、そのような弱音は、間違っても口にしなかっただろう。

だが、麻酔で半分麻痺した思考は、それを考えるまでに至らない。
逆を云えば、思考など崩落していてもおかしくない状況下であつても、その事だけは頭から離れないということ——

佐波の言葉に、最は暫く黙って薬湯を練っていたが、やがて小さく呟いた。

「……お前は、”いおり”に惚れていたのか」

その言葉に、佐波は瞬いた。

『ホレテイタ』とはどういう意味だったか、と鈍い頭で考え、やがてその答えが一つしかないと思付くと、更に自分に問いかけた。惚れている、とはつまり相手を好いているということ。ならば、以織は完璧に当てはまる。

だが佐波も１７年生きて来て、『好き』には色んな種類があるのだと学んでいた。

以織は大切に、大切に、とにかく大事な人だ。他の誰にも代え難く、彼の為ならば何だって出来ると信じている。

だが、それを”恋”という名前の感情一つに押し込めるのは……何故だか酷く窮屈に思えた。

視線を彷徨わせ、瞬き、考え——やがて佐波は観念したように肺から空気を押し出した。

「……わか、りません……でも……ただ……彼が、恋しい、……のです……」

佐波の答えに、最は眉根を寄せた。

影を背負ったその姿は、今まさに魂を狩ろうとしている死神「ガロ」のようでもある。

「もし会えていたとして、どうするつもりだったんだ。手引きでもするつもりだったのか？」

至極不思議そうに問いかけてくる最に、佐波もつられて不思議な心地になった。

最は姿は死神のようであっても、中身はその真逆に人を救うことに尽力する良い医者だ。

佐波のような使用人を相手にする医者の中には、立派な看板を掲げ

ていようと、医学など民間療法しか知らぬような輩も多いと聴く。患者を身分で選び、金儲けの為だけに腕を振るう医者も多いこの世では、彼は異質ともいえる。

遊郭という特殊な環境が彼をそうさせるのか…など考えていた佐波は、じつとこちらを見つめて答えを真面目に待っている最に、少し慌てながらも???思わず小さく笑っていた。

「…それも、良かった…でしょうね…」

口からついて出たのは、心からの本心。

手に手を取り合い、闇の中に飛び込む。その時世界は、どれほど輝いて見えたことが。

有り得るはずのない光景を思い浮かべると、感覚の無いはずの胸が痛んだ。

「生涯、会えないよりも、ずっといい。…一人で、死なせてしまうより、ずっと……」

目を閉じる。そこに以織の面影を探したけれど、闇が映るだけだった。

「…お前は変わっている」

幾ばくかの間のあと、最は静かに息をついた。

そして、手元の茶碗から薬湯を急須に移し替え、佐波の口元に差し出す。

「普通、そういう台詞は男に云わせるものだ。男の立つ瀬も考えろ」
言いながら口に急須の口を押し付けられて、佐波は「むぐ」と呻い

た。

本能的に流し込まれようとする液体を拒否しようとする佐波に構わず、最は急須を傾ける。

「男に狂った女は山程見て来たが、どれも哀れなものだった。だがお前は…不思議だな。お前なら、やろうと思えば手引きすら完遂してしまいそうだ」

「む、ぐう…」

苦い。いや、苦いとかいうものではない。痛い。舌がじんじんと痺れるようだ。

麻酔が残っていてもこれほど激しい味となると、完全に覚醒してからは飲めたものではないだろう。

動けない身体を擦って苦しんでいる佐波に、最は恐ろしい程の真顔で云った。

「男前だと褒めているんだ。喜べ」

…『男前』は、女にとっても褒め言葉なのだろうか…

息も絶え絶えに痛み止めの薬を飲み終えた佐波が、疲れ切った土気色の顔でぜいぜいと息をついている姿を見つめながら…やがて最は視線を下げた。

「…怪我が治ったら、お前に話すことがある。——”いおり”のことだ」

口内の強烈な苦みも瞬時に忘れて、佐波は目を見開いて最を見た。揺れる灯りの中に浮かび上がる、陰影の濃いその表情からは、何も見出せない。

???以織の、こと……

麻酔の解けかけた身体に、じくじくと熱と激痛が戻りつつある。
脂汗を浮かべた肌に張り付く衣服の感触まで戻って来て、佐波は無意識に、息苦しさで喘いでいた。

「…い、ま、」

今、話してくれれば????

そう言おうとしたのに、舌がもつれる。…違う、動かないのだ。
急速に視界が狭まり、意識を引きずり込もうと闇が手を伸ばして来たのを感じて、佐波は必死に抗った。

???そうか、そう、いえば、痛み止めの…中に…睡眠薬を……

それにしても効き目が早すぎないか、という疑惑まで呑み込んで、意識がぶつとりと途絶える。

その直前に、身を折り屈めた最が耳元でそつと囁く声が聴こえた気がした。

「自分を保て。どのような苦しみの中でも、自我を手放すな。…
いおり」に会いたければな」

次に佐波が目を覚ましたのは、最に薬を飲まされてから二日も経った夕時だった。

一体どれほど強力な睡眠薬だったのかは分からないが、確かに施術直後の痛みを感じずに済んだのは良かったのかもしれない。

それでも薬が切れれば、感覚は鮮やかに蘇る。

覚醒を始めた意識を同じ容量だけ痛みが蝕み、佐波は全身の鈍痛と熱に浮かされるようにして目を覚ました。

——ここ、は…

鉛のように重たい瞼を必死に開いて、霞む視界を保とうと何度も瞬く。

——何処だったか…ああ、そういえば、見覚えがある…確か、眠りに落ちる前も、ここに…

ようやく見え始めた世界は、半分闇に浸された、茜色をしていた。どこから零れる光だろうかと思えば、目の端に天井高くに横に細長い天窓があることに気付く。

光の幅から見ても、手を出すことも叶わないほどに細い、空気穴のような窓。

事実、この板張りの部屋には他に窓らしきものは一切なく、硬質な板張りの間取りは息が詰まる程に閉じ切られているのだから、空気

を通す為の窓なのかもしれない。

よく耳を澄ませば、どこからか人の笑い声と、弾く様な弦楽器の音が聞こえて来る。

何処「いずこ」かで宴でもしているのだろうか……と過った思考を遮るように、唐突に壁の向こうに気配を感じた。

身を強ばらせると同時に、壁の一部かと思っていた部屋の扉——普通の扉の縦に半分ほどの大きさしかない——の外から重たい金属をガチャガチャと鳴らす音が聞こえる。

——これは……施錠の、音……？

どうやら、ここは外から厳重に閉め切られているようだ。

警鐘を鳴らす本能は鈍い身体と思考の所為で役にも立たず、佐波はただ朦朧とした意識の中で扉が開くのをじっと見つめていた。

扉が、ガタツと音をたてて開かれる。

そこから潜るようにして入って来たのは——見知らぬ、痩せた若い男だった。

使用人のようにも、下男のようにも見える様相。体格の程は知れないが、身のこなしには全くの隙が無い。

扉を潜るなり視線を布団に横たわる佐波の目と合わせたその眼光は驚く程冷たく、それと同じ位に愉快気だ。

男は、さっぱりとした黒髪を揺らして首を傾げ、笑う。

「お目覚めのようだな。良かった。叩き起こすのは嫌いじゃないが、加減が苦手なもんでね」

あっさりとした口調のくせに、言っている内容はえげつない。

本能が警鐘をかき鳴らす、今の状態では逃げ出すことも迎え撃つ

ことも叶わず、ただ身を守るように身体を緊張で固めた佐波に、男は何気ない動作で布団のすぐ側で胡座を組み、佐波を見下ろした。そして、

「ここが何処だか分かるか」

世間話をするように問う。

佐波は少しだけ間を置き、掠れた、吐息のような声で素直に「…いいえ」と答えた。

男は佐波が言葉を返したことに對してか、僅かに目を細めると、

「ここは皇都遊郭街の…まあ、湊楼庵の姉妹楼の一軒だ。今現在、湊楼庵で働いていた者達はこのこと、あと幾つかの同じ様な軒に分かれて仮営みをしている。湊楼庵は再建中だ。あれだけの建物がほぼ全焼したのだからな。幾ら金を積んだとしても、少なくとも完成は来春以降だろう」

熱のない声で応えてくれた。

——遊郭街…

男の教えてくれた内容に、やはりという気持ちが沸き上がる。

最から治療を与えられている時点で、この場所が遊郭と関係がある場所であることは明らかだ。

???ということは、ここは遊郭街の何処かの軒の一室なのだな…

僅かなりとも現状を知れてホッとする中、同時に火事の記憶が断片的に蘇る。

そつえば、焼けた湊楼庵はどうなったのだろう。男は再建と云っ

だが…同じ場所にもう一度建て直すということだろうか。
新たな疑問が幾つも浮かんでくるが、それが確りと形を作る前に、
男がするりと続けた。

「俺は空木「うつぎ」という。ここでの立場は皇都遊郭街の回り番、
第二班の副班長だ。お前とは臥龍城の地下牢に行くまでの間に顔を
合わせているが…まあ、覚えてはいないだろうな。お望みなら年齢・
身長・体重・給与・性的嗜好までなんでも教えてやるが、どうする
？」

——どう…？

視線で射殺せそうなほどの眼力でこちらを見下ろしながらそのような
軽口を叩く男に、佐波は眉をひそめ——数秒遅れて、ハツとし
た。

「回り、番…っ あ、のっ サツキ、様は…！」

記憶が一気に逆流する。

——そうだ、私はあの時サツキ様と…もう一人、名は思い出せない
が、警吏の男と一緒にいたはず。

その後の痛みの記憶が激し過ぎて、前後にどのような会話をしたか
などとは思いつけないが、彼らを自分の犯した愚かな行いに巻き込ん
でしまったことは…ほぼ間違いないだろう。

もしやあの後彼らまで咎めの対象にされたのではないか、と今更慌
てる佐波に、空木は一瞬表情を消すと、滲み出る様な悲哀の籠った
眼差しを伏せた。

「…サツキは、残念なことだった」

「…えっ」

「お前を牢に運んだあと、あいつは”清州「きよす」”の手下に捕らえられ——」

「…っ！」

熱で浮かされた頭に冷水を打ち掛けられたように、佐波の身体からサアツと血の気が引く。

一瞬で浮かび上がった記憶はあの時の——清州がサツキに——遊女に対して向けた、明らかな侮蔑。

もし、あの後すぐに、サツキが清州に捕らえられたとしたら、彼女はもう——

過った悲惨な光景に佐波は居ても立つてもいられず、激痛を堪えて、横たわった身体を起こそうと必死にもがき——

「——そうになったみたいだが、ルツカが撃退したそうだ。まあ、あの巨兵が側にいる状態であいつに手を出せる猛者は、少なくとも皇都にはそうそう居まい」

「う、むべっ!？」

アツサリとその表情から悲哀を消し去り、澄ました顔でそう言う男に、起こしかけた身体から力が抜けた佐波は無惨にも再び布団に沈んだ。もちろん激痛を伴って。

「~~~~っっ！」

痛みと混乱で悶える佐波に、空木は明るく笑い声をたてた。

「中々良い反応をするじゃないか。それが”演技”だとしたら、喜劇役者の才能があるぞ」

「……っ え、演技……？」

「……まあ、今日は挨拶みたいなもんだ。お前はまだ今の己の立場を理解出来ていないだろうし、俺が先に”これからの事”を教えておいてやるうと思つてな。——それにしても……」

男はそう言つて、痛みで思考がぶつ切りになる佐波の顔を覗き込んだ。

「……やはり、並、だな。いや、せめて髪を整えれば、どうにかならんこともないか？　だがその短さじゃ結う事も出来んだろうしなあ……髪「かつら」か……」

「……っあ、あの……」

近い。顔がやたらと近い。

じいつと凝視されて、佐波には逃げ場も無く、痛みや熱の為ではない汗が背中を流れるのを感じた。

男はそんな佐波には一向に構わず、ただ物を物色するようにじろじろと視線を配り、やがて首を傾げて問つた。

「お前、経験は？」

「けいけん……？」

「男と交わつたことはあるかと聞いている」

「おと……」

ザアツと耳の奥で血の気の引く音が聞こえた気がした。

瞠目して口をもの言いた気に動かす佐波を見ただけでその意味を理解した空木は、興味なさそうに「ふうん？」と呟き、

「その齡で生娘とは珍しいな。どこの生まれの使用人でも、大抵は屋敷の用心棒か下男……それか莫迦息子共の慰め者にされているもん

だがなあ」

色気が無さ過ぎたか？と真顔で聞かれた佐波が目眩を覚えるよりも一瞬早く、空木は「まあいい」と表情を切り替えた。

「初物ならそこそこ高く売れるだろう。お前の場合、むしろ男娼として売った方がよほど高く売れそうだが」

「…う、売る…？」

どうにも話の雲行きが怪しい。

否…むしろ、この会話から指し示されるものは一つしかなくて、佐波はやっぱり目眩を覚えた。

——そして、楽しそうに男が笑う。

「ああ、お前は怪我が治れば、遊郭に”突き出し”だ。」

23（後書き）

*『突き出し』…^{かむろ}禿から成長して初めて一人前の遊女として披露されること。また、その遊女。素人女がいきなり遊女になったもの。…を云うそうです。湊楼作中では主に遊女デビューのことだと思つて下さると嬉しいな。

突き出しには2種類あり、『見世突き出し』と『道中（呼出し？）突き出し』で、それぞれに遊女の格（容姿など）で分けられます。多分佐波になるなら見世突き出しの方かな…続きます！

——遊郭…突き出し…

確か、遊女が遊郭に初めて上がることをそう云ったはずだ。
なんでも、大夫の候補ともなれば、それは華やかな道中突き出し＊
を一星期（一週間）も行うのだとか。
だがそれ以外の下級遊女は、見世突き出しといって…要するに、軒
先の張りの中で客を待つ列に並ぶことになる。

——私が…遊女…？

つまり、身体を売るのが。見知らぬ相手に。

——…売れる、のか…？

と、思わず無意識に自分の姿を確認しそうになって、そういえば今
は姿どころではなかったと慌てて思考を切り替える——が、どう
にもピンとこない。

痛みすら忘れてぐるぐると思考の渦に吞み込まれていた佐波に、今
しがたその渦に佐波を引きずり込んだばかりの男は何故だか嬉しそ
うに言葉を続ける。

「正直、お前の処遇には俺たちも頭を悩ませていたんだ。尋問しよ

うにも、肉体的な苦痛に強いのはさすがにもう分かっていることだし、かといって弱みを握るには、それを探る時間すら惜しい現状だろう？　だが折角危ない橋を渡って臥龍城からこちらに逃がしたのだから、俺たちとしてもお前を有効に使いたいわけだ。わかるか？」

ん？と頗「すこぶ」る笑顔で問いかけられても、佐波は硬直したままだらだらと冷や汗を流すだけだ。

その様子を満足気に見下ろし、空木は続ける。

「だから、お前は餌「え」として使う事にした。まあ、確かにお前は『死んだ事』になっているし、顔を出させるのはこちらにも危険を伴うことではあるが……だからといって大事にしまって置いたところで何のご利益があるわけでもないしな。誤摩化す方法は幾らだてある。ならばいっそ罔「おとり」として使えば、或「あるい」は結果が出せるかもしれん、と。つまりこう判断したわけだ」

言い切ると、未だに硬直から解けない佐波の表情を見て、本当に嬉しそうに笑った。

「いいな、その顔。欲を言えば、もっと絶望してくれないか。お前のそんな顔を見る為に、わざわざ俺が出向いたんだぞ？　じゃなきゃこんな伝達役、もっと下っ端に任せたさ」

つん、と湿布を貼られた頬を突かれて我に返る。

血の気は引いたままだし、男の言動に逐一目眩がするが、それよりなにより今は情報が必要だった。

佐波はぐつと顎を引き、男を見上げた。

「わ、…私は、死んだ…事に？」

「そうだ、お前は『死んだ』。清州に——軍部のお偉いさんに私

刑にされた後、臥龍城の地下牢で独り寂しく死んだんだ。可哀想にな」

”可哀想”だなど一片も想っていないだろう男の声色よりも、自分が『死んだ事』になっっている現状によって起こりうるこのの方が余程気がかりで、佐波は必死に頭の中を整理した。

——『死んだ』——清州——私刑——地下牢——…

ずぐ、と左肩が鈍く痛み、視界が狭まる。

暴力によって植え付けられた恐怖が全身を嘗めるようにして這い回り、心臓が力の限り絞られるように痛んだ。
耐え切れずにぎゅっと目を瞑ると、否応無く一瞬で記憶が後方に飛ぶ。

——ああ……ああ、……思い出した。…そうだ、私は、遊郭「ここ」に以織を捜しに…そして…

夜に羽撃く炎の蝶のように燃え上がる溟楼庵。
そこで少年を見つけ、怪我をして運ばれた先で以織の死を聞かされ…そして——そして自分の犯したあの愚行。

——…その結果が、総て今に繋がっている。

まさしく自業自得だ。むしろ、自分はその時…清州に逆らったその時に命を落としていても仕方がなかった。

それを彼らが助け、今ここに隠してくれているのだ。謂うなれば彼らは命の恩人で……

……だが、やっぱり分からないことがある。

佐波は再び空木を見上げた。

「囿「おとり」、とは」

佐波の言葉に、彼は小さく小首を傾げ、

「うん？　そこまで説明が必要か？　…まあ、お前のそれが素なのかどうかは置いておくとして、だ。聞きたいというなら、答えようか。」

——まず、これはお前が総主の御子を誘拐しようと画策した連中の仲間である、というのが前提だ。奴らから見れば、如何にお前が端役であろうと、遊郭に残した最大の痕跡には違いない。表向きお前は死んだ事になっているから、今頃奴らはわざわざ危険を冒してお前を処分しなくて済んだと胸を撫で下ろしているだろう。生きて捕らえられていれば、どのような情報が流れるか分かったものではないからな。…だが、そのお前がもし生きて遊郭に売られていたら、奴らはどうすると思う？　すぐにでも接触を持とうとするか？　あるいは殺そうとするか…」

語る男が何故だかとても嬉しそうなのが気になるが、それよりも佐波は自分にかけられていた嫌疑を瞬時に思い出し、色を失くした。

「私は、誘拐など、企てていません…！」

「言っただろ。お前に回り番”お得意の尋問”は時間の無駄だ。自白は期待していない。それに、もしお前が本当に無実だとしても、お前一人遊郭に売り渡したところで痛む良心も持ち合わせていないんでね。その後性病で死のうが、無理心中に巻き込まれようが…俺は一向に構わない。つまり、この作戦の良いところは、俺たちには何の不利もないところだ」

さらりと非道な事を口にした空木は、佐波の表情を伺うようにして目を細めている。

佐波は勢いで言い募ろうとし――……ぐつと堪えると、口を閉じ、心を落ち着かせるように震える息を吐いてから、もう一度改めて口を開いた。

「……私は、誘拐犯の仲間では、ありません。それに、私が知る限り……仕えていた豪商家も、そのような大それたことは……あの日は偶々、商談の最終日で……それで遊郭へ。……一体、私にも何が起きているのか、未だに分からないのです。だから、どの道、誘拐を企てた者達が私を捜しに来る事は」
「奴らは来るさ」

男の目が暗く輝く。

「絶対に、また現れる。目的をまだ達成していないんだ。喻えお前が本当に白だろつと、お前の仕える家が無関係であったとしても、遊郭には何度だって沸いて出る……胸糞悪い虫みたいな連中だ」

「目的……」

「……その間抜けな顔も演技だとしたら、顔面を殴ってやりたいところだ」

とても女子供に対する台詞じゃない言葉を呟き、男は酷薄に嗤う。

「総主の御子が誘拐されかけたのは、これが初めてじゃない。今回が一番派手だったが……少なくとも、片手じゃ足りないくらい未遂は起こっている」

——片手じゃ足りない……？

それは、…そんなにも、総主の御子が狙われているということなのか。

確かに、皇国府にも覚え目出度き遊郭総主の子息ともなれば、金欲しさにそのような凶行をする者も出て来るかもしれない。だが、元来強固であると聞く遊郭街の警護を相手取るには、相当な力と知恵と金が必要だ。

少なくとも、ただの破落戸「ごろつき」や山賊崩れには到底不可能…

それを思いついた瞬間、ふと、佐波は眉をひそめた。

——それとも、目的は”金”ではないのか…？

「俺たちもそろそろ、我慢の限界だね。害虫は巢から根こそぎ始末しなきゃ駄目だと、そう判断した」

男の言葉に思考が現実へと引き戻され、視界の焦点を合わせた佐波はギョツとした。

目前に男の顔。今にも触れそうな距離で、男は楽しそうに嗤った。

「だからお前は、奴らを巢穴から呼び寄せる餌だ。美味しそうに着飾って、その身を晒せ。働き次第では、恩情もかけてやれるかもしれない」

——つまり、私は選択権どころか、生殺与奪の権まで彼らに握られているということか——

すう、と波が引くように表情の消えた佐波を見下ろして、空木は至極満足そうに頷く。

「そう、その顔が見たかった。泣き喚かれるのは好きじゃないが、

静かに死んでいく心を見るのは楽しい。特にお前には、俺は少しばかり怒っているのね」

空木の堅い手が佐波の頬を撫でる。

「心外そうな顔だな？　だがお前が俺を今現在進行形で苛立たせているのは本当だ。理由に思い当たる節はないか？——例えば、俺の同僚の粘着質で面倒な女のことだ」

優しい手の動きとは相反する男の言葉に、佐波は己が獣に押さえつけられた卑小な動物であるような錯覚を覚えた。

だが今は恐怖を心の隅に追いやり、空木との会話に集中する。
”粘着質”だとか”面倒”というのは分からないが、同僚の女、という言葉から佐波が連想出来たのは、たった一人だ。

「…同僚…とは、サツキ様の、こと」

「うん？　他にあるのか？」

甘く耳元で囁かれて、佐波は男の目の中に闇を見た。

男の手の平がそつと佐波の視界を塞ぎ、耳に息を吹き込む程の近さで、優しく語る。

「あいつはアレでも珍しく見所のある女だね。代わりを見つければ難儀だ。…お前に奪われるのは、面白くない」

「うば、われる…？」

「無自覚か？　尚のこと性質「たち」が悪いな。俺の見立てでは、お前が臥龍城の中庭で”奪った”のは彼奴「あいつ」一人ではないようだが……一つ、忠告しておいてやろう」

途中独り言のように呟き、そして再び優しく呟いた。

「喻え無自覚だとしてもお前のその厄介な体質は、周りを巻き込みやがてお前自身をも殺すだろう。俺はそうやって死んだ男を、一人知っている。男は、ある国の王だった」

遠い国の御伽噺「おとぎばなし」を語る様に、空木は続ける。

「男は民を従え、とある国に真つ向から立ち向かい…そして国諸共滅びた。ほんの、数十年前の話だ」

???『ほんの、数十年前の話です』???

既視感。一瞬目の前に遠い日の記憶が過って、佐波は瞬いた。

知っている。その話を。

あれは確か、まだ佐波が貴族の子女であつた頃。

東から訪れた異国の吟遊詩人が唄う、悲しい物語に耳を澄ませていた佐波に、以織が囁いたのだ。

『皇国「このくに」の者は知らないのです。…いえ、知らされないのでしょう。小さな国の存亡など、気にかける程のことではない。我が国こそ唯一の中央国家なりと、誰しもが教わって育つのですから』

佐波より3つだけ年上の少年は、けれどその年齢より遥かに博識だ

った。

貴族子女としての最低限の教育しか施されなかった佐波は、空いた時間を以織と過ごし、多くを学んだ。

その事に対して、今の今まで何も疑問に思わなかったのだが???

???でも、じゃあ以織は、どうやってそれらを学んだのだろう…?

空木が軽くため息をついて、佐波の逸れかけた思考が再び引き戻される。

途端に押さえ込んでいた身体の怠さや鈍痛が鮮烈にこみ上げて、吐き気がした。

どうやらそろそろ限界らしい。思考も記憶も時間軸を彷徨い、余計なことばかりに気が削がれる。

自分でも自分の身体の状態がまだ把握出来ていないことに強い不安を覚えながら、佐波は氣力を振り絞り、男を見上げた。

視線が交わった瞬間、空木は目を細め、ふと肩から力を抜くと「…厄介なことに」と呆れたように言葉を続ける。

「お前らのような人種は絶望の中でこそ強く輝く。暗澹「あんたん」たる海原を渡る舟の松明が、火の粉を振りまきながら燃え上がるようにな。それはお前らにとっても、光に焦がれて火に飛び込む奴らにも不幸なことだ」

まるで一つの時代の終焉を見て来たかのような確固たる口振りで男は言い、そして冷たくも真摯な視線で佐波を見ると、噛み締めるように、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「死にたくなければ——」死なせたくなければ、お前は、己をよく自覚し、自制するべきだ」

24（後書き）

*『道中突き出し』：花魁道中。姉女郎に付き添われて馴染みの店に挨拶に回ったり、馴染みの客に挨拶をして回る遊郭デビューのこ
と。

空木が一人でSを発揮していますが、佐波はサツキとは違うので若干やり難そう。

「まあ、空木「うつぎ」様！　こちらへは明日来られるとのお話でしたのに…」

唐突に、部屋の中に女の声が響いた。

佐波のみならず、空木も一瞬その身に緊張を纏わせたのを感じて、女の気配に気付かなかったのは自分だけではなかったのだ佐波は少し安堵した。

空木が振り返る。

途端に開いた視界の隙間から、見覚えのある女性が、部屋の扉を開けて入って来ているのが見えた。

??? 早音「はやね」、様…

確か、最初の火事後、怪我をして運ばれた館で世話になった女性だ。

柔らかく穏やかな曲線を描く、女性的な身体。

目映い華はなくとも、凜と咲く花のような美しい貌に、艶やかに長い黒髪を後ろで花の簪で留めている。

彼女は手に器と小さな火種の載った盆を持ち、空木にちらりと視線をやり、次いで事の成り行きに強ばった表情のままの佐波に目をやると、ハツとした様子で目を見開く。

「まあ佐波様、お目覚めなんですか！？　まあまあ空木様、何をしていたらつしゃったのです！　直ぐに知らせて下さなければ困ります！」

「仕事のついでに様子を見に来たら、偶々起きていたんだ。…その

「お前が叩き起こしたんだろう」って目で見るのは止めてくれないか」

口調に明らかな不満を漂わせて責める早音に、空木が彼にしては珍しく、至極苦々しく呟いた。

先ほど佐波をいたぶっていた彼とは随分異なる態度に、佐波は思わず空木を見上げる。

その視線から逃れるように、空木が緩慢に動いた。

「俺は今から仕事なんで失礼するよ」

「あら、本日はどちらへ？」

「ここだ。だからついだと云っただろう。今日は”お得意様”が来るんでね」

彼は着物の襟を軽く手で直し、来た時と同様にそれとない動作で立ち上がると、ばやくように呟いた。

「湊楼庵が焼失して以来、あちらの常連が各軒に分散したものだから、回り番の仕事が増えて困ってるんだ。湊楼庵の常連は問題ありの高官や”御忍”^{おしのび}ばかりだからな」

「おしのび…？」

思わず内心の疑問が口について出た佐波に、空木がちらりと視線を向け、皮肉気に小さく笑う。

「高貴な方々の秘密のお遊びさ。湊楼庵が皇府公認の遊郭であるワケが、其れだ」

粹に遊んで帰ってくれる上客ならいいんだがな…、と小さく言って早音の横を通り、通常の半分程の小さな扉を開けると、最後に佐波

に振り返った。

「じっくり養生することだ。少なくとも、今は、な」

言外に”治ったら覚えておけよ”とでも言わんばかりの言葉を残して、男はあつという間に去った。

引き際が大変に潔いのは分かったが???それにしても…

あの不遜そうな男が、早音の登場時に発した緊張になんとなく違和感を覚えながら、佐波はどうにか身体を起こそうと身を振った。

「あ、つつ」

身体の其処彼処に走る激痛につい声を上げると、男が去った扉を見つめていた早音が慌てた様子で佐波の側???数歩の距離だが???に駆け寄る。

「佐波様、動いてはなりませんわ。まだ傷が塞がっていないのです。今痛み止めをお持ちしたところだったのですよ」

言うなり、持って来たお盆を引き寄せ、器を両手で大事そうに持った。

???ああ、どうりで…

意識は割とハッキリしてきているが、それと同等に体中が鈍く痛い。

???薬が、切れたのか…

佐波が使用人の頃に使っていた痛み止めとは比にならない程良く利

く薬なのだろう。

眠気に包まれるようにして、痛みも感じずに休む事が出来るなんて一体自分の治療にどれほどの金銭が掛けられているのか、と考えて痛みとは別の意味で顔を顰めた佐波に、早音が急須の薬を飲むように促す。

「さあ、佐波様。もう少しお休み下さい。??ああ、でも…その前に佐波様に、私「わたくし」の謝罪を受けて頂きたいのです」

彼女の言葉に、佐波はこの世のものとは思えない舌が壊死しそうな苦さの薬を苦心して飲み込み、体温の上昇で熱くなつた息を吐きながら小さく首を傾げる。

早音はそんな佐波の汗で張り付いた額の髪をそつと払ってやりながら、悲し気に微笑んだ。

「あの日???清州様が、臥龍城に訪れた日のことです。最様はお留守でしたが、私は用あつて臥龍城に残っていたのです。でも…」

長い睫毛が伏せられる。

「瀕死の佐波様を、お助けすることが出来なかった。清州様が去つた後も、…覚えていらつしやらないかもしれませんが、私がこうやつて佐波様にお会いするのは、あの日から今日で二度目なのですよ」

???そう、なのか…

そういえば、清州が現れる直前に早音の声を聞いた気がする。

より鮮明に蘇り始めた記憶を遮るように、早音はそつと頭を下げた。

ぎよつとして慌てて彼女の動きを止めようとしたが、激痛に阻まれ

る。

そうこうしている間に、彼女はまるで佐波を主人とする使用人のように、平伏して言った。

「本当に…申し訳ないことです。貴女様をお守りするようにと、御総主様から託かっていた身にも関わらず、私は何も出来なかった…。どうぞ佐波様の采配で、私を罰して下さいませ」

「は、は、早音様っ！？ 何を？？？」

「私は」

早音が視線を上げる。灯り油がじじ…と燃え、彼女の秀麗な顔を映した。

どきり、とした佐波の心を見透かすように、瞳の奥を覗き込むようにして早音は言う。

「私は、その為に今在「あ」なのです」

？？？それは、一体…

どういう意味だ、と考えたところで、視界が思考ごと歪んだ。

ああまたこの展開か、と咄嗟に思うものの、いつ何処でだったか思い出すことも出来ない。

ただ強力な睡魔に身体半分引きずられるようにして意識ごと持っていかれそうになるのを、寸でのところで耐えている佐波に、そっと早音の囁きが落ちた。

「お気をつけなさいませ。回り番は味方ではありません。私どもとは相容れぬ存在。？？？貴女様を、あの者達の好きにはさせませんわ」

???私、ども…とは…

意識が遠のく。闇が口を広げ、佐波を呑み込む寸前。
建物の何処から、場違いに明るい笑い声が聞こえた気がした。

*

『以織は、なんでも知ってるね』

夢の中で、佐波はかつての記憶を辿っていた。

まだ佐波の世界が手の平程の小ささしかなく、陽に翳す硝子玉のよう
にキラキラと輝いていた日々。

何も知らないことの幸せをそれと知らずに享受していたあの頃を、
そっと指で辿るように、佐波はその光景を見ていた。

佐波の言葉に、以織は開いていた書物を閉じて振り向いく。
照れた様にはにかむ表情。白磁の頬をほんのり染めて、彼は少し俯いた。

『…そんなことはありません。私は、聞き齧っただけの浅い知識しか持っていない。姫様の方が、余程深く物事の真理を知ろうとするお力があります』

『それこそ考え過ぎだと思ふな。私の師は、以織なんだから』

二人がいる部屋は、使用人すら存在を忘れている小さな物置だ。
不義の子とはいえ、さすがに使用人が貴族家子女の部屋に立ち入る事は許されない。

だから二人は協力して家や庭のあちこちを探り、より人気のない場所を探し出していた。

物置は以織の手によって、狭いながらも快適に整えられている。

高い天窓からは明るい日差しが落ち、床に広げた古い敷物の上に、

二人は楽な姿勢で腰掛けて様々な話をした。

中でも以織が語ってくれる皇国の歴史や、遠い地にあるという異国の物語を聞くのが、佐波は好きだった。

佐波の言葉に、以織は驚いたように目を瞬かせ、次いで微笑む。

『姫様には、私よりも博識の師をつけて差し上げたい。貴女様なら、きつとより高みを目指す事が出来る』

『高み？』

『…世の中には、知識だけの人間は星の数ほどいるのです。ですがそれは表面だけのこと。知識と知恵は別物なのです、姫様』

以織は、穏やかに微笑んだまま、両手を広げて佐波を見た。

その意図に気付いて、佐波はぱつと表情を輝かせると、躊躇う事なくその胸に飛び込んだ。

以織は佐波の背中を包むように柔らかく抱きしめて、その耳に囁く。
『姫様は賢い。ただ賢いだけではなく、己の意志を貫く強さがある。それは、とても素晴らしいことなのです。私は、貴女様のお手伝い出来る事が何より嬉しい。…私にも何かを成し得る力があるのだと、教えて下さったのは姫様です』

服越しに互いの熱が伝わる。

幼い頃から両親はもちろん、兄弟姉妹、使用人に至るまで全員に”無いもの”として扱われてきた佐波は、以織に会うまで誰かに抱きしめられたこともなかった。

凍った氷が春に水に戻るように、ゆつくりと時間をかけて育んだ信頼が二人の間にはある。

そのことが佐波の孤独な生活の唯一の救いだった。
???恐らくそれは、以織にとっても。

『…以織は、優しいね』

佐波はぼつりと呟く。

その声は何かに憧れているようでもある???何かを諦めているようでもある。

『私は以織に…何なら想いを返せるかな…?』

『…もう十分、頂いていますよ』

ぎゅつと背中に腕を回して、以織は佐波の髪に頬を寄せた。

『もう十分、…十分です。???これ以上は、溢「あふ」れてしま

う

最初にこうやって抱きしめ合ったのは、いつだっただろう。

いつの間にか、お互いの身分などどうでもいいくらいに、互いを必要としていた。

以織の心音を耳に聴きながら、佐波は目を閉じる。

???どうしてか、とても寂しかった。

こんなに側にいても、まるで独りきりであるようで。

多分、それが。

???時機「じき」に訪れる、別れの予感。

*

???カタ、と物音がした。

夢と現の境を彷徨っていた意識が、急速に浮かび上がる。

名残惜しい気持ちを残しながら薄らと目を開けた佐波は、目前に広がる闇と天窓から零れる一条の光に瞬いた。

????夢…

指の隙間から零れていく砂を掴もうとするも、直ぐに手の平の砂ごと風流されて消えてしまう。

掴み損ねた夢の切れ端についていつまでも考えていたい気持ちに駆られながら、佐波は目を覚まさせた元凶の存在を思い出して小さく眉をひそめる。

????今、何か音が…

カタカタ、と更に音が鳴った。????天井からだ。

ぎょつとして身を固め、無意識に身体を動かそうとしてまたもや激痛に阻まれる。

いい加減学習した方が良く…と自分で自分にガツカリしつつ、内心焦りで一杯だ。

????鼠…じゃない。この気配は…もしかしたら……多分……いや……恐らく……人間。

その考えを肯定するように、ぎし、ぎし、と天井板を踏みしめる音までしてくる。

こうなれば間違いない。音からして成人の????恐らく男のものだ。

????いいいい今、丸腰…っ

どころか全身創痕で動く事すら俟たない佐波は、薬のお陰の眠気など吹っ飛んだ頭で必死に”可能性”を探った。

???ここはどこかの遊郭の軒だと、あの男性…空木が言っていた。ならば、客とか…?

いやいや、建物の構造は分からないが、多分この部屋は踏めば音が鳴る様な、そんな薄い板一枚では出来てしまい。

まるで拷問部屋のように四方は堅い木材に囲まれているのだ。

音だって、遊郭の中のどこかという割にはそこまで響いてこない。

だからこの音は間違いなく、”この部屋”の天井を踏んでいるわけだ…

???そういえば…空木が私を『囚』に使うと…

辿り着いた発想にさあつと青くなるが、少し考えて、その可能性はなかったのだと気付いた。

自分が誘拐 このけん に関係ないことは、自分が一番知っている。本当に何も知らない佐波を追って処分しようとする程、犯人等も暇ではないだろう。

???だけど…

自分が何かしらの大きな事件に巻き込まれていることには違いない。それに、よく考えれば誰かに恨まれている覚えが…大変…ある。

そういえばここに来ることになった理由が、皇府の高官???清州に正面から噛み付いた結果だったな、と今更になって思い出し、佐波は出来る事なら頭を抱えなくなった。

あの高官がどのような人間かは、この怪我が物語っている。もしかしたら、佐波一人確実に殺す為に刺客を差し出したり…いや、でも空木は私が死んだ事になっていると…

悶々と考えている間にも足音は、恐らくそろりそろりと???下ではぎぎ、と聞こえて来るが???動き回り、やがて何かを見つけたのか、ピタリとその音が止まると????

ガタツ　ガタガタツ

「???つ!」

戸板が外れる音。

暗闇の端で一瞬、闇とは別の何かが動き、

???それは穴から這い出るように部屋の中に入り込み????

思い切り、佐波の足の上に着地した。

「いいっ!」

「わっ　莫迦者!」

痛い!と上げそうになった声に、何かが???恐らく男の手の平が???凄いい勢いで口を塞いでくる。

その間も体中に悪寒のように走り回る激痛から悶える佐波に、降り落ちて来た”誰か”は慌てたように布団越しに佐波を跨ぎ、何かを懷から取り出した。

痛みにガンガン後頭部を殴られながらも視界の端にそれを捕らえた佐波は、一瞬刃物かと身を震わせ…

カカンッ

聞き慣れた音と、嗅ぎ慣れた火薬の匂い。

そしてシュワツと何かが燃え上がる光が本当に目前に見えて、反射

的に目を閉じた。

「…っ！」

「…お前???」

知らない男の声が落ちてくる。

その声の意外な若さに、佐波は恐る恐る目を開け、そして燃え上がる簡易発火器の灯りに薄く照らされた男の顔を見た。

この薄暗さの中でも分かる、端正な顔立。黒い髪は後ろで高く、一つに結われている。

男??? 否、恐らく少年から青年への変わりかけであろう若さのは『彼』は、整った顔で強く佐波を睨みつけながら、用心深く言い放った。

「お前、ここで何をしている」

未だに残る身体の痛みに歯を食いしばりながら、佐波は「それは私の台詞では」と至極まともなことを思った。

25 (後書き)

本当に降ってわいた新キャラ。

「答えろ、何をしている」

注意深く問いかけて、彼——恐らく佐波とそう歳の変わらない少年——は佐波に乗り上がったまま、四方に簡易発火器を向け、辺りをざっと見回した。

灯りが揺れて、狭い四畳の部屋を照らす。

少年の視線に隙はなく、緊張に包まれている……のだが、足下を確認して飛び降りなかったところを見ると、案外と抜けているのかもしれない。

——それは「答えろ」と問い質しながら、未だに佐波の口を抑える手を退けないところからも垣間見える。

佐波が痛みやら何やらと戦ってもごもごしている、ようやく少年は気付いたのか、ぱつとその手を佐波の口から外し、きまり悪気にはだがその鋭い眼光を緩めずに言った。

「……おい、ここで何をしていると聞いている」

「……と、とりあえずど、退いて、く、ぐえ……ええ!」

下さい、と懇願しようとしたと同時に男の空いた手が痛めている左肩を押した。

悲鳴も途切れる激痛に全身を強ばらせた佐波に、少年は火に触ったような機敏さで佐波の肩から手を退かす。

そして尚も齒を食いしばり呻く佐波に、少年はようやく自分が乗り

上げているのが病床の人間だと気付き、慌てて距離を取った。

「お、お前…な、なんだ？ その、怪我は——」

吃りながら、少年は恐る恐る簡易発火器の炎を佐波に向けた。

少年の目には恐らく、頬に大きな湿布を貼り、額を隠すように包帯を巻かれた佐波が脂汗を流しながら苦しんでいる姿が映っていることだろう。

事実佐波はこの上なく苦しんでいた。

痛い痛いとは思っていたが、実際触れられると想像以上の激痛だ。側の全く見知らぬ少年——しかも天井から降って来た挙げ句に痛みの原因ともなった不審者を気に掛ける余裕もなく、うんうんと唸り痛みを紛らわせようとする佐波に、彼は恐る恐る近づくと、じつとその顔を覗き込んだ。

「…お前、その怪我はどうした。随分、手酷くやられているな…。
…い、痛む、のか？」

酷くごちなく言って、少年は佐波の湿布を貼った頬に手を伸ばした。

が、佐波がビクツと震えると、慌ててその手を引つ込める。

そしてわたわたしながら懷から小さな皿を取り出すと簡易発火器を一旦閉じ、中の油を少々皿に注いで、再び懷に手を入れて懷紙を取り出すと、今度はそれで紙縊「こよ」りを作った。

紙縊りを油に浸して、もう一度簡易発火器を付け、そこから火種を貰うと、慣れた様子で部屋の隅に置く。

一連の流れを手際良くこなした少年がやっと佐波に向き合い直す頃には、佐波の痛みもいくらか緩和されてきていた。

ほの明るくなった部屋で、何度も瞬きながら痛みと明るさに慣れて

来た佐波は、ようやくこちらを見下ろしている少年の姿をまともに見て――瞠目した。

ほの灯りに照らし出される少年は、高級な布地の、上品な衣装に身を包んでいた。

天井裏を這って来た時に幾分か汚れはしているのだろうが、それでも一目で分かる一級品だ。

加えてその容姿は、どこかあどけなさを残す柔らかい美貌。

長い睫毛に縁取られた瞳と、型の良い眉。秀麗な鼻筋に、堅く結ばれた薄紅の唇。

姿だけ見ればまるで御伽噺の皇子のようなこの少年が、何故に遊郭（多分）の天井から、しかも佐波のいる部屋に降り落ちて来たのか、その関連性が全く想像出来ない。

唯一分かることは、恐らく少年が、何処かの貴族の子息か何かであることのみで――

「…………お前」

一瞬痛みも忘れて少年を凝視していた佐波に、その視線を感じ取った少年が、どこか怯えたように言葉を発した。

「お前……………なんでここにいる？　ここは…空き部屋じゃあ……………ない、んだな」

最後は自分を納得させるように呟き、頷く。

確かにどう見ても佐波が先に寝ていたのだから、空き部屋ではない。だが、その言い様に佐波は内心首を傾げつつ、息を整えて声を上げた。

「…あなたは――」

「俺のことは、どうでもいい。質問に答える」

少年が怯えを拭い去った表情で、佐波を睨みつける。

一目見て病床と分かるであろう自分の何に警戒しているのか分からず、佐波はかなり困惑しながらも口を開き、

「私、は……ここで……ええつ……と………よ、養生、して、ます」

随分拙　つたな　い説明をした。

考えてみれば、自分のこの状況を一口に説明出来る言葉など見当たらない。

養生というよりは、事実上の軟禁だろうとは分かっているのだが、それを口にすれば少年が”何故　なにゆえ　”を問ってくるだろうことは容易に想像出来る。

彼が何者かも分からない状況で、己の不安定過ぎる立ち位置をから説明する気概も気力も佐波には無かった。

そんな佐波のあまりにも『見たまま』の説明に、少年は愁眉をしかめたが……やがてふと、気付いたように声を上げた。

「お前………ああ、そうか………その怪我、”仕置き”を受けたのか」

「……？………しお」

「ああ、そうだな、ここは遊郭で………だから………」

少年は一人で頷き、険しかった表情を緩やかに変化させ……戸惑う佐波に、憐れみの視線を向けた。

「遊郭　ここ　では掟を破った者に暴行を加えると聞く。お前も、

そうなのだろう?」

「え…?」

「可哀想にな。…どこの世も、俣ならぬものだ」

勝手に結論を出したらしい少年は、ここに来て初めて薄らと笑みを浮かべ言った。

その笑みは控えめで、どこか自嘲めいている。——皮肉気…といえは分かり易いか。

歳の頃は自分とそう変わらないであろう少年のその影のある笑みに、誤解を解く機会が失われつつあることにも気付かず思わず見入っていた佐波は、次に少年が発した言葉にようやく我に返った。

「夜明けまでにはここを発つ。それまで、場所を借りるぞ」

「はあ……………え、っええ…っ」

「大きな声を上げるな」

掠れた悲鳴を上げた佐波をじろりと睨み、少年は小声で続けた。

「別に、お前に話し相手になれとも、その布団を寄越せとも言わん。お前はそのまま休んでいればいい。俺は俺で、勝手に休む」

言いつつ片膝を立て、自分を守るように身を丸めた少年に、佐波は思いつきり困惑した。

——休めと言われても…

この状態では眠る事は疎か、目を閉じることさえ憚　はばか　られる。

大体こんな夜更けに天井から身も知らぬ貴人が降って来たというのに、どうして平然としていられようか。

せめて少年の身元と、ここに——しかも天井から——突如降ってこなければならなかった事情ぐらいは知っておきたいと思うことは、決して間違いではないはずだ。

——それに…

佐波は意識して耳を澄ませたが、やはり遠くから地鳴りのように響く宴の音しか聴こえてこない。

てつきりこの部屋の側に監視役がいて、中の様子を聞耳立てて伺っているとはかり思っていたのだが…

あれだけ物音をたてたというのに、誰かが部屋の異変に気付いて入って来る様子はない。

ということは、見張りはいないのだろうか…？

——いや、それもおかしな話だ。いくら私が満足に動けぬ身とはいえ、”囿 おとり ” から目を離すとは考え難い。では、この事態に誰も気付いていないのか…？

それもおかしな話だ、と思いつつも、今そのようなことを考えていたところで埒が明かないのも事実。

言い得ない不安を覚えながら、兎に角まずは目先の脅威だ、と意識を無理矢理現状に戻し、佐波は目前の少年を見据えた。

——刺客…とかではなさそう、だけど…

少年が落ち着きなく壁のあちこちに視線を這わせているのをいいことに、じつと目を凝らし、観察する。

——この怯えた様子…むしろ…

「……誰かに、追われている、のですか…？」

もの凄く悩みながらも、沸き上がる疑問と少しの好奇心に勝てず、佐波はおずおずと小声で問った。

「……………」

返って来たのは沈黙。

ぴたりと忙しく室内を見渡していた視線を止め、彼はゆるりと、恐ろしいものを見る様な目で佐波を見返してきた。

何か言いた気に震えたその唇に気付いて、静かに言葉を続ける。

「あの、でしたら……遊郭の治安を守る”回り番”という組織がここに——」

「あいつらなど役に立つものか」

小さく、しかしはつきりとした口調で少年が呟いた。頬に、あの笑みが浮かぶ。

「俺ですら、奴らをどうすることも出来んだ。ましてや、遊郭の番犬など」

く、と苦虫を歯で押しつぶしたような嗤いを零し…重たい息をつく。

「…本当に、息が詰まる」

それは少年が心から現状に苦悩していることを伺わせる、酷く疲れた声だった。

——これ以上深入りしてはいけない。

直感はそう告げているのに、どうしてだか佐波は、この少年の苦悩にほんの少しだけ触れてみたくなった。

戯れに触れていいものではないことは分かっている。だが、この状況下では、逆に触れないでいることの方が難しい。

躊躇いながらも、佐波は声を押し殺して痛む身体をほんの少し少年の方に向けさせ、尋ねた。

「…なぜ、追われているのですか？」

「……………質問されるのは嫌いだ」

が、素気無くぷい、と少年にそっぽを向かれ「おや？」と首を傾げる。

質問されるのは嫌い、という割には、その態度はもつと聞いてくれと言わんばかり…つまり幼い子供が拗ねるような仕草だった。

さて、どうしたものか…と思索して黙り込んだ佐波に、しばらくは無言を決め込んでいた少年も、徐々にちらちらと佐波の様子を伺うような視線を向け——やがて、そっぽを向いたまま、ぽつりと呟いた。

「…痛むのか」

「…え？」

「俺がさっき…」

押さえたところだ、と小声で囁く少年に、佐波はぼかんとした。

そんな佐波に、少年は目を合わせないように床や壁に視線を向けながら、不満そうに言う。

「…俺だって、お前が…怪我をしていると、知らなかったんだ。知っていれば…」

「——知っていれば……？」

「ふ、踏んだり、押したり……しなかった」

何処か恨めし気に、しかし罪悪感の滲んだ声でそう呟かれて、佐波はようやく少年のこの言動の理由に辿り着いた。

内心「ああ……」と納得しつつも、目の前で不貞腐れた様子の少年の姿に、少しだけ意地悪な気持ちもたげる。

思わず微笑みそうになる頬をぐつと堪えて、佐波は真顔を保った。

「……大変、痛かったです」

「……そうか」

「泣き叫びそうになりました」

「……そうか」

「死ぬ程痛かったです」

「……」

少年の表情が歪む。癇癪を起こす一歩手前の子供のような表情だ。身の内に沸き上がる感情を言葉にすることが出来ず戸惑い苛立つその様子に、佐波は己の大人げない意地悪を少しだけ反省した。そして、表情を和らげて言う。

「でも、もうそんなに痛くないですよ」

「……」

「まあ……さすがに吃驚はしましたが……」

「……」

「……あの……」

「…………った……」

「え？」

「悪かったと、言っている！」

何故だか涙目で睨まれながら謝罪されて、佐波は一瞬思考が停止した。

正直、まさかこの貴族然とした少年から謝罪の言葉が飛び出すとは思っていなかったのだ。

落ちぶれはしたが、上級貴族の子女として生を受けた佐波だから、雲を突き抜ける程に高い貴族の気位は良く識しっているつもりでいた。

彼らは家臣は元より、一族の者にすら頭を下げる事は無い。それ以下など、目にも入らない…入れる価値のない存在。

そんな者達に自ら声をかけたり…ましてや謝罪の言葉を口にするなど、一体どれほどの屈辱か。

——心根が直すぐ、なのか…

貴族だけど——貴族だからこそ、世の習いに疎いのだろう。もしかしたら、相当の箱入り息子なのかもしれない。

そしてそれだけではなく、彼本人の性質が生まれもって素直なのだ。そうでなければ、この年齢としでまで貴族社会に在って、斯様かようなまでに無防備でいられるはずもない。

とはいえ、家督を継ぎ、大人になれば——貴族社会に溶け込んでしまえば、きっと彼も今日の日のことを激しく後悔する時がくるだろう。

——その時に、この記憶が故に人格が歪むようなことにならなければ良いのだが…

佐波がぼんやりと感慨に耽っている間に、肩を震わせていた少年はやがて落ち着きを取り戻すと、じわりと顔を上げた。

彼は薄明かりの中でも分かる程に赤くなつた顔を隠すように、俯いたり横を向いたりを繰り返しながら、やがて意を決したように佐波を見た。

そして、

「……追われている、わけではない。…逃げて来たただけだ」

ぼつり、ぼつりと、不服そうに呟く。

「ここへは、家臣の付き合いで…よく連れてこられるのだ。…要は体のいい口実だ。遊びたいのは家臣 あいつら だけで、俺はその隠れ蓑だ。…情けないだろう。主は俺なのに、俺にはあいつらを御すことが出来ない」

——貴族の子息かと思っていたが…もう家督を継いでいるのか…

苦悩が浮かぶその口調に、佐波は少年に対する見解を改めた。

この若さで家督を継いだのであれば、それは苦労しているだろう。大貴族ともなれば、家長一人で家の全てをを把握し、采配を下すことはほぼ不可能だ。

場合によつては古くから仕える家臣の方が熟知している事柄も多い。家の格が上がれば上がる程、家長であろうとも、家臣に無断で資産を動かしたり名義を動かす事は難しいものだ。

主とはいえまだ幼さの残るこの少年が、恐らく永きに渡り家を仕切つて来た家臣達をすぐに従わせるには無理があるのだろう。

——なるほど。それで…

つまり少年は、遊郭で遊びたい家臣に巻き込まれてここに通っているが、色んな柵 しがらみ に辟易してここに逃げてきた、という

ことか。

さすがに……なぜ『この部屋』目掛けて来たのかまでは、想像がつかないのだが……。

佐波がどんな相づちを打つべきか——相づちを必要とされているのかも分らず悩んでいる間にも、少年は苦々しく言葉を続ける。

「家臣 あいつらは、そもそも俺のことなど、主とは認めておらぬのだろ。確かに俺は、元々代を継げるような生まれではない。何事もなければ、俺が家督を継ぐなど、あり得るはずもなかった。だから家臣 あいつらは、いつまでも先代を偲んで、俺を見ようともしない。俺が主上には相応しくない器だから……」

言葉を尖らせ渋面を作っているのに、その目は哀し気だ。

恐らく心の内で育まれた激しい憤りが、それを表に出すことも叶わず、次第に置き場の無い哀しみへと変化していったのだろ。

じわり、じわりと寄せる波が、ささやかに、けれど止とどめる事も出来ずに浜辺を濡らすように。

少年の言葉が、薄明かりの部屋に深く沈み込む。

「解つては、いるのだ。俺が……この身が、不相応な立場にあることくらい……誰に言われずとも、解っている。未だに家臣の助言なくては采配の一つも揮えぬ小物であると、周りに思われていることも……」

そこまで言つて少年はふと言葉を止め、そして表情を強ばらせた。この薄明かりではその顔色までは分からないが、少年が歯を食いしはる勢いで口を閉じ、俯いた姿が見て取れる。

どうしたのだろ、と一瞬思索した佐波は、すぐその理由に気付いた。

——彼は、今しがた呟いた”弱音”を恥じているのだ。

格下の者に対してどのような振る舞いも許された貴族にも、たった一つだけ、下の者に対し『してはならない』行いがある。

それが”弱音”だ。

弱音は即ち弱点だ。日頃より抑圧された下の者は、上の者の弱音を好機と捉え、機を逃すまいと猛烈に引き落としにかかってくる。

そうなければいくら格式に拘ろうと、立場など簡単に裏返されてしまうのもまた、貴族の常識。

気高い彼らにとって、それが何よりの屈辱であるのは間違いない。

——市井に堕ちる事を拒み、命を絶った母のように。

思考の隙間に、一瞬思い出した母の顔。

不思議なことに、その顔は佐波に向けて穏やかに笑っている。

あの日、人買いに名乗りを上げた佐波に「お前はもうこの家の子ではない」と告げた、痩せて生氣のない、暗く光る瞳を持つ顔ではなく。

それはまるで、愛し子を抱き上げる女神のような、慈愛に満ちた笑顔で——

——そうだ、母も、いつかは私に笑いかけてくれたこともあった。

唐突に、佐波はそのことを思い出した。

物心つくかつかないかの、ほんの僅かな間だが、母が他の子と同じくらい、自分に笑顔を向けて、声をかけてくれていた時があった。その頃には、兄弟だって、使用人だって、父ですら優しく接してくれていた……ような気がする。

あの頃のことはとにかく悲しくて、寂しくて、辛くて、今でもすん

なりとは思いきこせないから、この記憶が孤独に苛まれた自分が作り上げた偽りのものであったとしても、不思議はない。
でも、もし記憶が…頭に浮かぶ心象が正しいとすれば…

—??不義の子である自分も、一度は家族に愛されていたことになるのだろうか…

あり得ない、それでも縋り付きたいような想像を巡らせた佐波は、けれど次の瞬間、ざわ、と首筋が疼くような違和感を覚えた。

——…あれ…？

何かがおかしい。

何かが違う。

何かが掛け違っている。

そついう警鐘めいた焦燥が胃の奥からこみ上げてくるのに、頭の中では一向にまとまりを得ない。

佐波は早くなる心音に意識を寄せ、混乱の中から浮き上がってくる疑問を見逃すまいと集中した。

——…そついえば、いつ頃からだっただろう。

佐波の周囲が一変したのは。

父も、母も、兄弟たちも、まるで他を排除しようとするように、冷たい激情の表情を多く見せるようになったのは。

穏やかな日差しが、とたんに真冬の嵐のように変化し、佐波を——

—佐波の家を襲ったのは。

——いつから、だっただろう？——

「…か…」

すっかり己の回想に沈んで、束の間自分の傍らに座る少年のことを忘れていた佐波は、微かに聞こえた音にハッと我に返った。

「何か話せ」

まだ身体半分を回想の中にどっぷり浸らせていた佐波は、押し殺した少年の言葉をあやうく聞き逃しそうになったが、どうにか意識の端に引かかったそれを回収して再生させた結果、思わず「えっ」と叫んだ。

その反応が気に入らなかったのか、少年は秀麗な眉をぴくりと動かし、

「暇だ。実に退屈だ。お前もどうせ寝付けないのだろう。ならば、何か話せ」

急かすように言った。

先ほどの失言を引きずっているのか、言葉の内容はどうであれ、態度だけは立派に理不尽な貴族のそれだった。

佐波は何度か瞬き、状況を整理し、考え、——結局何の考えも浮かばなかったので、とりあえずオドオドと口を開いた。

「な、何を話せば…」

「お前の話でいい」

「私の……？」

「ああ」

早くしろ、と膝を揺らして忙しく言い放つ少年に、佐波はともすれば真つ白になりそうな思考をどうにか繋いで、当たり前障りのない記憶を呼び起こそうとした。

……が、そう簡単に出てくるはずも無い。特に今のような横になった姿勢のままでは意識が常に定まらず、自分でも嫌気がさしているというのに。

それでも、態度の割に意外と辛抱強く佐波の言葉を待つ少年の姿を見てみると、何かを語らねばという焦燥に駆られてしまう。

色々悩み、考え——暫しの沈黙後、なけなしの根性を引っ張り出して、佐波は重たい口を開いた。

「——私は布津の生まれで、12の時からつい先立 さきだてまで、豪族家の使用人として勤めておりました」

「……ふうん。使用人とは、何をするのだ？」

貴族の人間らしく、少年も今まで『使用人』という存在を意識したことなどなかったのだろう。

思ったよりもすんなり話題を呑み込んでくれた少年の、その厭味なく純粋な好奇心で輝く瞳に、佐波は少しだけ緊張を解いた。

「なんでも致します。水汲み、薪割り、掃除、洗濯、炊事、馬舎での馬番、時にはお出かけになる主上に付き従い、御身を守ることもまた仕事です」

「随分と多岐に渡るのだな。お前一人でか？」

「豪族家は広いですし、お使えする一族の方々も多く暮らしておいでですから、さすがに私一人というわけにはいきません。常時数十名の使用人が屋敷に駐在しておりました」

「ほう」

興味を持ってくれたのか、少年は少し身を乗り出すようにして聞く体勢になった。

今まで滅多に自分の話をしてこなかった佐波は、彼のその姿に少々照れながら続ける。

「私は12で其処にお勤めするまで、随分物を知らない…世間ずれた生活をしてきました。だから当初は、本当に周りの者に呆れるやら、馬鹿にされるやらで…。夕餉を頂くまでに、半年もかかってしまいました」

「夕餉を？…どういう意味だ？」

「…『小僧の空皿』という言葉がありますように…その、私の働きが、食事を得るに至らなかったと申しますか…」

「つまり、未熟だったと申すのか」

「…そういうことです」

自分の至らなかつた過去を語るのは、こんなに恥ずかしいことなのか…と奇妙な新鮮さを感じながら、佐波は小声で続けた。

「その間も、仕事は山のようにあるわけでした——お腹も、もちろん空くわけでした……我慢出来なくなつた私はある日、仕事が終わってからこっそり屋敷を抜け出て、食料を調達しに出掛けていたのです」

「調達？…買いに行ったということか？」

「いえ、雇い始めの半人前の使用人に払われる賃金など、無いようなものです。それでも屋根のある部屋で寝泊まりでき、いずれきちんと仕事を覚えればまとまった給金も貰えるようになるのですから、悪い仕事ではありません」

「…そう、か？」

どことなく不思議そうな顔の少年に、佐波は小さく微笑んだ。

「はい。着の身着のまま、転がり込むようにお世話になったお屋敷でしたから、当時私には持ち合わせが一切ありませんでした。だから、背に腹は代えられぬ覚悟で」

「盗みにでも行ったのか？」

「いいえ、山に狩りに向かったのです」

「狩り？」

予想外だったのか、少年が瞠目した。

「はい。…確かに”盗み”が過った時も少なからずありました。時々人里の畑に実る美しい野菜や、のびのび育っている家畜を見てみると、どうにかあれが自分のものになる手だては無いかと真面目に考えたものです。ですが、布津の法令では使用人の盗みには相当厳しいお咎めがあります。下手をすれば、その場で首を打たれてしまいかもしれない。それくらいなら、自分で獲った方が良いと思って…」

無知で浅はかで、今考えれば呑気にも程がある当時の佐波は、空腹を引きずって山に入った。

鳥か小さな獣くらいなら、きっと自分にも捕まえられるだろうと過信したまま。

「それで、何が獲れたんだ？」

「何も獲れませんでした」

「は？」

面立ちを幼くさせるぽかんとした顔で見つめられて、佐波は余計に

気恥ずかしくなった。

「考えれば明白だったのですが、私はそれまで、一度も狩りをしたことがありませんでした。生き物がどこでどうやって暮らしているのか、何が好物で、何が弱点なのか、何処が罫「ねぐら」で、活動範囲はどれほどなのか……何一つ知らなかったのです」

今思い出しても恥ずかしい。

仕事の合間にこっそり、見よう見まねで作った松明を掲げて山に入った佐波は、歩けど歩けど小さな獣一匹すら目にもすることも出来ずに、ただオロオロしながら一夜を過ごした。

夜明け前には、他の使用人達が起き出してくる。それまでに絶対に帰らなければならない。

白々夜が開け始めた山道を、疲労困憊の身体で本当に転がりながら帰ったのが、つい先日のことのようだ。

「結局、その後何度も山に入ったのですが、何も獲れず……ただ疲労と空腹と眠気に翻弄される日々が続きました」

「……上手くはいかないものだな」

貴族の出自である少年にはきつと想像し難かろうと思っていたが、意外にも彼は同情の色をした瞳で頷いている。

共感する能力も高いのだろう。生まれもつての性格の優しさが滲み出るその表情に、佐波はほわりと胸が温かくなるのを感じた。

「はい。どのようなことも、最初は上手くいかないものです。それから一時は、盗みも考えたことがありました。空腹とは恐ろしいもので、明らかに間違った方向であっても、思考や判断をねじ曲げて行動を起こさせてしまう力があるのです。……多分、それが生き物の『生きようとする』本能というものなのでしょう」

今になれば冷静に思い起こせるが、当時は真剣に、ただ飢えていた。夕餉を美味しそうに喰らう他の使用人たちが憎くてたまらず、残飯をあさりに厨房に潜り込み、叩き出されたこともある。

特にその時期、隣州である九土「くど」では大きな飢饉があり、その波は布津にまで押し寄せていた。

人々は命の次に大事な食料を困い、他人に奪われてなるものかと目を光らせていたのだから、佐波に食べ物恵んでくれるような人間もいないのは当然だった。

「…それで、どうしたのだ」

不安そうな顔で問われて、佐波は当時を思い起こしながら情けなく笑った。

「色々考えたのですが、やはり自分で獲ろうと…。ですが、今までのように闇雲に山に入っても駄目なことはわかっていましたから」

考えた。空腹と疲労で凶悪になりそうな思考を、どうにか保たせて、ただ必死に。

そうして暫く、根気づよく考え続けたら、ふと思いついたことがあった。

貴族の子女だった頃、兄弟たちが先回りして隙をつき、網をかけられた事があった。

もちろんそれはただの虐めに他ならないが、もしかしたらあれも”狩り”の一種かもしれない。

そう気付いたらいてもたっても居られず、佐波は仕事の合間をみては、ひたすらに計画を練った。

「限られた時間で、己一人で野生の獣を狩ろうとしても、どうして

も無理があります。ならば、最初から”仕掛け”を作り、それを幾つも山の中に仕掛ければ、私が山に入っていない間であっても或「あるい」は何かが掛かってくれるのではないかと」

「『罨』か」

合点がいったのか、少年が口角をあげて笑った。それにつられて笑いながら、頷く。

「はい。今思えばただそれだけのことです。でも、何も知らなかった私は、己がかつてない大発見をしたように思えて、とても興奮しました」

空いた時間に地面に設計図を描き、山から持って下りた枝で、これも見よう見まねで籠を編んだ。

籠の下に突っ張り棒を置き、さらにその棒の下に餌となるものを置く。餌を獣が引き抜けば、籠が被さる仕組みの罨だ。

獣が撥ね除けられないように、石を詰めた袋をあらかじめ籠に乗せたり、籠の大きさを調整したり、様々な問題を一つ一つ解決していくのは楽しく、日々の辛い労働の糧にもなった。

一番の問題であった餌だが、これは屋敷に大量発生した鼠を充てることにした。

害獣である鼠なら、いくら屋敷のものでも使って差し支えない。

こちらにも小さな罨にかけて獲った鼠を使つて、ようやく山に幾つかの罨を仕掛けるに至った。

「暫くは人間の匂いがついていたのか、罨に何も掛からない日が続きました。正直とても消沈しましたが、それでもこれ以上の手が今思い浮かばない以上、続けるしかないと思って」

罨を作り、山に仕掛け続けた。

すると、暫くして幾つかの罨に獣が近寄った後があることに気付いた。

夢中で罨を改良し、また暫くすると、今度は罨から餌だけが抜き取られてる。

——好機だと思った。

「餌に興味を持ってきているなら、あとは罨を頑丈に、確実にするだけでした。何度も作り直して、そしてそのうちによやく小さな獣が罨に掛かってくれるようになりました」

最初に掛かったのは、茶色い、両掌程の大きさの獣だった。

佐波が見つけたとき、名前も知らないその獣は、罨の籠の中でしきりに啼いていた。

興奮して思わずその場で罨を解体しようとしたが、逃げられてしまう可能性が高いことに気付いて、そのまま背中に担いで急ぎ山から下りた。

「そうか。じゃあ、上手くいったのだな」

安堵したように言う少年に、佐波は申し訳ない気持ちになりながら、小さく首を振った。

「いえ。本当の問題はここからでした」

「問題？まだ何かあるのか」

「はい。…私は急いで屋敷に戻って、人の来ない屋敷裏の河原で、その獣を殺そうと罨から出したのです。獣は、子どものようでした。キュイキュイと啼いて、まるで母親を呼んでいるように健気に暴れていました」

あの温もりを、佐波はきつと忘れない。

手で掴めば、毛皮の下の鼓動がわかった。
自分と同じ、生き物の鼓動が。

「殺そうと力を込めましたが、駄目でした。震えて、手に力が入らなかつたのです。私はその時になってようやく、自分が自分の手で直接生き物を殺したことが一度もなかつたことに気付いて……愕然としました」

今まで誰かが獲ったものを、何も知らずに口に運んでいた。
知識では、それが元は命あるものであつたことを知っている。

けれど、その命あるものにも存在する家族や、死ぬ瞬間に感じるであろう苦痛、恐怖まで想像したことはなかつた。

怖かつたのです、と佐波は小さく呟いた。

「思えば、家畜を屠殺したこともありませんでした。それなのに、どうして安易に『狩ればいい』などと思っていたのか……本当に、自分のことながら呆れてしまします」

「……逃げたのか」

少年がじつとこちらを窺っているのに勿論気付いていたが、佐波はため息を止められなかつた。

「……いいえ」

「……？　じゃあ、殺したのか」

「………いいえ」

もう一度息を吐いて、佐波はぽつぽつと続けた。

「……逃がす事も、殺す事も出来ませんでした。逃がそうかと考えて

も、空腹がそれを拒否するのです。かといって怖じ気づいた心では、殺す事も俛ならず」

二進「にっち」も三進「さっち」もいかなかった。

しかも気付けば空も少しずつ白み始めていて、時間も残されていない。

迷い移ろつ心が時とともに止めどなく肥大し、ついに佐波は河原に踞「うずくま」り、暴れる小さな獣を抱いて泣いた。

己が不甲斐なくて、情けなくて仕方が無かった。

生きようとものがくこの小さな命の前で、生きる為の殺生すら出来ない自分は、比べるまでもなく惨めだった。

27（後書き）

大変永らくお待たせしております…！今年初更新ですがもう2月とか…orz
今週中にもう一話UPします。今見直し中ですのでもちよっとお待ち下され〜！

ちなみに『小僧の空皿』なる言葉は存在しません（汗）
異世界設定だから格言にも気を使います…細かいところは面倒なのとわかり易いようにそのまま使ってしまうが（^ー^；）

「なら、どうしたのだ。飼い馴らしたのか？」

「…確かに貴族や豪族の中には、獣を愛玩する方々もいらつしやいます。…普通食うや食われずの生活をしている平民は、不要な食いの扶持は増やさないものです。…でも正直、その手も考えました。勿論、自分の糧さえない状況では、すぐに無理だと気付きましたが」

「そう、だな…」

何処か残念そうな顔の少年に、佐波は微笑んだ。

「結局、泣いているところを他の使用人に見つかってしまい、事情を察したその使用人が、獣を捌きさばいてくれたのです」

その使用人こそ、今でも良くしてくれている自称・愛妻家の霈ひさめだ。

面倒見の良かった彼は、何事も覚束無きおぼつかない佐波の手際をこっそり助けてくれることも暫しだった。

彼に見事に捌かれた肉を河原の石で焼き、そのまま一気に頬張った。また涙が出た。

美味しかった。とんでもなく美味しく、そして罪深い味がした。

泣きながら食べる佐波に、霈は笑いながら『命つてのは美味いだろう。俺たちの肉も、きっと美味いだろうなあ』と呟いた。

もしかしたら冗談のつもりで言ったのかもしれないその言葉に、けれど佐波は一つ大きなことを悟ったのだ。

「生きる為の殺生は、この世の理です。私たちは命を食べ、その屍の上に生きている。私はどこかで、それは人間だけだと思い込んでいたようなのです。でも、それはあの小さな獣にもいえることだっ

た。昨日食べた獣の身内が、明日私を食べるかもしれない。その獣もまた誰かに食べられ、その誰かも、何かの糧になる。――命は、循環している」

それを知った数年後、佐波は初めて人を殺し、仇を討ちにきたその息子も斬った。

命は循環している。命どころか、血も、肉も、業も、憎しみも、…この世のありとあらゆるものは、人を渡り、時を渡り、巡っている。自分もその歯車の一つ。波に崩れゆく砂の城のように。風に散らされる名もなき花のように、いずれは消えゆくものの一つなのだと、佐波はその時悟ったのだ。

それを拙いながらも説明しようとした佐波に、霈は目を丸くして、次いで破裂したように笑った。

『ガキは、そんな小難しいこと考えてないでまた今晚の食事について考えてりやいいんだよ。俺はもう手え貸さねえからな』

そう言いつつ、次に山に入る時は、彼もこっそりついてきてくれた。仕掛けを褒めてくれて、更に良く獲れるように改良してくれたりまでも。

見た目よりもずっと甲斐甲斐しい霈のお陰で、佐波はその辛い半年を越えられたと言っても過言ではない。

本当に、今に至るまでずっと、彼にはお世話になり続けている。

――…霈さん……無事、だろうか。

ふと過った悪い考えに、佐波の表情に翳りが落ちる。

確か、臥龍城　がりゅうじょう　でサツキから聞いたところによれば、火事の後で3人の死体が河から上がったと。

その一つが、佐波と同じ豪族家の使用人だという話だったはずだ。

あの日。あの火事の晩に遊郭街を訪れたのは、三男坊の来栖　くる

すと、用心棒を含めた使用人数名。

上がった死体が、その中の一人である可能性は極めて高い。――
それが需である可能性も。

考えた途端に、早く此処を出なければという焦燥に駆られて、心臓がどくと脈打った。

それが無理でも、一刻も早く彼らの無事を知りたい。

――そして、今私がどんな騒動に巻き込まれているのか、把握したい。

窪地の霧が晴れるように、久方ぶりに思考に結論を見出す。
次なる目的を見出し、生氣を取り戻しかけていた佐波に、放っておかれていた少年が焦れた声を上げた。

「それで？」

「????え？」

「続くのではないのか？」

「…あ、ああ、いえ、…その」

「なんだ、終わりか？」

ガツカリした声で言われて焦る。

正直、これから先に急展開があるわけでもないが、それでも語り始めたのなら、話を閉じるのもまた語り手の仕事だろう。

佐波は、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「それ以来、私はもう一つ生きるのに大切な技術を得ました」

「肉を捌く以外にか？」

「はい。場合によっては何の効力も発揮しませんが、でもこの世を生き抜く為には必要な力です」

「ほう？」

再び興味を持ったのか、身を乗り出してくる少年に、佐波はにこつと笑った。

「人をお願いする力です」

「……………なんだ、その他力本願な技術は」

至極不本意な顔をする少年に構わず、畳み掛ける。

「正確には、人に助けを求める力、でしょうか。それまで私は、頑なに己の力だけを頼りにしていました。見よう見まねで失敗したり、相手に不満も伝えられずにただ恨めしく思ったりして……………誰かに教えを請うことすらしていなかったのです」

貴族であった頃は、生きていくだけで食事にありつけた。教えを請わずとも、周りが教えてくれた。

冷遇されていた佐波の場合でも、不自由のないようにと以織が気を配ってくれていたおかげで、これといって人に頼む事もせずに、自分の出来る範囲でしか行動してこなかった。

だから全く未知の世界でも、己の力を過信したまま、無茶を通そうとしていたのだ。

その事に気付くまでに、本当に沢山のしなくてもいい失敗を繰り返してきた。

知らないなら、尋ねればいい。教えを請われたら、伝えればいい。自分に足りないものは、そういう対人技術だったのだ。

「確かに、どれほど頭を下げても、素気無くされることもよくありましたが——中には、面倒見の良い者が、仕方ないなりに手を貸してくれたりするものです」

佐波が率先して教えを請うようになってから、貰える仕事が倍増した。

習うより慣れろとはよく言うがまさにその通りで、毎日寝る間も惜しんで働いていると、次第に少しずつ要領を得るようになった。

そしてどうにか手順通りこなせるようになったある日、初めて夕餉を準備されたのだ。

感激のあまり泣きながら夕餉を頼張る佐波に、隣に座っていた使用人が笑いながら自分の皿から食事を分けてくれた。

それにも泣きながら礼を述べ、部屋に帰る前にも別の使用人が小さな乾菓子を手渡してくれて、また泣いた。

命は巡る。

血も、肉も、業も、憎しみも、全てこの世を飾る装飾だ。

辛いことも、悲しいことも、苦しいことも、寂しいことも、どれも避けては通れない。

でも世界は、同じように歓びも、笑顔も、温もりも、優しさも、すべてを包んでひた向きに循環している。

幸せだった。ただ生きている事が。???見知らぬ誰かとも、命で繋がっていることが。

「この世は、己の力だけでは及ばないことばかりです。ともすれば諦めてしまいがちですが……立場を変え、視点を変えてみれば、意外となんでもないことで躓いていたりするものかもしれません」

そう語り、笑顔で少年を見上げた佐波は、思わずその笑みのまま固まった。

少年が顎に手をやり、壁に穴が開けられそうな程の強烈な視線で、佐波をじっと見下ろしていたのだ。

その厳しい視線に、反射的に背中に冷や汗が浮かぶ。

「……ええっと、だから、ですね、その……」

「……面白いな」

慌てて言葉を紡ぎ直そうとした佐波に、ぽつり、と少年が呟く。
そしてその無垢な瞳で佐波を覗き込み、

「お前、遠回しに俺に説教をしたのか」

「っせ、説教であるつもりは……！」

ないが、確かに考えてみれば、これは説教ととられても仕方が無い話だった。

殆ど無意識だったが、先の少年の”弱音”があつたからこそ思い出した記憶であることは間違いない。

雲上の貴族にたかが使用人風情が説教をするなど……どう考えても無礼極まりない振る舞いだ。

あわあわと焦る佐波に、少年は尚も強烈な視線を向け、

「説教だろう？己の力が及ばないならば、周りに助けを求めよ、と」

「い、いえ、そうではなくて、己の力が及ばない場合でも、やり方と考え方次第で道が開けると」

「やっぱり説教ではないか」

「ぐうつ」

駄目だ、言い訳が何一つ思い浮かばない……！

言葉に詰まって口をぱくぱく開閉させる佐波に、少年は暫く厳しい顔で何事かを考えていたが、やがて重々しく口を開いた。

「良くもまあ、下々の分際で……と、言うべきなんだろうが」

ふ、と笑う。それはそれは、花も綻ぶような麗しい顔で。

「よい。己の恥を引き合いに出してまで俺に説教をしようとした人間はかつて無いからな。お前が本気でそれを俺に伝えようとしたことは、確と受け止めよう」

お前は随分と肝が据わっているようだと言き、ぽかんと見上げている佐波に、彼は再び重々しく問った。

「名は」

「へ？」

「お前の名だ」

「さ、佐波と、申します」

よい、と言われたということは、許されたということだろうか……と未だ己の現状を把握しきれていない佐波がオドオドと答えると、少年は首を傾げた。

「どのような字を書く」

「ええと……」

問われるままに口頭で答え様子を伺えば、彼は一つ大きく頷いて、

「佐波か……」

噛み含めるように小さく呟く。

そして、

「佐波。お前、俺の名を知りたいか」

「え、……ええっ？」

「なんだ、知りたくないのか」

「ええっと……おし、教えて、頂けるのですか？」

やはりオドオドと問うと、少年はどこか誇らし気に背筋を伸ばした。

「お前が知りたいというなら、教えてやる。説教の礼だ。ただし、知ったらもう後戻りは出来んぞ」

「ええ……？」

何だかわからないが、どことなく恐ろしい。

出来れば知らずに過ごしたところだが、少年のキラキラ輝く瞳をみるに、この流れで否定することはかなり難しそうだと悟る。

……それに……

今日ここでのことは、夜明けとともに覚める夢のようなものだ。

もうあと数刻もすれば、夜も薄くなる。

朝陽が連れてくるだろう現実世界で、彼と自分を繋ぐものなど何もない。

……だけど、もし目が覚めてもこの不思議な夢を覚えていられるなら……

自分はこの奇妙な出会いを忘れないだろう。

いつか見知らぬ空に、優しい貴族の少年の姿を浮かべて、懐かしがる日もきつと来る。

そう思うと、胸の中で灯りが瞬くような温かさを覚えた。

「……では、教えて頂けますか？」

「いいだろう」

佐波の言葉に、少年は微笑んで背筋を伸ばし、貴族の出自らしい儼かな態度で名乗った。

「夏西王梓劉　かせいおうしりゅう」

「……はは」

その酷く現実味のない響きに、佐波は咄嗟に小さく笑った。

何せ、その名を知らぬ者はこの国には居ないと断言出来る”名”だ。騙　かた　れば即刻死罪は免れぬ雲上の御方の名を、このように、堂々と拝借してみせる人間も相当に珍しいが、だからといってこの少年が、まさか本人であろうはずもない。

だからこれは貴族の少年にからかわれたのか、ただの悪ふざけだろうと軽く受け取って笑ってみせたのだが――

「……………」

「……………」

「……………」

「……………え？」

直ぐにでも双眸を緩め「冗談だ」と返してくることを期待していた佐波の目には、やや視線を落とす、まるで身の丈に合わぬ衣装を恥じているかのように、苦々しく口を結ぶ少年の姿だけが映る。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………っ」

それから更に数秒……それとも、数分刻んだらどうか。

何一つ変わらない少年の様子とは相対して、佐波は自分がつま先から徐々に凍っていくような恐ろしさを覚えて、慌てて己を保とうと一つ大きく喘ぎ、どうにかこの沈黙を埋めようと意味のない言葉を呟く。

「……………あの……………え……………えっと……………」

「……………」

自分でも嫌になるくらい恐ろしく鈍い思考が、それでも何が何でも考えたくなかった『可能性』に向かっていているのをついには無視出来なくなり、佐波は長い思巡の末、現実と向き合うことになった。

「……………こ……………こうて」

「俺は二度は名乗らんぞ」

沈黙を破り、拗ねたような顔でそう言って少年は——皇国現皇帝陛下・夏西王梓劉　かせいおうしりゅう　は膝の上に頬杖をついた。

28（後書き）

少年の正体は身も心も若い皇帝陛下でした。

皇国のトップが現在この話の登場人物の誰よりピュアだなんて…

次回も頑張ります！

——夢は夢でも、これは悪夢の類いだ…

ざあっと体温が急激に下がり、佐波は目眩と吐き気を覚えた。目を閉じてても、視界がチカチカする。吸い込む空気が肺の手前で押し返されるようで、酷く息苦しかった。

それが極度の緊張故だと気付けぬ程に昏迷を極める佐波を置き去り、少年…否、皇帝陛下は、胡座に肘をついきむつりと顔を顰めて、つまらなそうに語り出す。

「一月期（一ヶ月）に一度は、俺の気分転換だとかなんとか言い訳をつけて遊郭　ここに連れてこられるんだ。無論俺だって暇じゃない。即位してもう2年になるが、まだ全ての執務を把握しているとはいえないからな。——だというのに家臣　あいつらは、やれ根を詰めるな、やれ陛下はまだお若いのだからと耳障りのいい言葉並べて、俺から執務を遠ざけようとする」

ふう、と疲れたため息をついて、彼は悔し気に唇を噛んだ。

???2年前…

どことなくその言葉に引っかかりを覚えながらも、佐波は黙って彼の話に耳を傾けた。

「理由はわかっている。家臣　あいつらは、皇帝　おれが無能であって欲しいのだ。自分たちに都合の良い腐政を断行するために

な。可笑しいだろう？ 皇国　このくに　の頂点であるはずの” 皇帝” には、実は何の力も在りはしない。もう何代も前から、皇帝家はただのお飾りだ。実質、今行政を把握し、司っているのは皇帝　おれ　じゃなく宮廷庁の―――」

「おおおお待ち、ください！」

ぎょつとして、佐波は悲鳴のような声を上げた。

身体が軋んで酷く痛んだが、それどころではない。

未だくらくら定まらない視界に、言葉を遮られた皇帝の不機嫌そうな顔が映ったが、このまま黙って聞いているわけには絶対にいかなかった。

「そ、その、そのような重大な話を、私のような、身元も定かでない、行きずりの人間に、軽々しく伝えては、なりません……っ」

この際、彼が本物の皇帝陛下であるかの真偽などどうでもいい。

後にただからかわれていただけたと解つても、それならそれで構わない。むしろそうであつて欲しい。

だが、もし本物だったなら、これは失言を軽く凌駕する大暴露だ。

そんな政界の闇を軽々しく口に出すなど……佐波の立場は元よりだが、彼自身の立場も大変危なくする行為だ。

佐波がそれを息も絶え絶えに訴えると、しかし身も心も若き皇帝陛下は、「はっ」と短く嫌悪の息を吐き、胡座を崩して片膝を立てた。

「なら俺は、誰にならこのような重大な話をしてもいいのだ？」

「そ！……それは」

「俺に自由はない」

戸惑う佐波に構わず、彼はその目を仄暗く光らせる。

「朝も昼も夕も晩も、寝ている間すら、臣下の監視下にある。愚痴を言えば責められ、評論すれば未熟者と影で嗤われる。…弱音など、吐けるはずも無い」

「へ、陛下」

「梓劉 しりゆう だ。——いや、梓星 しせいの方がいいな」

険しい瞳を瞬時に和らげて、小さく微笑む。

「梓星は俺の幼名だ。」梓劉”は即位の時に与えられた名だが、どうにも未だにしっくりこないんだ。そもそも皇帝の名など誰も呼びはしないのに、なぜ新たに付け直す必要があるのか、俺には不思議でならん」

皇帝家の掟など、意味のわからんものばかりだ——と呟いて、彼は冷や汗を流し続けている佐波に視線を合わせた。

「俺のことは梓星と呼べ。そろそろ誰かに名を呼ばれないと、俺は”俺”を忘れそうだ」

「……っ で、」

「『出来ない』などと言うつもりか？」

「ううっ」

「…なら、今ここだけでいい。俺を陛下と呼ぶな。…呼んでくれるな」

それは哀願だった。

重たい闇を背負った暗い瞳に、揺れる灯りが映り込む。

あまりにも痛々しいその姿は——これも無礼極まりないが——憐憫の情を抱かせる悲壮感に包まれていた。

再び沈んだ室内の空気に、佐波はどうにか動く右腕で額を押さえ、目眩を治める為に深く息を吸い込んだ。

「……………どのような字を、書かれるのですか」

もうどうにでもなれ、という気持ちが現れたのか、堅い口調になる
佐波を咎めもせず、若き皇帝陛下——梓星 しせい は蕾が花
開くように、可憐に笑った。

「梓弓に、宙 そら の星だ。父上が直々に下さったのだそうだ。
良い名だろう」

「…はい。美しい御名ですね」

字面を思い浮かべると、美しい光景が現れた。

邪気を払う、清き星。そのような意味でつけられたのだろう。

さすが貴い人々の感性は違う、と納得していると、梓星が思わぬ言
葉を返してきた。

「“佐波”も良い名だ。水辺という意味だろう」

「…っ、ご、ご存知でしたか」

「莫迦にするな。それでも学問は一通り習得したのだ」

少し気分を害したのかむすりとした顔で言う梓星に、佐波は思わず

「ああそうか」と呟きそうになった。

今まで佐波の名からその由来まで瞬時に悟った人間は、以織以外に
いなかった。

そもそも、皇国の下々の民にとって『学問』といえば金勘定や文字
習いくらいなもので、文学や歴史学などは貴族 ひまじん の勉学
と呼ばれ疎まれている。

ちなみに、“佐波”の名が皇国の古典的詩に登場するのだと教えて
くれたのは、これもまた以織だ。

——美しい名ですね。

微笑んでそう言ってくれた以織の姿が一瞬脳裏を掠めて、佐波は目眩とは違う『眩み』を感じた。

「…申し訳ありません。私の周りでは、あまりそういう話をしたことがありませんので…」

眩みを押さえ込んで静かに答えると、今度は梓星の顔に「ああそうか」と言わんばかりの表情が浮かんだ。

「そういえば、市井の臣（庶民）にはあまり教養は普及していないと聞く。数も数えられぬ者が殆どだと…」

「…それは誤りです。確かに先天的なもので数を数えるのが不得手な者もありますが、殆どの民は親から真つ先に”数”を教え込まれます。そうでなければ、貨幣の国では生きていけませんから」

失礼にあたるだろうかと少し悩んだが、我慢出来ずに佐波は控えめに補足することにした。

「文字も同様です。簡単な読み書きでしたら、皆親や兄弟親類、近所の習い事の師から教わります。確かに最低限の教養ではありますが、数や文字に強い者ほど良い職に就けますから、皆忙しい仕事の合間を割いて学んでいます」

なるほどな、と頷く梓星にはもちろん悪気などないのだろう。

だが、先ほどの言は間違いなく他の上級貴族たちから吹き込まれた偏見に他ならない。

——いや、偏見というよりも『壁』だろうか。上下を分かち、優越を抱く為の…

過った暗い感情を隠すように、佐波は努めて穏やかな声を出した。

「ですが、数も文字も生活に関わること以上のものは、逆に疎まれるのです」

「？　なぜだ？」

「必要ないから、でしょうか。生きていく上で必要なものは、ある程度の計算能力と、ある程度の読み書きです。文学を読み解いたり、詩を唱えたり、歴史を学ぶことなど、生活にはほぼ全く関わりのないことですから」

「…まあ、そうだな」

納得したように頷いた梓星だったが、ふと何かを思いついたような、訝し気な表情で佐波を見た。

「ならば、お前は…お前の両親は何処で学んだのだ？」

「え？」

「名をつけたということは、その意味も知つてのことだろう。お前の云う通りなら市井では不必要とされる学問を、お前の両親は学んでいたのではないか？」

「それ、は——」

ぎくりとした。

勿論、それは佐波の両親が貴族であったことの証明だ。

純粹な好奇心以外の何も映さない梓星の目を見つめ返しながら、佐波は観念したようにぽつりと語り出した。

「私は布津の貴族の出自でした。なので両親は二人とも、貴族の教

養を持っていたのです」

「……貴族？」

梓星のあからさまに驚いた顔に、佐波は「…わかってます。その様には見えませんよね」とちよつと遠い目で彼の驚きを肯定した。

「私が12の頃に、家は廃れたのです。金銭的なものが原因だった
そうで…」

「ああ！そうか、だからお前は遊郭に売られたのだな」

「はあ、そうなん……ではないです！うう売られてはないのです！
あああでも売られかけて、だけどそれを以て、ではなく友人が助け
てくれて…っだから私は」

「でも結局逃れられず、遊郭「ここ」で働くことになったのだな…」
「ち、ちが」

違う、と言いかけて、ぽんつと頭に酷く恐ろしい笑みを浮かべた空
木の顔が浮かんだ。

彼は、売れる売れないに関わらず、怪我が治れば佐波を遊郭で働か
せると言っていた気がする。

いや、多分悲しいことに聞き間違いでも思い違いでもなく、確実に
実行されるであろう佐波の未来だ。

イマイチ現実味が無い話だが、少し話しただけでも空木のそれが脅
しではなく本気の其れだつとわかった。

つまりは、梓星の言っていることは的を得ているわけで…

思わず押し黙った佐波に、勝手な妄想を膨らませ始めたのか、梓星
は顔を悲壮感で歪ませた。

「その怪我も折檻されたのだろっな、可哀想に…。遊郭「ここ」で
は厳しい掟があるのだろっ？好いた相手とも添えず、皆若くして死
んでいくのだとも聞いた」

「ああ、ええ、はい……そう……みたいです…」

色々と勘違いをされている様だが、これ以上詮索されるのも大変困る。

かなり疲労が出始めた佐波は、とりあえず話の流れに任せることにした。

そんな佐波の表情を、これまた勝手に解釈したらしい梓星は、同調するように苦々しい声を上げた。

「俺も、どうにも遊郭は性に合わない。ここ1年ほどはほぼ毎月期家臣どもに連れられ来てはいるが、楽しんだことなど一度もないしな」

「…そう、なのですか？」

意外だった。

何せ遊郭「ここ」は、囲われた者には地獄だが、訪れる者には黎明郷のような素晴らしい場所だと聞き及んでいる。

しかも皇帝という最上級の身分を持つ彼には、当然遊郭「ここ」で最上級の待遇が約束されているわけで…

不思議そうな顔の佐波に、梓星は気まず気に視線を逸らした。

「そもそも、何故身も知らぬ相手と肌を合わせなければならんのだ。気味が悪いだろう」

「そ、そうです、ね？」

随分純朴なことを言っただけの皇帝陛下に、佐波は無意識に返答しながらも内心驚きを隠せなかった。

…正直このご時世、年頃の乙女でも家の為家族の為老後の為にと好きでもない相手に嫁いでいくのが常識だ。

勿論梓星の言の方が正論なのだろうが、やはりなんというか…ここ

まで穢れなく育つとは、さすがに究極の箱入りだと感心してしまう。変なところで感心してばかんとしている佐波に、梓星は何故だか居心地悪気に視線を動かし、ほんのりと頬を染めた。

「……それに、俺にも好みというものがある。否応なく寄越されても、どうにも出来ん」

「そ、それは、ええと……」

なんだか退つ引きならない会話に突入しそうな気配を感じて、佐波は慌てて言葉を探した。

「こ、こちらの遊郭街は、皇都随一と伺っています。選りすぐりの美女美男の揃った、浮き世の黎明郷だとも……そのような場所でも、陛下の」

「梓星」

「し、梓星様のお気に召すような遊女は、いらっしやらないのですか……？」

「……遊女？」

佐波のたどたどしい質問に、何故だか梓星は奇妙なところで反応した。

そして、苦々しさも極まった表情で「ああ……いや、」と呟く。

「……そこだ。まず、そこなんだ」

「……？」

「お前も幾つかは知っているだろうが……遊郭　ここに掟があるように、この国にも数々の掟がある」

「はあ……」

突然話題が変わったことに啞然としながら頷く佐波に、梓星は堪りかねたように深いため息をつきながら語り出した。

「その掟で規制されるのは、何も市井の臣や家臣たちだけではない。中には、皇帝「おれ」の行動を制限するものもあるのだ」

「皇帝、陛下を…？」

「ああ。簡単なもので言うと、即位の時には新たに名を得なければならぬ、とかだな。食事も、何人以上に毒味をさせるだとか、謁見の儀の時には必ず冠をするだとか…そういうものだ。一つ一つを行うのはそんなに難しいことではないが、このような決まり事が数百あつてな」

「数百…」

「正直、息苦しいことこの上ない。…まあそれでも、我慢しようと思えば出来るのだ。俺だって生半可な覚悟で即位したワケではない。いつまでも物の分からない童では居られないというのも解っている。

——解つてはいるのだ。頭では…」

げんなりと語る梓星に、その苦勞のほどが窺えた。

何か慰めの言葉でもかけた方がいいのか、と佐波がオロオロしている間にも、彼の顔色はどんどん悪くなる。

「…だがな、頭で解つてても、どうしても生理的に受け付けないものもある。その中でも俺が取り分け苦りきっているのが、『皇帝の渡り』についてだ」

「渡り、ですか…？」

「つまり…子成すことについて、だ」

重苦しいその言葉の意味を察して、佐波はピキッと固まった。その反応にも申すこともなく、梓星は平坦な声で言う。

「『庶子を作るべからず』。……何代か前の皇帝が、それはそれは大層”色”に弱かったらしくてな。貴族豪族、果ては氣に入った遊女まで後宮に百人近く召し抱えていたそうだ。その結果、世継ぎ争いが激化した」

「…あ、——ああ、聞いたことがあります。確か、華栄の悲劇…」
ぎくしゃくしながらも、佐波はどうにか記憶を辿った。

『華栄の悲劇』は割と市井でも知られている、所謂「いわゆる」皇帝家の醜聞だ。

色好きであった皇帝が召し抱えた多くの側室達が、互いに己の子を次期皇帝にすべく企て、生まれた御子を次々に暗殺していったという…恐ろしい話。

その話によると、暗殺された御子の数は、実に100を超えらしい。噂では、葬り去られた側室の数はその倍だとも。

関係のない市井の者たちも震え上がるほどの事件であつたらしいが、ならば当時の後宮に係する者達はどれほどの恐怖を感じていたのか。

その暗黒の歴史は、恐らく皇帝家にも深く癒えない傷を与えたのだ。

梓星は、力無く頷いた。

「…あれはそう呼ばれているらしいな。悲劇というより、惨劇だが…。その件までは皇帝にも側室を選ぶ権限があつたらしいのだが、それ以来、後宮には厳しい制限が付き、皇帝の渡りについても厳しい掟が生まれた」

「…『庶子を作るべからず』…」

「そうだ。正確には、子を成す行為も必ず臣下の立ち会いの元で行うこと。正室は元より、側室も全て臣下の采配に従うこと。市井の者との間に、庶子を作らぬこと、だ。???だから俺は、今日もこ

ここに連れてこられたのだ」

「……え？……ええっ？そ、それはどういう……」

急に話が飛躍して、疑問を表情一杯に浮かべる佐波に、梓星は焦れ
ったそうに言った。

「だから、俺は遊女とは交われんだ」

「へ？？？え？」

「この軒は男娼遊郭楼だろう。俺は男色じゃない。どうやったって、
男は抱けん！」

これまでの憤りが一気に噴出したのか、梓星は声を張り上げた。

29（後書き）

勢いで書き上げたのでどうしようなにかたいへんなみすをしていた
ら（――；）

陛下と佐波の修学旅行の夜の会話（違）はもうちょい続きます

若き皇帝陛下???梓星　しせい　のあまりにも悲壮な叫びに、佐波も衝撃を受けた。

???こ、ここは『男娼遊郭楼』だったのか…！

佐波が尋ねた時、空木はここを「溟楼庵の姉妹楼の一軒」と言った。だからてつきり、自分は遊郭街の何処かの『遊女楼』の空き部屋にいるのだろうと思い込んでいたのだが、でも確かに溟楼庵では遊女・男娼の両方を置いている。男娼楼が姉妹楼でも間違いはないのだろう。

空木がそれを敢えて教えなかったのかどうかは…少々邪推してしまふところだが。

脳裏でにやりと笑う痩せた若い男の面影を必死に端に押しやって、佐波は思考を切り替えた。

——…なるほど。それで陛下がこの男娼楼の何処から『逃げて』こられた凡　おおよ　その理由はわかった。

もう一つ、なぜ歴代の皇帝たちが、多少の不自由を圧してまでも遊郭に通っていたのか…その理由も。

恐らく、『華栄の悲劇』の後、郭関係者の皇宮への出入りも禁止となったのだろう。

あの惨劇の影には、大量の遊女を皇帝に売り込んだ遊郭主たちの思惑も大いに関係していると聞く。

再び悲劇を繰り返さぬ為にと定められた新しい掟は、以来遊女との交わりを禁じ、郭関係者の登城も堅く禁じたが、しかし皇帝が遊郭に通うことは許した。…否、許さざるを得なかったのではないか。義務で凝り固められた皇帝という生は、きつと市井の民が思っよりもずつと不自由なものだ。

飢える事も、身分に泣く事も、格差により暴力に震えることもない。しかしだからといって、幸福とも限らない。

その境遇は丁度、『籠の鳥』に喩えられる遊郭に囲われた美しい娼婦たちと重なる。

彼女たちと逢い、語らい、身体を重ねる事は、きつと皇帝という孤高の殿上人にとって何よりの癒しであり、唯一寛げる時間。それを取り上げる事は、家臣たちにも到底出来はしなかった。

だからといって遊女を抱かせることも出来ず…。その煩悶の中から生まれた掟は、皇帝に男娼を宛てがう事で歪にも収めることと相成ったわけだ。

——その気遣いが逆に、この若き皇帝陛下を苦しめているという、なんと本末転倒な現象を起こしてはいるのだが…

同情とも感心ともとれる奇妙な表情で頷く佐波に、梓星はここぞとばかりに言葉を重ねる。

「家臣 あいつらは、俺をダシに遊郭に通いつめているんだ。皇帝の御付きといえば体裁も良いからな。しかも遊郭への支払いは国庫で、時間外の公務手当も付く。信じられるか？あいつらからすればこれも『公務』なのだ。莫迦らしい。何が公務であるものか！あいつらが従うべきはずの皇帝 おれ は執務を邪魔されて、あげく望んでもいない男娼を宛てがわれるんだぞ！」

「お、お声が…」

大きいのでは、と焦って注意する間もなく、憤りも露あらわに据わった暗い目で佐波を見据えた梓星は「想像してみろ」と低く呟いた。

「一晩中。一晩中だ。皇帝 おれ に気に入られようとあれやこれやと手を尽くす男娼の前に、横になることも叶わず、部屋の間で身を堅くして過ごす気まずさといったら、相当なものだぞ」

あまりの剣幕に押されながらも、佐波は素直にその姿を想像した。この、花の顔 かんばせ のような麗しい皇帝が、一晩中部屋の片隅で両膝を抱えて硬直している姿を。

「……」

確かに、不憫だ。不憫を通り越して、なんだか愛らしささえ感じる。思わず緩みそうになった頬を引き締めて、佐波は精一杯沈痛な声で言った。

「それは…お気の毒です」

「そうであろう！？しかもこれが、かれこれ一陽期（一年間）以上も続いているんだぞ！？俺の我慢にも限度がある！」

同調されたことが嬉しかったのか勢いを増す梓星に、佐波は「はあ」と力無く相槌を打ち、ふと浮かんだ疑問を素直に口にした。

「あの…例えば、宛てがわれた男娼を下げてもらうことは…」

「もちろん、出来る。直ぐに次の男娼が宛てがわれるだけだがな…」

「」

「さ、左様ですか…」

麗しい顔から地を這うような声が発せられて、さすがに愛らしいな
どと思っている場合ではなさそうだと気付く。

本気の悩みには、本気で向き合わねば不誠実というものだ。

佐波は悶々と暗い気を降り撒く皇帝陛下から目を逸らせ、天井を見
上げながら唸った。

「…遊郭側が男娼を推してくるのも必須。御家臣様らが男娼を奨め
るのもまた必須…。男娼を下がらせても次が来て…：ならば、話の
分かる男娼に口裏を合わせてもらう以外には、他に方法がないよう
な…」

「その通りだ！」

その大声に思わずビクツとなった佐波に構わず、梓星は至極真面目
な顔で、

「だから俺は、取引をした」

「えっ？ ど、どなたと…」

「この遊郭樓の或る男娼とだ。二月期（二ヶ月）ほど前に宛てがわ
れた男娼だがな、この者が中々に聞き分けが良い。他の者たちが何
をどう断ろうと隙あれば褥に引きずり込もうとするとところを、この
者だけは、俺の機嫌を取りはするが、特別手を出してはこなかった。
…それで今日は、その者を指名したのだ」

苦々しいその表情から、それがどれほど家臣達を喜ばせる結果にな
ったかありありと窺える。

彼にとってみればそれも苦肉の策だったのだろう。二度目、今日も
また何もありはしないという確信は無いのだから。

徐々に見えてきたこれまでの経緯に、佐波は「それで」と先を促し

た。

「その男娼と、どのような取引を？」

「…ああ。部屋に入つてな、その者に言ったのだ。「今日も俺に触れず、何もせずに一晩過ごさせよ」と」

「…率直ですね」

「遊郭の者にこれくらいの”率直”で効くものか。はぐらかされて終いだ。お前もよく知っているだろう」

「え？あ、えっと、そ、それで？」

慌てて促すと、梓星は苦い表情で続けた。

「男は了承した。だがな、了承する代わりに、条件を出してきた」
「条件？」

佐波は眉を寄せた。

皇帝陛下と、まるで対等であるかのように振る舞うとは…中々に度胸の据わった男娼だ。

「条件というと…金銭的なもの、でしょうか？」

他に思いつかずにそう言うと、彼は首を横に振った。

「いや。もっと面倒で…気の毒なものだ」

「き、気の毒、ですか？」

意外な単語にきよんとする佐波に、梓星も非常に苦りきった顔で言った。

「ああ…気の毒だ。…その男娼にとってはな、俺は全く好みの容姿

でないらしい」

「へ？」

更に思わぬ言葉に目を丸くする。

皇帝陛下と知って尚「好みでない」と断言するなど、いくら梓星にその気が無いとはいえ、その男娼は度胸と無謀をはき違えているように思うのだが…

いや、それよりも梓星はどこからどう見ても遊郭の者に勝るとも劣らない麗しい容姿。

今は幼さが勝ってやや少女のようにも見受けられるが、あと1、2年もすればそれは美しい美青年になること請け合いだ。

本人には甚だ迷惑だろうが、隙あらばと狙う他の男娼達の気持ちも分からなくもない。

——そんな彼が好みでないというなら——

佐波がその具体例を思いつく前に、梓星の暗い言葉が落ちてきた。

「もつと男らしく逞しい、筋骨隆々の男——詰まる所、俺の警護をしている特別に鍛え上げられた兵士たちの方が”そそる”そうだから」

「…まさか、き、気の毒というのは…っ」

そこまで聞けば、さすがに想像がつく。

思わずごくりと唾を飲めば、弱り切った形相の梓星も、言葉を紡ぐ為に喉を鳴らした。

「そうだ。一人、犠牲にしてきた。大変不本意だが、皇帝陛下の権限をこんな仕様も無いことで行使して、な」

「……………」

恐ろしい話を聞いてしまった。

正直、話を促してしまったことを今かなり後悔している。

いつそ心を無にして聞かなかったことにしてしまおう…と遠い目で天井を見上げる佐波に、きっと佐波よりもよっぽど深く思い悩んでいるであろう皇帝陛下は、その心根がよく現れる沈んだ声で続けた。

「…常に屈強で無表情な兵士の、あんな悲壮な”皇帝への誓い”は初めて見た。まさかこんなこと、自分から口外してまわるはずもないが…一応釘は差しておいたから、家臣たちにバレることはないだろう」

「……………」

言葉が紡がないでいる佐波。そんな佐波を同じくどこか遠い目で見ながら、梓星は尚も続ける。

「この部屋を『空き部屋』だと俺に教えたのも、その男娼だ。まさか部屋まで変えたらさすがに家臣に怪しまれるからな。それに俺のいる前で”行われても”大変困る…”ということ、教えられた通りに部屋の床から、遊郭の者しか知らないという中間階を渡り、この部屋の天井裏まで辿り着いたというわけだ。まあ、辿り着いたここは空き部屋ではなかったが…」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」何か言え…！」

沈黙が呼ぶ罪悪感に堪えられなくなったらしい梓星がガックリと肩を落として嘆く。

だがそんな彼を前にしても、佐波の頭の中は可哀想な兵士へのお悔やみで大変混雑していて、とても言葉を発せられる状態ではなかった。

確かに、なぜ皇帝陛下ともあろう御方がこんな夜更けに天井から降ってきたのか、その理由と経緯はよく分かったが……

???…なんて後味の悪い……

最初から訳ありだとは思っていたが、まさか己の貞操を守る為に部下を犠牲にするという業まで背負っていたとは…道理で部屋に入ってきた時から深刻に思い悩んだ顔をしていたわけだ。

…まあ、部下を斬り殺しても平然としている為政者など沢山いるわけだから、彼のこの反省具合はある意味好感が持てるといえなくもない。…さすがに擁護する気にも、どうしてもなれないのだけど…。

怪我や薬の所為だけとは思えない顛　こめ　かみの鈍痛を右手で揉みながら、佐波は無意識に唸っていた。

「…陛下」

「うつつ」

佐波が低く敬称で呼ぶと、梓星はそれを咎めることなくただ小さく呻いた。

声が低くなったのは、ただ何を言えいいかと思いがぐねているだけで、別段怒っているわけではないのだが（そもそも佐波に怒る権利などあるはずもない）梓星はどういうわけか、この明らかに格下の使用人風情に怒られると思っっているようだ。

身を固めて、心なしか涙目で俯く仕草の梓星を唾然と見上げながら、もしかしたら彼は叱って貰いたいのかも知れないと思に至る。

邪気を払う、清き星。その名の通り清廉な少年だ。

他人を思いやる賢さもあれば、相手の痛みを自分のものと感じる共感能力にも長ける。

そんな彼が、己の行いの非道さに気付かないわけがない。

それでもどうしても逃れたかった。誰かに押し付けてでも。それほどまでに、切羽詰まっていたのだ。

目の前で身を縮めて震えているこの国の若き最高権力者の痛ましい境遇を想って、佐波は、小さな吐息と共に呟いた。

「お辛かったですね」

優しい彼には、どの選択もきつと辛かったに違いない。

ここに来るまでの間も、来てからの間も、ずっと『逃げてきた』己を責め続けてきた。

だからこそ今、誰かに断罪して欲しくなったのだろう。佐波のような身元も確かではない格下の身分の者でも構わない程に、追いつめられて。

そんな彼を、どうして佐波が叱る必要があるのか。

彼に一番必要なことは、第三者による断罪ではなく、”償い”であると、当人でさえとくに気付いているというのに。

——…その可哀想な兵士の話は、自分の胸の中に生涯留めて、決して口外すまい…

と決意を固め、遠い目で一人頷く佐波。

そんな佐波の様子を、梓星は暫しぽかんと眺め——

ぼろ、とその磨かれた黒曜石のように美しい瞳から、涙を零した。

30（後書き）

たった一言に救われたり、囚われたり。

堰を切って流れ出した珠の涙が、白磁の頬に跡を残し、板張りの床に落ちてゆく。

幾筋も、幾筋も、煌めいて佳人の頬を濡らす様は、まるで一枚の美しい絵画のようで。

紙縫りの炎に照らし出されたその光景を、佐波は啞然と見上げた。

——涙……

涙とは、こんなに美しいものだっただろうか。

——美しい人が流す涙だから美しいか。それとも、心根の美しさが反映されるのか。

思わずぼんやりと涙についての考察を始めた佐波に対し、当の本人は自分の目から溢れるそれが涙だと気付くまでに、数秒を要したようだ。

零れ落ちた雫を掌に受け止めた彼は、束の間硬直し、

「——っ　み、見るな……！」

炎を宿したように、ぼつとその美しい顔を赤面させた。

慌てた様子で涙を拭う梓星に、すっかり魅入っていた佐波はハッと視線を逸らし、小声で「すみません」と謝る。

正直何に対して謝っているのか自分でも定かではなかったのだが、

泣き顔など男子が見られて心良いはずもない。
ましてや相手は皇帝陛下だ。人前で泣くという行為が『弱音』と同等に非奨励されていることは間違いない。

——ええっと…

逸らした視線を不自然に彷徨わせ、

——…どうしよう…

佐波は途方に暮れた。

この場合、やはり泣かせたのは自分なのだろうか。

特別傷つけるようなことを言ったつもりはないのだけど、もしかしたら心傷に触れてしまったとか…

或 あるいは、本当に泣く程辛かったのかも…

いやそれよりも、これって一体どれくらいの不敬に当たるのだろうか…

今日一日ですっかり社会的常識を失いつつある佐波は、麻痺した感覚を取り戻そうと、この国で最も高貴とされる御方を盗み見た。

しかし彼かの皇帝陛下は、懸命に涙を引っ込めようとしているのか、目を拭ったり上を向いたり、実に愛らしい動きを繰り返している。

確かにこの愛らしさでは、家臣たちがこぞって仕事を取り上げ、ちやほやしたくなる気持ちも分かる気がしてしまう。

本人にしてみれば、己の威厳の無さに悄然とってしまうのだろうか。

——もしかしたら、本人が思っている程、周りから邪険にされて

いるわけではないのかもしれない。

肯定的にとれば『可愛がられている』。

敢えて否定的に言うならば『子ども扱いされている』という表現の方がしっくりくるのではないか。

もちろんそれを利用してくる輩もいるのだろうか、やはり見逃せないことだとは思うが…

現実から逃れようとふらふらと思考を漂わせていた佐波だが、いつの間にかすっかり泣き止み、視界の端でちらちらとこちらに視線を寄せ、時折唸り、頭を抱えたかと思うと、真っ赤な顔で髪を掻きむしり始めた梓星の様子に、さすがに見過ごせなくなった。

——だ、大丈夫だろうか…？

「あの…」

心配になって佐波が声をかけようとした瞬間、梓星は何故だか飛び上がった驚き、掠れた声で叫んだ。

「そ、そろそろ、戻る！」

「え、あ、そう…ですね」

考えてみれば、彼がこの部屋に来てもう数刻は経ったはずだ。

何処からか壁をすり抜けて未だ聴こえてくる賑やかな笑い声からして、夜明けまではもう少しあるだろうが、そろそろ元の部屋に戻っておいた方が無難だろう。

しかし、なんだか最後になってぎくしゃくしたまま別れなければならぬのかと思うと、自分勝手にも胸が痛んだ。

しかも、もう二度と直接拝顔することも叶わないのだ。

考えて急速に沸き上がった寂寥を、けれど佐波はゆるりと首を振って押しとどめた。

——元々、すれ違はずもない人生だったのだ。

『たった一度の邂逅』ではない。一度でも出逢えたことに意義がある。

——見誤ってはいけない。勘違いしてはいけない。

互いに生きる場所が違っただけのこと。

朝と共に覚める夢でも、覚えていられるならば…記憶は残る。宝玉のような、記憶が。

無意識に右手を握りしめ——佐波は、かねてから気になっていた事をようやく口にした。

「……………ところで、どうやってお帰りに？」

「うつ」

痛いところを突かれたのか、呻きを上げた梓星に、佐波の頬が引き攣った。

まさか、本当に行き当たりばったりで来たのか…。

その行動力には感心するが、これが一国の皇帝ともなると少し不安にもなる。

目に見えて動揺している彼に、佐波は少し考え、これしかないか…と覚悟を決めた。——痛みに耐える覚悟だ。

「……………少し、御手を拝借しても？」

布団から動く右手を出してそう言つと、その意味を瞬時に解した梓星は目を見張つた。

「お前、起きられるのか？」

「いえ…どうでしょう。でも足の怪我は大したことないと思うので…」

「足？…まさか、立ち上がるつもりか？」

「はい」

自力では無理だが、誰かに手を借りればどうにかなる…ような気がする。

試してみないことには分からないけれど、固定されて全く動かせない左腕はともかく、両足は骨折もしていないようだから、痛みに耐えさえすれば立ち上がれるだろう。

と、無理矢理樂觀視して半ば自棄で伸ばした佐波の手を、梓星が恐る恐る掴んだ。

「腕を…どうすればいいんだ？」

「あの、ゆっくり上にひっぱ痛たたたたっ」

「す、すまん！」

怪我人など触つたこともないであろう彼は、やっぱりというか、力加減を知らなかった。

腕をいきなりぐーんと引つ張られ背中中の傷が嫌な音を立て、直後脳みそにがつんときた激痛に目から火花が飛んだ。

あまりの痛さに言葉もなく悶絶する佐波を、梓星がオロオロと見下ろし、

「む、無理に起き上がる事はないぞ？」

「…っ い、いえ、起きます」

喘ぐような激しい痛みをぐつと堪えて力強く言い切り、もう一度腕を伸ばす。

——今度は自分の方からも力を入れて、身体に負担をかけないようにして…

ここで起き上がることが出来れば、自分にとっても良いことだ。いつまでも寝たきりでは、面倒をかけている早音様にも迷惑をかけることになる。

そう奮起して伸ばした腕を、今度は先ほどよりももっと恐る恐る、そして優しく掴んだ梓星は、そつと身を屈めて佐波の脇に手を入れると、腕全体で背中を支えてゆつくりと佐波の半身を起こした。そのあまりにも自然で献身的な動作に、佐波は心底驚いた。

「あ、ありがとうございます…」
「いや…」

照れたのか、頬を赤らめて少し距離を取るように身を離れたが、掌で佐波の背中を支えることは忘れていない。

——凄いな…

今まで殆ど経験がないことでさえ、彼は本来の優しさと相手の立場を想像することで簡単に実行してしまった。

誰にでも出来ることではない。普段優しさに触れている人間でさえ、相手を慮　おもんばか　る立場になれば、直ぐにはいけないものだ。

改めて目の前の彼の才能に敬意を表しつつ、佐波はもう一度、今度は立ち上がる為に尽力を願った。

端から見れば使用人風情が高貴な御方に世話をされるといふ、特に彼の家臣が見れば卒倒ものの光景であるが、当の本人達は至って真剣だ。

互いに意志を通わせ、途中軸を歪ませながらもどうにか立ち上がる事が出来た佐波は、体中を駆け巡る鈍痛に堪えながら「お手を煩わせました」と笑顔で礼を述べた。

礼を受けながらも注意深く佐波の脇を支えていた梓星は、並び立つたことで下に離れた視線に驚いたのか、目を見開いて言う。

「……お前、随分小柄なのだな」

「そ、そうですか？」

並んでみれば、確かに梓星とは頭一つ分ほどの差が出来た。

座っている時はどこか少女のようにも見受けられた梓星の容貌も、こうして下から見ると、若竹のようにすくと伸ばされた背が如何にも青年らしい。

それでも、同年代の身体を酷使する仕事を持つ者よりもずっと華奢だし、労働の為の筋肉がついてない所為か嫋　たお　やかに見える。

——でも性別の違いもあるわけだし、私が特別小柄ということもないはずだけど……

小首を傾げると、梓星は鷹揚に頷き、

「ああ、お前くらいなら俺でもすっぱり——…そ、そそそそういえば、歳は幾つだ？」

不自然に話題を変えた。

それに内心戸惑いつつ、答える。

「17です」

「17っ？……見えんな。14、5かと思っていた」

「14、5……ですか？」

これもまた小首を傾げる。年相応だと思っただけど…

——…いや、もしかしたら、何か多大な勘違いをされているのでは…

何となく嫌な予感を覚えながらも、あまり言及したくない話題だったので、ここは敢えて触れずにおくことにした。

「…梓星様はお幾つですか？」

気を取り直して問うと、彼はなんとなくそわそわした様子で答えた。

「俺か？俺も17だ」

「同じ年なのですね」

やはりそうか、と笑みを零す佐波に、梓星は一瞬動きを止め、

「そうだな……」

ぽやんとした顔で呟く。

心此処にあらずなその表情に不安になってそつと袖を引けば、再び飛び上がらんばかりに驚かれた。

「ななななんだ！？」

「い、いえ…急ぎましようか」

「そ、そうだな！」

こちらも状況を思い出したのか、気を取り直した表情で、

「それで、立ち上がってお前は何をするつもりだ？」

「梓星様の足場になります」

「あしは？」

「お戻りになられるのでしょうか？」

何故だか要領を得ない顔の梓星に、天井を指差してみせる。

布団の敷かれた場所のほぼ真上。ぽっかりと一部分だけの闇がこちらを覗いている。

説明するまでもなく彼が降って来たその穴を、当事者である梓星はぽかんと見上げ？？？盛大に頬を引き攣らせた。

「まさか…お前が俺の足場になるというのか？」

確認せずにはいられないといった表情の梓星に、思わず「出来れば私も遠慮したいのですが…」と本音を洩らしつつ、佐波は部屋の壁端——四角い潜り戸を指差した。

「その扉は外から施錠されているようですし、ご覧の通り、この部屋には他に入出入り出来るような場所は…あ、天井以外ですが…ありません」

「施錠？…ああ、そうか、お前はまだ仕置きの途中なのだったか」
「え、ええまあ…それに、別の場所から出られるのは危険です」

いくらここが皇族御用達の遊郭であっても…この若き皇帝の顔を知っている者がそうそう居るとは思えないが…？用心に越したことはない。身分を抜きにしても、梓星は見た目だけでも十二分に高貴な姿をしているのだ。知らぬ場所に出たが最後、物取りや破落戸「ごろつき」の獲物となる可能性が高い。

となると、一番安全かつ最短で元の部屋に戻る道といえば一つしかない。

「ほどなく夜が明けます。その時に梓星様が不在とあっては一大事です。加担した男娼にも、とばっちり…じゃなかった、身代わりとなった兵士にも罪が及ぶのは間違いありません」

その時は、佐波など問答無用でこの場で首を落とされるだろう。思わず小さく笑ってしまったが、笑っている場合ではないなと気を引き締める。それでもここまで連続して死の危機に瀕していると、感覚が麻痺してくるものらしい。なんとも滑稽な人生だ、と開き直る気持ちすら湧いてきている。

そんな薄ら暗い感情が表に出ていたのか、梓星の表情に微かに怯えが見えて、佐波は慌てて心を隠した。

「そのような惨劇を生まぬ為にも、梓星様にはどうやっても元の御部屋へ戻って頂かねばなりません」

「あ、ああ…それは勿論」

「というわけで」

戸惑う梓星の言葉を遮り、今度は頭上にぼっかり開いた暗い天井穴を指差した。

「私を足場にして上ってください」

「……いや、無理だろう！」

一瞬絶句し、直ぐに声を荒げた梓星に、佐波は「大丈夫です」と請け負った。

「私も一度で上れるとは思っていません。体格差もありますし…私が足場として役不足であるのは承知しています。最悪上れない可能性もありますが…ですが、とりあえずやってみる価値はあるかと」「ち、違っ！そういう意味じゃない！」

何故だか酷く狼狽した様子でそう言い、もどかし気に梓星は首を振った。

「そうじゃない…別に上れるかどうかを気にしているんじゃない
…だから…あれだ」

「あれ？」

「その…だから、お前を…」

「…私を？」

「……踏み台には出来ないと、そう、言っているのだっ」

あとは分かれ！と顔を赤くして怒鳴られて、佐波はぽかんとした。

——わ、分かれと言われても…

…それは、私が役不足過ぎて不安だと言っているのだろうか。いや、上れるかどうかの話ではないと言っていたな。ならば、ただ単に私が足場なのが不満なのだろうか。ああ、それとも優しい彼のことだ。もしかしたら彼は私の身体のことを気遣ってくれているのか——

そこまで一気に思考を流して、最後に辿り着いた推測を頼りに言葉を返してみる。

「御気遣いは大変有り難いのですが、私でしたら大丈夫です。確かに多少は怪我に響くでしょうが…」

「だから！怪我のことでもなくて…！いや、怪我もちろん気になるが！」

「えっ、…違うのですか？」

どうしたことが。梓星の意図が全く読めない。

困って眉を下げると、梓星も同じように眉を下げた。まるで「どうしてお前は分からないんだ？」と言外に言われているようで居たたまれない。案の定、彼はぷいっと横を向いて「もういい！」と一声

上げた。正直全然良くはないが、どうやらこの方法が不興を買っていることは間違いないようだ。

——でもなあ…

他の方法、といっても、すぐに思い浮かぶものは無い。天井までの高さは、佐波と梓星が肩車してようやく上れる程だ。だが体格差から梓星が佐波を肩車することは出来ても、逆は無理だろう。佐波が先に上って梓星を引っ張り上げるという方法も考えたが、左肩の怪我の所為でそれも無理だとすぐに気付く。せめて梁か何かがあれば、布団を破って綱代わりにするのだが…生憎天井の穴の先は深い闇で、闇雲にしてどうにかなるとは思えない。

——梯子なんて贅沢は言わないから、せめて足場となる台の一つでもあればいいのだけどなあ…

分かっていながらも期待を込めて見回した室内には、やはりというか、当たり前のように何も無い。あるのは佐波の布団くらいだ。これを折り畳んだとしても到底天井には届かないし…

…やはり説得するしかないか…と心を構え、口を開きかけた佐波は、ふと、疑問を覚えた。

「…あの、梓星様」

「なんだっ？」

噛み付くような勢いで問い返されて口籠りつつ、どうにか疑問を言葉にする。

「…この場所を教えたという男娼は、帰る方法については何も言っ

ていなかったのでしょうか」

切っ掛けを掴んだ所為か、言葉にしている間も、まるで水門を開けられた貯水湖のように疑問がどんどん溢れてくる。

—— そうだ。考えてみれば不審な点は幾つもある。

どうしてその男娼は、皇帝を匿うという大胆な行動をとったのだろう。いくら欲に目が眩もうと、自身にも危険が多い賭けだ。失敗すれば命がないことに、まさか気付いていない理由「わけ」も無い。ましてや、この部屋への着き方を教えておきながら、帰る方法を何一つ教えていないというのも…

—— いや、そういえば、男娼はここを『空き部屋』だと言っていたらしい。

その男娼が私の存在を知らないのは至極当たり前のことだから、彼の発言自体には不思議はないが……ということは、私がここに入る前は、天井に上る為の台になるようなものが部屋にあったのだろうか。

—— もしや、私が部屋に入る為に撤去された、とか…？

ヒヤリと背中を撫でる推測を慌てて振り払って、佐波はもう一つ別の疑問を提示した。

「それに、梓星様は『中間階』を通ってこられたと仰っていました
が…」

「あ、ああ」

「…天井裏に通じる『中間階』というのは、もしや『隠し通路』だったのではないのでしょうか」

「隠し通路？」

きよとした梓星は、だがすぐに「ああ」と納得した表情を見せた。

「そうだろうな。道理で妙な道を辿ると思った」

「…お気づきになられませんでしたか？」

「うん。そもそも『中間階』なるもの自体、初めて通ったからな」

皇宮にも『隠し通路』はあるが、このような木造ではないし、と平然と言われて反応に困る。

そうだった。梓星はただの貴族ではなく、皇族なのだ。一般の建物…遊郭がそれに含まれるとは思わないが…の構造についてなど知るはずも無い。

梓星の「そもそも中間階とはなんなんだ？」との問いに、佐波は出来るだけ失礼にならないように言葉を選んで、簡単に解説することにした。

「一階と二階、二階と三階…などの建物上下の間に作られる空間です。普通の一般家で『中間階』を持つ建物は滅多にありません。無駄な空間をわざわざ作るような余裕はありませんし、管理も面倒ですから。でも、家格が大きくなりますと、中間階を好んで作る者も多いです」

「なぜだ？」

「防音対策というのもありますが…隠し部屋や物置に使えるからというのが、一番の理由のようです」

佐波の暮らしていた貴族家にも中間階はあった。一族の者と少しの信頼を受けた使用人しか知らない隠し通路兼隠し部屋として使用されていたが、一番利用していたのは恐らく佐波だ。兄妹達の執拗な苛めから逃げるのにはうってつけだったから。

——あの頃は、よく以織と一緒に隠れ回っていたな…

ふと懐かしい記憶が過って、無意識のうちに頬が緩んだ。

二人でいれば、それだけでどんな苦境も楽しめた。逃げて、隠れて、それでも見つかって、また逃げて。

佐波にとっては有り難い道連れだったが、以織はどうだっただろう。兄妹の側についてさえいれば、彼は他の使用人たちから疎まれることも、大変な仕事を押し付けられる必要も無く、平穩無事に過ごせていたはずなのに。

当時は彼が離れてしまうのが怖くて言い出せなかったが、本当は何度か伝えようとしたのだ。

私の側にいる必要はないと。そこまで尽くしてもらえる程の価値は、私にはないと。

——もし伝えていたら。

心に冷たい風が吹き込む。雪。あの日の粉雪が目前を覆う。

——彼が身代わりとなって、遊郭に売られることはなかったのだろうか——

「——か？」

「…えっ？」

ハッと我に返ると、腕組みをした梓星が怪訝な表情で見下ろしていた。

いつの間にかぼんやりしていたらしい。未だ霞がかったような頭を

少し振って、佐波は「すみません、もう一度…」と聞き返した。
「だから」と梓星は続ける。

「この郭の『中間階』が『隠し通路』だとして、それが何か手がかりになるのか？」

「え、ええ。…手がかりというよりは、その男娼の話が不審である
いうことの証明になるかと」

「不審か？」

佐波は「はい」と答え、気を取り直した。

「『隠し通路』をその男娼が知っていたというのは、少々理屈にあ
いません」

「…そうか？」

遊郭の者なら誰でも知っていると置いていたぞ、と言って眉根を寄
せる梓星に、佐波は首を振った。

「いいえ。そのはずは…多分、ありません。もし遊郭で働く者が皆
その存在を知っていたら、遊郭の秩序が崩れてしまいます」

「秩序?…というത്？」

「具体的には窃盗や盗聴…手引きもあるかもしれません」

その言葉に、梓星が瞬く。

「手引き…客と逃げ出すということか」

「はい。私も遊郭の事情に明るいわけではありませんが…少なくとも、遊郭を経営する側からすれば、遊女男娼にそのような可能性のある道をわざわざ教えるでしょうか」

思い込みは危険だと思うが…当時布津随一とはいえ、田舎の貴族であつた佐波の生家でもそうだったのだから、要人も多く訪れるという皇都の遊郭でその掟がないというのは、逆に不可解だ。

それとも、その『中間階』の入り口は余程見つけ易い場所に——誰でも気付けるような場所にあつたのだろうか。と思つて問うと、梓星は眉根を寄せたまま「いや」と応えた。

「男娼が床板を開くまで、そこに扉があることにも全く気付かなかつた。見事に部屋の景観に融け込んでいたしな」

「ならば、自分で探すことはまず不可能ですね…」

殆ど無意識に呟きながら、今まで伝え聞いた『遊郭』についての情報を頭の中で並べ立て、一つ一つ弾いていく。

遊女男娼の部屋割りについて???確かこれは、何処から流れの行商人に聞いたのだったか、それとも豪商家の使用人に聞いたのだったか???とにかく多くの遊郭では、遊女男娼は自分の『部屋』を与えられ、そこで寝起きし、夜にはその部屋で客を取るのだと聞いた気がする。そういう遊女男娼は『部屋棲み』と呼ばれ、他の部屋を与えられない者達よりも良い待遇を受けるのだとか…

だが、それがこの遊郭に…皇国随一の遊郭街に当てはまるかどうかは分からない。ここに居る全ての遊女男娼は全州全皇国内最上級で、その意味では全ての者達に部屋が与えられていてもおかしくないのだ。

暫し考え、埒が明かないと気付くと、佐波は自分よりもよっぽど詳しいであろう目前の少年に問つた。

「梓星様は、こちらに来られる前は、最上閣にいらしたのでしょ

か」

「ああ、そうだが？」

「ということは、その男娼というのは、所謂”大夫「だゆう」”だったというわけでしょうか」

男娼大夫と遊女花魁。どちらも遊郭の一番人気、品も格も全てが最上と認められた者のことだ。

当たり前だが、相応に美しく博識でなければ務まらない。彼らは遊郭の生きる看板であるから、郭主はを拳「こそ」って飾り立て、贅の限りを与えるそうだ。部屋だって最上級…つまるところの最上閣に逐「お」わすのが自然というもの。そう思つての言葉だったが、何故だか梓星は困惑したように眉根を寄せた。

「大夫だったというか……大夫になった、というか……」

「” なった ”？」

「…お前、知らないのか？」

不審気に問われて、ぎくりとする。もしかして、何か常識という名の地雷を踏んでしまったのだろうか。

言葉を探して視線を彷徨わせた佐波をどう思つたのか（恐らくまた勝手に推測を働かせたのだろうが）梓星は「ああ…」と同情の視線を寄せし、

「そうか、お前はまだ遊郭「ここ」に来て日が短いのだっただな……」

知らないのも無理は無い、と慈悲深い声で呟かれて、佐波は余計に心拍数が上がるのを痛い程感じながら、こくりと頷いた。ここに来て数日なのは嘘ではないし、彼が思っている通り、遊郭に突き出される日もそう遠くない（らしい）。それでもなんとなく嘘についている気分になつて俯くと、それも梓星は都合良く受け取ってくれた。

「す、すまない…辛いことを思い出させたか…。その怪我も、掟を知らなかったが故なのだろう…惨いことだ…」

「ええつと、ええつと…！そ、それで、” なった ” というのは…？」

どのような惨い想像をしているのか、曲解が進み過ぎて涙まで浮かべ始めた梓星に慌てて先を促す。

梓星も我に返ったようで、表情を引き締めて頷いた。

「ああ、そもそも、この遊郭街には” 遊女花魁 ” はいても、” 男娼大夫 ” は常時存在するわけではない」

「…？いつも居るわけではないと？」

「そうだ」

首を傾げる佐波に、梓星は明確に言葉を紡いだ。

「男娼大夫は、全て皇帝の意向次第？？？皇帝の愛妾を” 大夫 ” と呼ぶのだ」

32（後書き）

大変遅くなりました………なんて言葉じゃもう許されないくらい遅くなりましたっ（滝汗）

私事で色々ありまして…現在無職放浪中（居候中）です。うふっこの機にずばばばと書いていこうと思うので、どうぞよろしく願います！

とりあえず居候先にネット環境がないのでマクドナルドの無線LANを使って更新作業ひゃっほー！

…次回の更新は出来るだけ早くがんばりますw

*お返事大変大変遅くなった皆様、本当に申し訳ありませんでしたー！（土下座）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5840j/>

溟楼綺譚

2011年10月10日11時31分発行